

荒屋敷久保(2)遺跡
横沢山(1)遺跡
横沢山(2)遺跡

-国道45号八戸南道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-

2009年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成18年度から国道45号八戸南道路建設事業予定地内の発掘調査を実施しています。本報告書は、平成18・19年度に調査した八戸市荒屋敷久保(2)遺跡、階上町横沢山(1)遺跡、横沢山(2)遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査の結果、この3遺跡から縄文時代の落とし穴と考えられる土坑などが検出され、広範囲にわたって狩猟域として使われていたことが明らかになりました。また、横沢山(1)遺跡の水辺に面した地点からは、縄文時代早期から弥生時代までの各時期の遺物が出土しており、その水源を永くに亘り利用していたことが窺われます。また、本県では例の少ない大木3式土器も出土しており、東北南部の大木系文化圏との関連も注目されます。

この調査成果が、埋蔵文化財の保護と研究に広く活用され、この地域の歴史教育や文化財保護意識の高揚につながることを期待します。

最後に発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力を賜りました関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤博文

例　　言

- 1 本報告書は、国道45号八戸南道路建設事業に伴い、平成18・19年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査した、荒屋敷久保(2)遺跡、横沢山(1)遺跡、横沢山(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 荒屋敷久保(2)遺跡の所在地は、青森県八戸市大字金浜字土橋19-6外、青森県遺跡番号は03283、横沢山(1)遺跡の所在地は、青森県三戸郡階上町大字道仏字横沢山1-176外、青森県遺跡番号は63076、横沢山(2)遺跡の所在地は、青森県三戸郡階上町大字道仏字横沢山3-6外、青森県遺跡番号は63079である。
- 3 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター小田川文化財保護主幹と平山文化財保護主査が担当し、執筆者名を文末に記した。
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 5 剥片石器のうち平成18年度出土分の実測図は、株式会社アルカに委託した。
遺物写真撮影は、シルバーフォト及びスタジオエイトに委託した。
放射性炭素年代測定(荒屋敷久保(2)遺跡)は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 6 本報告書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行5万分の1地形図「八戸東部」・「階上岳」を複製して使用した。
- 7 基本図面及び遺構内堆積土の注記には、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2002年版(農林水産省農林水産技術会議事務室監修)を使用した。
- 8 本報告書における図表中での表現は次のとおりである。
 - 1) 報告書に記載した座標値は世界測地系(JGD2000)に基づく。挿図中の方位は座標北を示し、複数の遺構が図示される場合は遺構毎に方位を示した。
 - 2) 遺構図版の縮尺は1/60を基本としたが、小規模遺構の縮尺は1/30としたほか、配置図などは任意に定め、スケールと縮尺率を図中に示した。
 - 3) 掲載遺物については、土器は縮尺1/3を基本としたが、大型土器(破片を含む)は縮尺1/4で掲載した。石器の縮尺は、剥片石器類1/2、礫石器類1/3を基本としたが、大型礫石器は1/4で掲載した。
 - 4) 遺物写真は縮尺不同で、個々の遺物番号は挿図番号と一致する。(図5-13=5-13と表記)
- 9 引用文献については巻末に収めた。
- 10 発掘調査及び報告書作成における出土品、実測図、写真等は青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言および御協力を頂いた。銘記して感謝申し上げます。(順不同・敬称略)
階上町教育委員会・森　淳、八戸市教育委員会・大野　亨、小保内裕之

目 次

序

例言

目次

挿図目次・写真図版目次

第1編 調査概要	1
第1章 調査要項	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査要項	5
第3節 調査の経過と方法	6
第4節 調査区の層序・検出遺構と出土遺物の概要	8
第2編 荒屋敷久保(2)遺跡	10
第1章 検出遺構	11
第1節 土坑	11
第2節 溝状土坑	14
第3節 溝跡	19
第2章 出土遺物	19
第3章 理化学的分析	20
第3編 横沢山(1)遺跡	23
第1章 検出遺構と出土遺物	25
第1節 土坑	25
第2節 溝状土坑	27
第3節 野外炉	37
第4節 集石遺構	38
第5節 焼土跡	40
第6節 炭窯	42
第2章 出土遺物	44
第1節 出土土器	44
第2節 出土石器	57
第4編 横沢山(2)遺跡	70
第1章 検出遺構と出土遺物	71
第1節 遺構	71
第2節 出土遺物	71
出土遺物観察表	72
引用・参考文献	77
写真図版	78
報告書抄録	105

挿図観察表目次

図1 遺跡位置	2	図36 横沢山(1)遺跡出土石器(3)	62
図2 遺跡の地形と路線・調査区	3	図37 横沢山(1)遺跡出土石器(4)	63
図3 基本層序	9	図38 横沢山(1)遺跡出土石器(5)	64
図4 荒屋敷久保(2)遺跡遺構配置	10	図39 横沢山(1)遺跡出土石器(6)	65
図5 土坑(1)	12	図40 横沢山(1)遺跡出土石器(7)	66
図6 土坑(2)	14	図41 横沢山(1)遺跡出土石器(8)	67
図7 溝状土坑(1)	16	図42 横沢山(1)遺跡出土石器(9)	68
図8 溝状土坑(2)	17	図43 横沢山(1)遺跡出土石器(10)	69
図9 溝跡	18	図44 横沢山(2)遺跡遺構配置図・検出遺構図	
図10 荒屋敷久保(2)遺跡出土遺物	19		70
図11 横沢山(1)遺跡遺構配置	23	図45 横沢山(2)遺跡出土遺物	71
図12 横沢山(1)遺跡A・B区遺構配置	24	焼土跡一覧表	41
図13 土坑	26	荒屋敷久保(2)遺跡出土遺物観察表	72
図14 溝状土坑(1)	29	横沢山(1)遺跡出土遺物観察表	72
図15 溝状土坑(2)	31	横沢山(2)遺跡出土遺物観察表	77
図16 溝状土坑(3)	34	荒屋敷久保(2)遺跡写真図版	78
図17 溝状土坑(4)	36	横沢山(1)遺跡写真図版	82
図18 野外炉	38	横沢山(2)遺跡写真図版	91
図19 集石遺構	39	荒屋敷久保(2)・横沢山(1)遺跡 出土遺物写真図版	92
図20 焼土跡	40		
図21 横沢山(1)遺跡遺構内出土遺物	41		
図22 炭窯	43		
図23 横沢山(1)遺跡出土土器(1)	45		
図24 横沢山(1)遺跡出土土器(2)	46		
図25 横沢山(1)遺跡出土土器(3)	47		
図26 横沢山(1)遺跡出土土器(4)	49		
図27 横沢山(1)遺跡出土土器(5)	50		
図28 横沢山(1)遺跡出土土器(6)	52		
図29 横沢山(1)遺跡出土土器(7)	53		
図30 横沢山(1)遺跡出土土器(8)	54		
図31 横沢山(1)遺跡出土土器(9)	55		
図32 横沢山(1)遺跡出土土器(10)	56		
図33 横沢山(1)遺跡出土土器(11)	57		
図34 横沢山(1)遺跡出土石器(1)	58		
図35 横沢山(1)遺跡出土石器(2)	60		

第1編 調査概要



国土地理院撮影の空中写真(C TO-75-18 C 16B-27)を加筆
昭和50年度撮影・縮尺は1/15,000

遺跡周辺空中写真

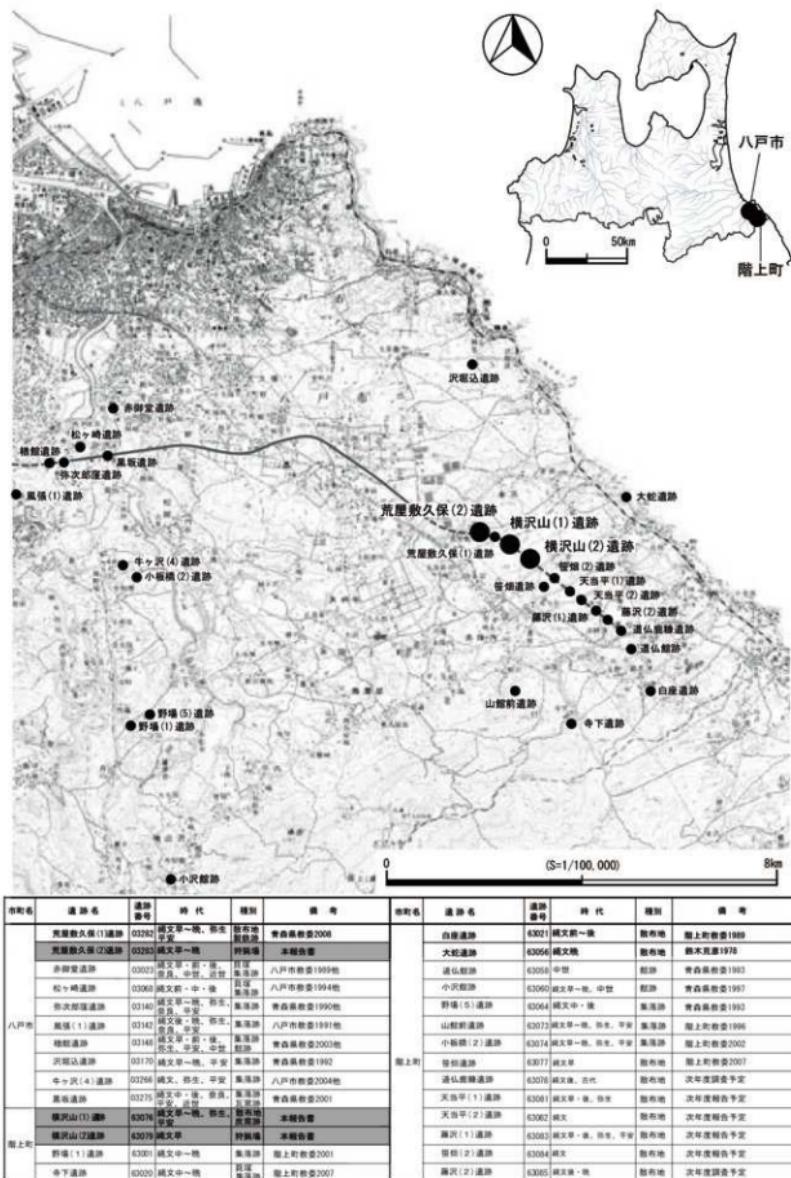


図 1 遺跡位置

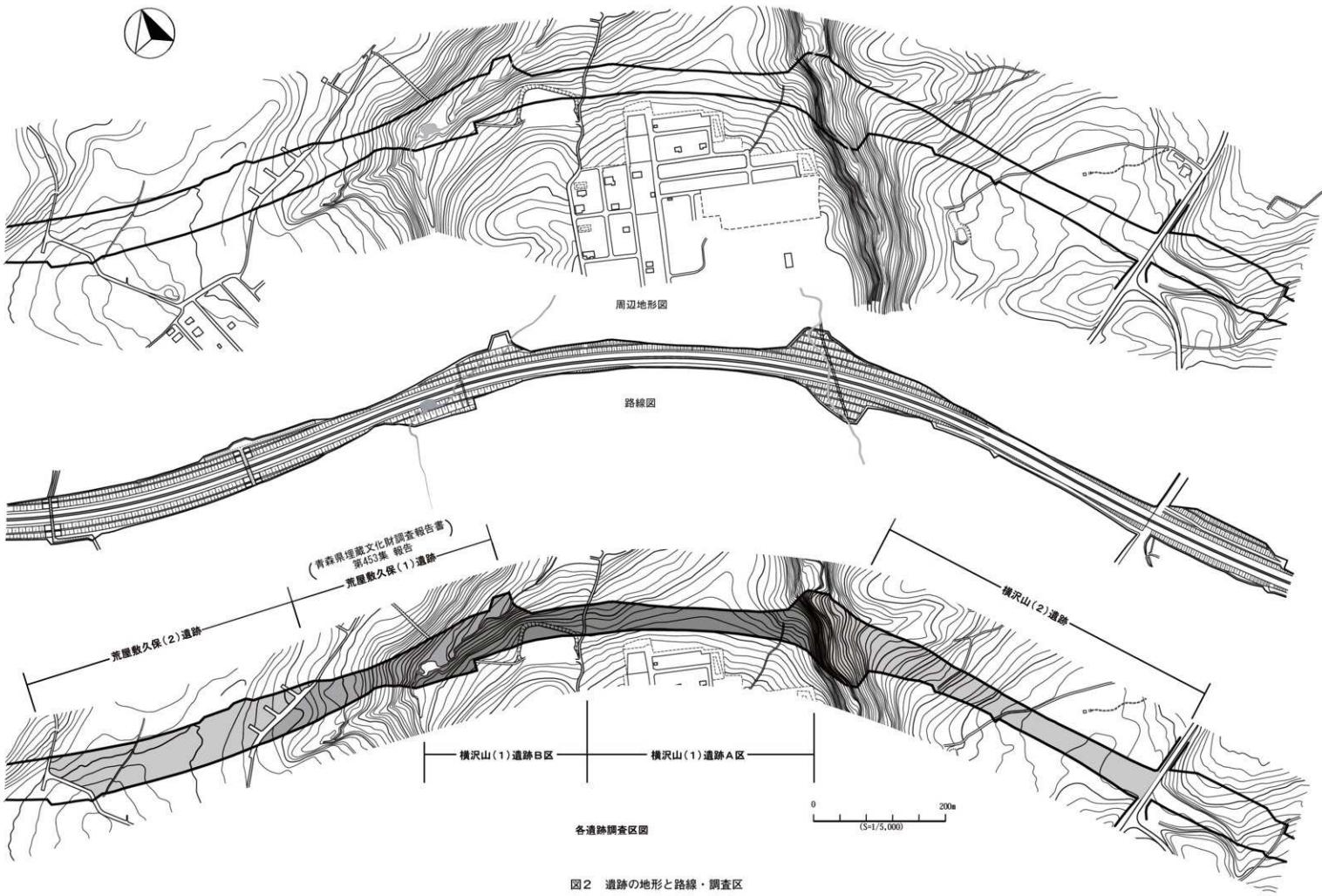


図2 遺跡の地形と路線・調査区

第1章 調査要項

第1節 調査に至る経緯

国道45号八戸南道路は、国土交通省青森河川国道事務所が国道45号の渋滞緩和と移動時間の短縮をめざし、高規格幹線道「八戸・久慈自動車道」の一環として整備するもので、八戸市大字妙の八戸南インターインターから階上町大字道仏に至る延長約8.7kmの自動車専用道路である。平成7年に事業着手され、平成15年から工事が開始されている。

当該事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、青森河川国道事務所と青森県教育庁文化財保護課により協議が続けられ、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが担当して、横沢山遺跡外の発掘調査を実施することとなった。しかし、横沢山遺跡の範囲外の事業予定地内で新たな遺物の散布が確認されたことから、関係機関で今後の調査方針について協議された。

これにより、当初は横沢山遺跡と尼寺沢遺跡の発掘調査を行う予定であったが、本事業工事の優先順位から、新規発見の遺跡を荒屋敷久保(1)遺跡として登録し平成18年度中に発掘調査することとし、さらに荒屋敷久保(1)遺跡の西側に発見された遺跡を荒屋敷久保(2)遺跡として登録し、翌年度に発掘調査することとしたほか、横沢山遺跡の一部と尼寺沢遺跡の調査についても翌年度に繰り越すこととなった。また、尼寺沢遺跡として調査した区域は、県遺跡台帳に登録されている尼寺沢遺跡の範囲から外れていることと、所在地の小字名も横沢山であることから、横沢山(2)遺跡として新規登録することとなり、横沢山遺跡は、横沢山(1)遺跡として名称変更することとなった。

なお、横沢山(1)遺跡外に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成18年3月及び平成19年4月に青森河川国道事務所長名で提出され、平成18年4月及び平成19年5月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第2節 調査要項

1 調査目的

国道45号八戸南道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する荒屋敷久保(2)遺跡、横沢山(1)遺跡、横沢山(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成19年4月24日～平成19年10月30日

3 遺跡名及び所在地 荒屋敷久保(2)遺跡（青森県遺跡番号03283）

八戸市大字金浜字土橋19-6外

横沢山(1)遺跡（青森県遺跡番号63076）

三戸郡階上町大字道仏字横沢山1-176外

横沢山(2)遺跡（青森県遺跡番号63079）

三戸郡階上町大字道仏字横沢山3-6外

4 調査面積 荒屋敷久保(2)遺跡 12,000m²

（調査対象面積 26,700m²）

横沢山(1)遺跡 6,800m²

(調査対象面積 7,800m²)

横沢山(2)遺跡 2,258m²

(調査対象面積 26,000m²)

5 調査委託者 国土交通省東北地方整備局 青森河川国道事務所

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 藤沼 邦彦 元、国立大学法人弘前大学人文学部教授 (考古学)

調査員 松田 泰典 東北芸術工科大学

文化財保存修復研究センター長、教授 (分析科学)

佐々木辰雄 青森県立八戸中央高等学校教諭 (地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 末永 五郎 (平成20年3月退職)

次長 三宅 徹也 (平成20年3月退職)

総務G.L 櫻庭 孝雄

調査第二G.L 工藤 大 (現・次長)

文化財保護主幹 小田川哲彦

文化財保護主査 平山 明寿

調査補助員 楠美 匠、館山 朝子、村上由美子、鈴木 貴仁

第3節 調査の経過と方法

調査経過

当該事業の優先順位から、荒屋敷久保(2)遺跡から発掘調査することとなり、4月24日から調査を開始した。荒屋敷久保(2)遺跡の表土撤去の都合から、5月第2週まで横沢山(1)遺跡側で前年度の残土処理や検出作業などを行ない5月15日から荒屋敷久保(2)遺跡の本格的な調査に入った。前年度の確認調査で遺構が検出された調査区西側を主体に、面的な掘り下げと検出作業を行ったが、遺構は広がらず、遺物もほとんど出土しない状況であった。このため、東側はトレンチ調査にとどめ、6月29日で荒屋敷久保(2)遺跡の調査を終了した。

7月からは横沢山(1)遺跡の調査に入った。前年度にはB区の西側緩斜面部の調査を終えており、今年度は、町道から西側の丘陵平端部が調査対象である。この地点には産業廃棄物が約1,800m²の範囲で路線を覆っており調査の障害となっていたが7月上旬には廃棄物処理が完了し、まず町道側の約800m²の掘り下げと検出作業を行った。この範囲に検出された遺構と遺物は少なく、削平が第Ⅲ層まで及んでいることも判明した。7月下旬には町道側範囲の精査が終了し、8月にはこの範囲を堆土置き場として、丘陵平坦部の掘り下げと遺構の検出作業に入った。前年度の西側緩斜面部の遺物出土状況からは、丘陵の平坦部に竪穴住居跡などの集落を構成する遺構の存在が予想されたが、そのような遺構は検出されず、落とし穴とされる溝状土坑が散漫な状態で検出されただけであった。遺物も同様に散漫で、多くは細片で出土した。9月上旬には第Ⅳ～V層までトレッジを設定して掘り下げたが、

前年度に確認した縄文時代早期前葉の土器も広がりを見せず、数点の出土に止まった。また、小川に面した斜面からの出土遺物も少なく、急傾斜で遺構がつくられている可能性も低いことからトレンチ調査に止めた。

9月中旬には、横沢山(2)遺跡の調査に入ったが、背丈ほどの雑草や雑木が密集しておりその処理に時間を要した。前年度に路線の南側を試掘しており、今年度は路線の北側を主体にトレンチを設定して掘り下げと検出作業を行ったが、2基の土坑と礫石器1点が出土しただけであった。10月最終週に危険箇所を埋め戻し、横沢山(2)遺跡の南側路線内に次年度用調査器材を越冬し、予定どおり10月30日に調査を終了した。平成19年度の調査対象総面積は約60,500m²であり、3遺跡分の約21,058m²を調査した。

調査の方法

荒屋敷久保遺跡(2)遺跡と横沢山(1)遺跡の調査はグリッド法を用い、公共座標に合わせた基準となるグリッド杭を業者委託で打設した。この基準杭を基に調査区を区割りし、大区画には木杭を用いさらにその中に4m四方のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に向けてアルファベットを、西から東に向か算用数字を付し組み合わせて呼称した。横沢山(1)遺跡は平成18年度に調査した荒屋敷久保(1)遺跡と小川を介して分けられるが、一連のグリッドの呼称で調査している。

標高値は、委託で打設した基準点上に同時に設け、各遺構精査および地形図作成の必要に応じてさらに移動して用いた。粗掘り作業は人力を主体に行なったが、一部の表土撤去と無遺物層の掘り下げおよび排土の移動には重機を用いた。遺構は検出時に各遺構の略号と検出順に番号を付した。略号は、土坑=S K、溝状土坑=S V、焼土跡=S N、埋設土器=S R、用途不明遺構=S Xとし、これ以外の野外炉と集石遺構には略号を付していない。なお、調査時に用途不明遺構=S Xとした遺構は炭窯と考えられることから、本文中では炭窯として記載している。遺構の精査は四分法と二分法を基本として各遺構の規模と形状に応じて行った。土層観察は、「新版標準土色帖」を用い、土色とマンセル記号を併記し特徴を注記した。層順については、遺構の堆積土には算用数字を用い、調査区全体の自然層についてはローマ数字を用いた。遺構の作成は簡易造り方を主にしたほか、トータルステーションでも位置を記録した。縮尺は1/20を基本とし種類や規模に応じて定めたほか、地形図も任意に定めた。遺物の取り上げは、遺構およびグリッド単位ごとに各層単位で行うことを基本とし、機器で位置を記録した。遺構とそのほかの写真撮影は、デジタルカメラを主体とし、35mmカメラも併用した。35mmカメラではモノクロームおよびリバーサルフィルムで同方向から同じ枚数を撮影した。

横沢山(2)遺跡はトレンチ調査とし、各トレンチの位置は路線幅杭の座標値をもとにトータルステーションで記録したほか、検出遺構は簡易造り方測量で作図し、前記の機器で位置を記録した。

整理の方法

荒屋敷久保遺跡(2)遺跡、横沢山(1)・(2)遺跡の報告書作成に係わる整理作業は、平成19年4月から始められた。遺物のうち、平成18年度横沢山(1)遺跡で出土した剥片石器については、実測を委託したが、その他の遺物については、水洗・注記・復元・実測・トレースなどは整理作業員、及び補助員と職員が行った。遺物の写真撮影は委託したが、一部は職員が撮影した。図版についてはデジタルデータと台紙張りを併用し、職員が行った。

(小田川)

第4節 調査区の層序・検出遺構と出土遺物の概要

調査区の層序

荒屋敷久保(2)遺跡と横沢山(1)・(2)遺跡の層序は、前年度に刊行した荒屋敷久保(1)遺跡の層序と基本的に変わることはない。しかし、各遺跡ともに近世から現代に行われた攪拌および削平により、特に第Ⅰ層～第Ⅳ層までの上位堆積層に各地点で欠落する層があったり、各層の厚さに多少の違いが見られた。以下に、荒屋敷久保(1)遺跡の層序を基準に層序の違いを記す。

荒屋敷久保(2)遺跡では路線の南北両サイドで土層確認を行ったが、北側では第Ⅲ層に相当する中振浮石粒を混入する第Ⅲ層が広範囲に欠落しており、南側では南部軽石を混入する第Ⅳ層の黒褐色土が欠落している。これら欠落する層の範囲等は捉えることはできなかったが、調査区のほぼ全域に円形ないしは不整形の植え込み痕と小型重機による掘削穴も確認されており、ほぼ平坦な台地上が虫食い的に地形改変されている。縄文時代および古代の遺構はすべて第V層面で検出しているほか、数点の土器は第Ⅱ層中から出土している。

横沢山(1)遺跡は路線の南側で土層確認を行った。前年度にB区として調査した範囲のうち西側のグリッド40～50ラインは削平されており、その削土は小川の湧水地点に向かって下る斜面に、最大約2mの厚さで盛土されていた。盛土下に遺物包含層が残っていたが、部分的に植え込みによる攪拌がみられた。また、産業廃棄物が集積されていた範囲も削平および掘削されており、廃棄物の下の大半が直に第Ⅳ層ないしは第V層の状態であり、植え込み痕も數カ所で確認されている。A区はトレーニング調査にとどめ土層は略図のみで確認した。欠落する層はないが、東端の松森川に面した地点では第Ⅲ層が厚く、また第Ⅳ層とV層の間に二次堆積した褐色土が2mを超える厚さで堆積している。

横沢山(2)遺跡もトレーニング調査にとどめ土層は略図のみで確認した。林道から北側の緩斜面では、欠落する層ではなく、第Ⅱ・Ⅲ層の黒色土が厚い。南側の平坦面は、表土直下に第Ⅳ層ないしはV層がみられ所々削平されている。

遺構と遺物の概要

荒屋敷久保(2)遺跡は、八戸市南端の標高122～127mの台地上にあり、平成18年度の確認調査により発見登録された遺跡である。発掘調査により、縄文時代の溝状土坑8基、土坑7基、近代の溝跡1条を検出している。土坑には、縄文時代の円形落とし穴と、炭素年代測定により古代に比定されるものがある。遺物は少なく、縄文時代晩期の土器が数点まとめて第Ⅱ層中から出土している。

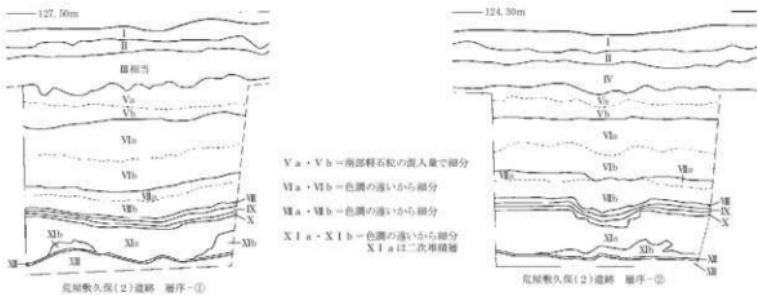
横沢山(1)遺跡は、階上町松森川から西側の標高95～100mの台地上にあり、八戸市と階上町の境となる松森川の支流の小川に面している。平成18年度に町道から東側のA区と西側B区の一部を調査し、平成19年度にB区の残りを調査している。平成18年度は範囲確認のためのトレーニング調査を主に行い、遺構と遺物が密な範囲を面的に調査した。A区からは縄文時代の溝状土坑2基、近代の炭窯2基と土坑1基を検出している。遺物は石鎚が1点出土しただけである。B区は2ヶ年の発掘調査により、縄文時代の溝状土坑20基、土坑7基、野外炉1基、焼土跡5基、古代の炭窯5基が検出した。小川に向かう緩斜面地から各時期の遺物が出土していることから、グリッド50ラインから東側の平坦な台地縁辺には、竪穴住居跡の存在が予想されたが検出されなかった。

遺物は、縄文時代早期～晩期と弥生時代の土器と石器のほか少量の鉄滓と古銭数点を含み、段ボ-

ル箱にして42箱分が出土した。出土遺物の大半は前年度に調査した、B区西側の小川縁辺の低地部から出土しているが、この地点は前述のとおり盛土されており、盛土中には各時期の遺物が混在していた。盛土下の層は遺物を包含するプライマリーな層であった。しかし、第IV層までの各層の厚さは薄く、第II・III層中には各時期の土器が混在し、第IV層とV層上面からは早期中葉の土器が出土している。台地縁辺の平坦部からの出土遺物は少なく、第V層の上面から早期前葉の土器が出土している。

横沢山(2)遺跡は、松森川を介し横沢山(1)遺跡の東側の台地上にある。トレンチ調査により、绳文時代の溝状土坑1基と落とし穴と考えられる土坑1基を検出した。遺物は、第IV層下位から礫石器が1点出土しているが、土器は出土していない。

以下に、各遺跡ごとに検出遺構と出土遺物について記述するが、横沢山(1)遺跡A区で検出された近代の炭窯と土坑については割愛した。
(小田川)



基本層序

- I 黒色土(10W1.7/1-2/1) 表土
- II 黒褐色土(10W2.2) 下位からの中微粒石混入
- III 黒褐色土(10W2.3) 中微粒石層に対応できる
- IV 黒褐色土(10W2.3) 下位からの中微粒石混入
- V 黒褐色土(10W2.2-2.3) 南部輕石層に対応できる
- VI 黑褐色土(10W2.3) 南部輕石層と同様の堆積層
- 疊層 黃褐色土(10W5.6) 八戸火山灰層と八戸火山灰層の二次堆積
- 疊層 黄褐色土(10W6.9) 八戸火山灰層に相当
- IXa 明黄褐色粘土(10W7.6) 八戸火山灰層に相当

- XI 層 明黃褐色粘土(10W7.6) 八戸火山灰Ⅱ層に相当
- X I層 一白色土に亘る黄褐色粘土(10W4.1-7.7) 八戸火山灰Ⅰ層に相当
- X II層 深灰褐色粘土(10W4.1-5.7) 八戸火山灰Ⅰ層と高瀬火山灰の間隙層(暗色部)
- X III層 明褐色粘土(10W6.8) 高瀬火山灰上層
- X IV層 一褐色粘土(7.5W6.8) 高瀬火山灰
- X V層 一褐色粘土(7.5W6.8) 高瀬火山灰と八戸火山灰
- X VI層 一褐色粘土(7.5W7.6) 高瀬火山灰
- X VII層 一褐色粘土(7.5W8.5) 高瀬火山灰
- X VIII層 明褐色粘土(7.5W8.5) 高瀬火山灰
- (X VI層とX VIII層の間に堆積層、間隙層がある)

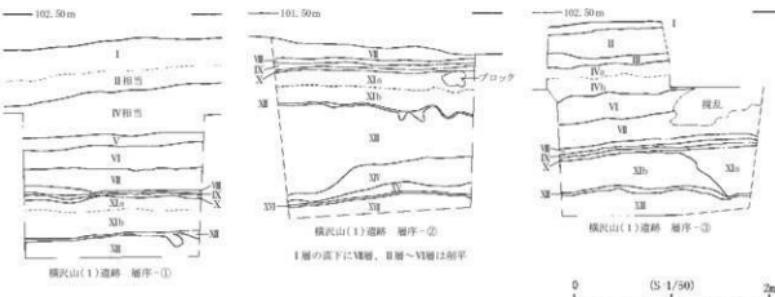


図3 基本層序

第2編 荒屋敷久保(2)遺跡

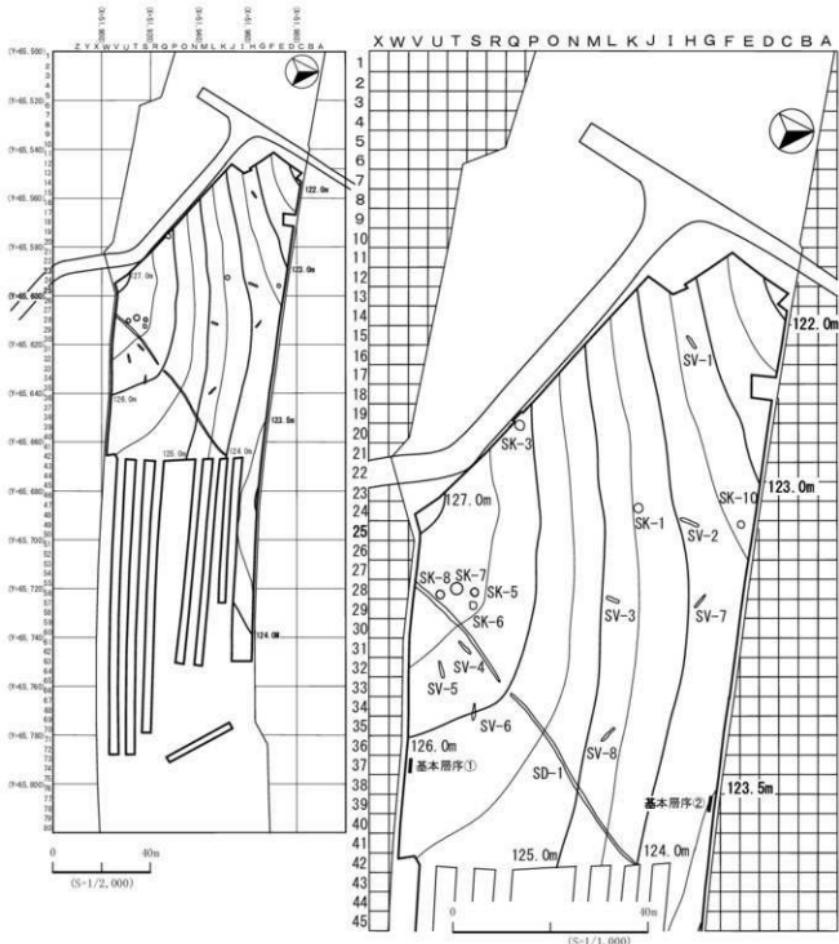


図4 荒屋敷久保(2)遺構配置

第1章 検出遺構

第1節 土坑（図5～6）

発掘調査時に10基の土坑プランを検出し遺構番号を付けて精査したが、第2・4・9号土坑としたものは植え込み等の攪乱と判明したため欠番とした。土坑数は7基で、縄文時代と古代と思われるものがある。

第1号土坑（図5）

【位置・確認】K-24グリッドを中心に位置するが、一部J・K-23・24グリッドにも掛かる。

【形態・規模】平面形は開口部が円形、底面部は隅丸方形である。規模は開口部径が約180cm、底面部は長軸約80cm・短軸幅約75cmで、検出面からの深さは約200cmである。壁は底部から中位までは垂直、中位から開口部までは外傾しながら立ち上がる幅の広いY字状の断面形状で、壁面は中位で崩落してえぐれている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】自然堆積で11層に分けられる。堆積土下半の第4～11層は壁の崩落土と思われる。

【時期】遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と思われる。

第3号土坑（図5）

【位置・確認】調査区西端のQ-19グリッド主体に、一部R・Q-19・20グリッドに位置する。

【形態・規模】平面形は不整な円形をしている。規模は、開口部は長軸が205cm・最大幅190cm、底面部は長軸が110cm・幅100cmで、検出面からの深さは最大約110cmである。断面形状は、壁が底面から外傾して立ち上がる逆台形状である。底面は平坦で、逆茂木痕と思われるピットが7基検出された。ピットの規模は、直径4～6cm、底面からの深さは28～32cmである。

【堆積土】自然堆積で9層に分層された。壁際の第4・6・8層は壁の崩落土、第2・5・7層は壁の崩落土と自然堆積土が混合したものと思われる。

【時期】遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第5号土坑（図5）

【位置・確認】調査区南西端のS-28グリッドに位置する。重複はないものの、後述する第6～8号土坑と近接して位置している。

【形態・規模】平面形はほぼ円形である。規模は、開口部径約170cm・底面径約150cm、検出面からの深さは60cmである。壁は底面から外傾しながら立ち上がるが、底面径に比べ深さがないので断面形状は箱状である。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】人為堆積で7層に分層された。堆積土下位の第3・4・6・7層中には粒径の大きいロームブロックが混入している。

【時期】遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、後述する第6～8号土坑と規模や形態・堆積状況の特徴が似通っているため、これらとほぼ同時期と考えられる。

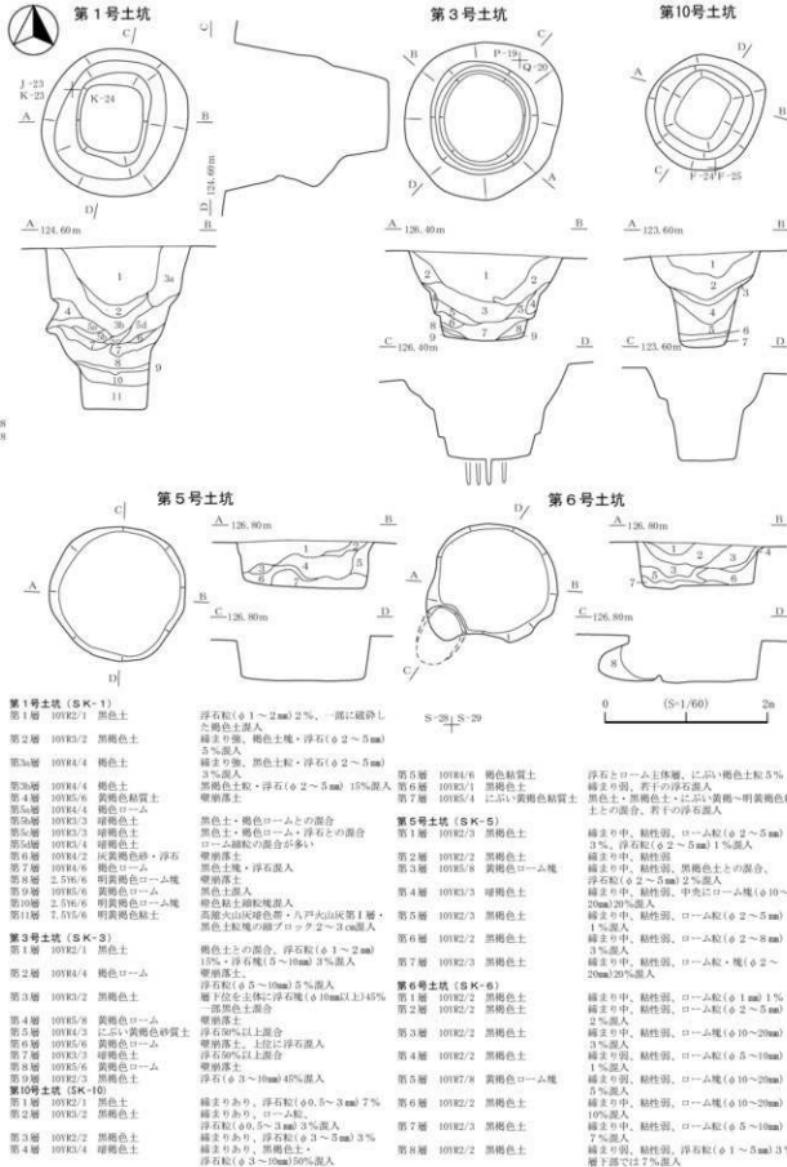


図5 土坑(1)

第6号土坑（図5）

【位置・確認】 S-29グリッドを中心に位置するが、一部S-28グリッドにも掛かっている。

【形態・規模】 平面形はいびつな円形で、底面の南西が袋状に張り出している。規模は、開口部径約150cm、底面部径約130cmで、検出面からの深さは最大約60cmである。壁は底面から外傾するが、浅いので箱状の断面形状である。底面には若干の起伏が認められる。また、西南側の一部に袋状に張り出す箇所がある。張り出し部は長軸75cm・最大幅47cmの楕円形状で、開口部からの張り出し幅は約40cmである。張り出し部の用途は不明である。

【堆積土】 8層に分層された。第8層は張り出し部の堆積土である。堆積土下位の第3～7層中には粒径の大きいロームブロックが混入しているため人為堆積と考えられるが、堆積土上位の第1層は黒味が強いため自然堆積の可能性がある。

【時期】 遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、形状や堆積土の様子から第5・7・8号土坑とはほぼ同時期に廃絶・埋め戻された土坑と思われる。

第7号土坑（図6）

【位置・確認】 T-28グリッドに位置するが、一部T-29グリッドにも位置している。

【形態・規模】 平面形はほぼ円形である。規模は開口部が径約260cm・底面部が径約220cm・検出面からの深さは約100cmと他に比して大きい。壁の立ち上がりは、底部から中位までは垂直、中位から開口部までは外傾しており、断面形状は幅の広いY字状である。底面には若干の起伏が認められる。

【堆積土】 人為堆積で15層に分層された。堆積土下位の第11～15層中にはロームブロックが混入しているため人為堆積と考えられるが、堆積土上位の第1層は黒味が強く自然堆積の可能性がある。堆積土中から炭化物片が出土した。ほぼ15cm四方の板状であるが、用途は不明である。

【時期】 炭化物以外の遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、堆積状況などが類似する第5・6・8号土坑とはほぼ同時期と考えられる。

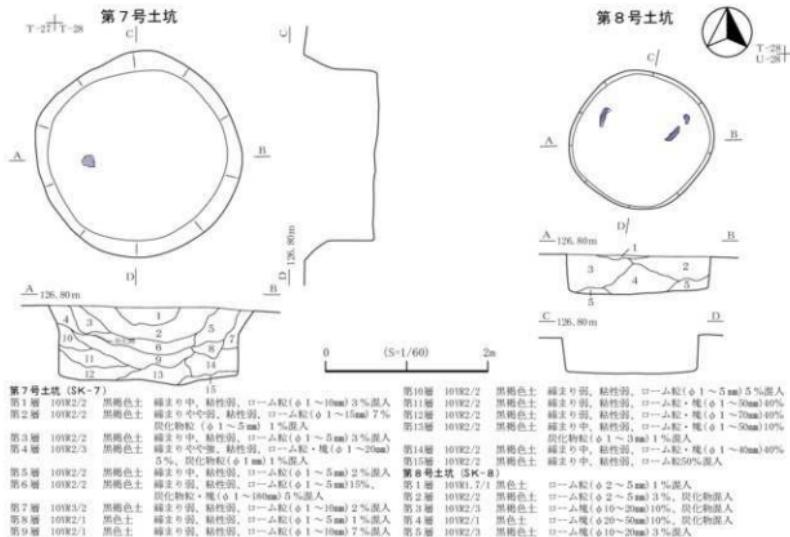
第8号土坑（図6）

【位置・確認】 U-28グリッドに位置する。

【形態・規模】 平面形は円形である。規模は、開口部径約175cm、底面部径170cm、検出面からの深さは50cmである。断面は、壁が坑底からほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底面は概ね平坦である。

【堆積土】 人為堆積で5層に分層された。堆積土下位の第3～5層には粒径の大きいロームブロックが混入しているため人為堆積と考えられるが、堆積土上位の第1層は黒味が強いため自然堆積の可能性がある。堆積土中から炭化物片が3点出土している。板状で、5cm×25cm程度のもの2点・5cm×10cm程度のもの1点であるが、用途は不明である。

【時期】 堆積土中から出土した炭化物について炭素年代測定を行ったところ、曆年較正年代（ $1\sigma = 68.2\%$ ）で775～875AD（ 1210 ± 30 yrBP）の年代が得られたことから、この土坑は8世紀後葉から9世紀後葉に廃絶・埋め戻されたと思われる。



第10号土坑 (図5)

〔位置・確認〕 E-24・25グリッドを中心に位置する。一部F-24・25グリッドにも掛かっている。

〔形態・規模〕 平面形は開口部がほぼ円形・底面部が隅丸形ををしている。規模は、開口部は径150cm・底面部は長軸約70cm・幅約55cmで、検出面からの深さは約120cmを測る。断面形状は、壁が底部から中位までは垂直、中位から開口部までは外傾している幅の広いY字状である。

〔堆積土〕 自然堆積で7層に分層された。第5層は壁の崩落土と自然堆積との混合土と思われる。

〔時期〕 出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。 (平山)

第2節 溝状土坑 (図7・8)

縄文時代の落とし穴といわれる溝状土坑は8基検出された。

第1号溝状土坑 (図7)

〔位置・確認〕 H-15グリッドに位置する。

〔形態・規模〕 平面形は葉巻状をしている。規模は、開口部の長軸が320cm・短軸が約60cm、底面部の長軸が295cm・短軸14~16cm、検出面からの深さは最大120cmで、主軸方位はN-55°-Eである。長軸断面は逆台形であるが、北側の一部は中位から下が袋状にえぐれている。元々の掘り方なのか、崩落であるか不明である。短軸断面はY字状である。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 自然堆積で5層に分けられる。

〔時期〕 遺物は出土しなかつたため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と思われる。

第2号溝状土坑（図7）

【位置・確認】 主にH-24グリッドに位置するが、一部H-25グリッドに掛かる。

【形態・規模】 平面形は不整な葉巻状である。規模は、開口部は長軸405cm・長軸80cmと今回の調査で検出された溝状土坑中で最大である。底面部は長軸415cm・長軸12cmで、検出面からの深さは最大で150cmである。主軸方位はN-21.5°-Eである。長軸断面は箱状であるが、両端部分がわずかに袋状になる。短軸断面はV字状であるが、片側は崩落したものか、階段状となる。底面はほぼ平坦であるが、全体的に見ると中央が低い。

【堆積土】 自然堆積で8層に分けられる。第2層は壁の崩落土、第4・5層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土である。

【時期】 遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と思われる。

第3号溝状土坑（図7）

【位置・確認】 L-28グリッドに位置する。

【形態・規模】 平面形は葉巻状である。規模は、開口部は長軸が275cm・最大幅70cmと今回の調査で検出された溝状土坑で最小である。底面部は長軸が265cm・短軸12～22cmで、長軸の両端部が広い。検出面からの深さは最大82cmで最小である。主軸方位はN-20°-Eである。長軸断面は箱状で、短軸断面は幅広で重んだV字状である。底面は北側端部に向かって緩やかに傾斜している。

【堆積土】 自然堆積で9層に分層された。第5～8層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土である。

【時期】 遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

第4号溝状土坑（図7）

【位置・確認】 S・T-31グリッドに位置する。

【形態・規模】 平面形は葉巻状をしている。規模は、開口部の長軸が350cm・短軸が最大で60cm、底面部の長軸が340cm・短軸が10～14cmで、検出面からの深さは110cmを測る。主軸方位はN-47.5°-Eである。長軸断面は箱状で、短軸断面はY字状であるが、緩やかに開いているためV字状に近い。底面はほぼ平坦である。

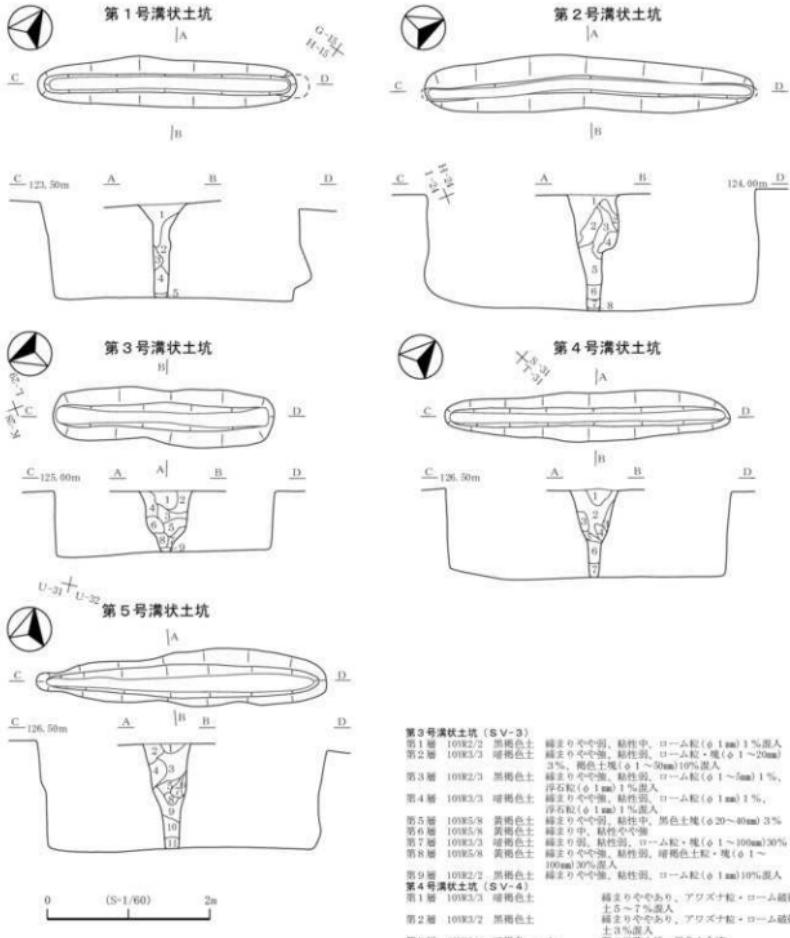
【堆積土】 自然堆積で7層に分層された。壁際の第4層は壁の崩落土、第3・5層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土である。

【時期】 遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

第5号溝状土坑（図7）

【位置・確認】 U-32グリッドに位置する。

【形態・規模】 平面形は葉巻状であるが、西側が細く東側が広いいびつな形状をしている。規模は、開口部の長軸が約360cm・最大幅が70cm、底面部の長軸が330cm・短軸が10～22cm、検出面からの深さは約130cmである。主軸方位はN-76.5°-Eである。長軸断面は中位で屈曲する逆台形状だが、東側端部はえぐれている。短軸断面はY字状である。底面はほぼ平坦に近いが、中央部から西側がやや深くなっている。



第1号溝状土坑 (S.V-1)
第1層 10RE2/2 黒褐色土 線まりややあり。アワズナ粘7~15%、ローム
破砕・泥炭。厚さ2~3cm
第2層 10RE2/3 黒褐色土 アワズナ粘7~15%混入
第3層 10RE2/2 黒褐色土 毛らかく線まりなし。アワズナ粘5~7%混入
第4層 10RE1/1 にごり 黑色土 黒色土との混合。アワズナ粘7~15%混入
第5層 10RE6/6 黄褐色粘質土 塵崩落土
第2号溝状土坑 (S.V-2)
第1層 10RE2/2 黒褐色土 アワズナ粘(φ 1~2 mm)3~5%、ローム
破砕・泥炭。厚さ2~3cm
第2層 10RE5/5 黄褐色ローム塊 塘崩落土
第3層 10RE2/2 黑褐色土 塘崩落土
第4層 10RE5/4 黄褐色土 黄褐色土との混合
第5層 2.5W4/6 にごり 黑褐色土 黑色土・ローム細塊との混合
第6層 10RE5/4 にごり 黑褐色土 塘崩落土、黑色土・ローム細塊との混合
第7層 2.5W4/6 オリーブ黒褐色ローム 塘崩落土、黑色土・褐色土との混合
第8層 10RE2/3 黑褐色土

第3号溝状土坑 (S.V-3)
第1層 10RE2/2 黒褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 1 mm)1%混入
第2層 10RE3/3 墓褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 1~2mm)1%混入
第3層 10RE2/1 黒褐色土 線まりややあり。黑色土塊(φ 1~50mm)1%混入
第4層 10RE2/3 墓褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 1 mm)1%
第5層 10RE5/9 黄褐色土 線まりややあり。黑色土塊(φ 20~40mm)3%
第6層 10RE5/9 黄褐色土 線まりややあり。黑色土塊(φ 1 mm)1%
第7層 10RE3/3 黄褐色土 線まりややあり。ローム粘・塊(φ 1~10mm)30%
第8層 10RE5/9 黄褐色土 線まりややあり。ローム粘・塊(φ 1~10mm)30%
第9号溝状土坑 (S.V-4)
第1層 10RE2/2 黒褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 1 mm)10%混入
第2層 10RE3/3 墓褐色土 線まりややあり。アワズナ粘・ローム碎片
上5~7cm厚入
第3層 10RE3/4 黄褐色ローム 破壊の崩土塊、黑色土介層
第4層 10RE5/6 黄褐色ローム砂層 破壊の崩土塊、下位に浮石・砂層
第5層 10RE2/2 黑褐色土 線まりややあり。ローム粘・塊(φ 1~5mm)
ローム粘・塊、黑色土粘・浮石の混合
第6層 10RE2/1~2/2 黑色~黑褐色土 線まりなし。アワズナ粘混合
第4号溝状土坑 (S.V-5)
第1層 10RE3/3 墓褐色土 線まりややあり。アワズナ粘・ローム碎片
上5~7cm厚入
第2層 10RE3/2 黑褐色土 破壊の崩土塊、黑色土介層
第3層 10RE3/4 黄褐色ローム砂層 破壊の崩土塊、下位に浮石・砂層
第4層 10RE2/1 黑色土 線まりややあり。ローム粘(φ 2~5 mm)1%混入
第5層 10RE2/2 黑褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 2~5 mm)1%
第6層 10RE2/2 黑褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 2~5 mm)1%
第7層 10RE2/4 黄褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 10~20mm)1%
第8層 10RE2/3 黑褐色土 下位に浮石(φ 1~2 mm)2%混入
第9層 10RE2/5 黄褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 5~10 mm)1%
第10層 10RE2/3 黑褐色土 線まりややあり。ローム粘(φ 10~20 mm)1%
第11層 10RE2/2 黑褐色土 線まりややあり。浮石(φ 1~5 mm)1%混入

図7 溝状土坑(1)

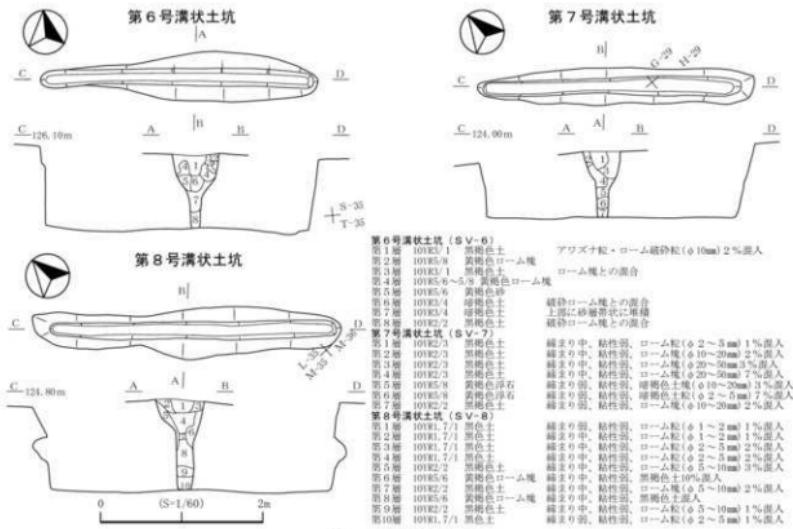


図8 溝状土坑(2)

[堆積土] 自然堆積で11層に分層された。第7～9層は壁の崩落土と流入土との混合土である。

[時期] 遺物は出土しなかつたため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

第6号溝状土坑 (図8)

[位置・確認] S-34グリッドに位置する。

[形態・規模] 平面形はいびつな葉巻状で、第5号溝状土坑に類似している。規模は、開口部の長軸が約340cm・短軸が22～60cm、底部の長軸が325cm・短軸が約10cm、検出面からの深さは最大110cmである。主軸方位はN-85°-Wで、ほぼ東西方向に構築されている。長軸断面形は、西壁はほぼ垂直に立ち上がる箱状で、短軸断面形はY字状をしている。底面には緩やかな起伏があり、中央が高く、両端が深くなっている。

[堆積土] 自然堆積で8層に分層された。第1～4層までの上位層は混濁しており、うち、第3・4層は壁の崩落土である。中位の第6・7層は壁の崩落土と流入土との混合土である。

[時期] 縄文時代であるが、遺物は出土しなかつたため詳細な時期は不明である。

第7号溝状土坑 (図8)

[位置・確認] G・H-28・29グリッドに位置する。

[形態・規模] 平面形は葉巻状である。規模は、開口部は長軸が342cm・短軸が最大46cmで、検出した溝状土坑中で、短軸が最小のものである。底部は長軸が305cm・短軸が12～15cm、検出面からの深さは最大で95cmである。主軸方位はN-50°-Wである。長軸断面形は中位でゆるく屈曲する逆台形状で、短軸断面はY字状である。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】自然堆積で7層に分層された。第2～4層は壁の崩落土と流入土との混合土、第5層は崩落土と思われる。

【時期】縄文時代であるが、遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第8号溝状土坑（図8）

【位置・確認】L-35グリッドに位置する。

【形態・規模】平面形はいびつな葉巻状をしている。規模は、開口部の長軸が約380cm・短軸35～60cm、底面部の長軸が約345cm・短軸が約15cm、検出面からの深さは116cmである。主軸方位はN-46°～Wである。長軸断面は坑底隅から開くように立ち上がる逆台形状であるが、中位が崩落したようにえぐれている。横断面はY字状である。底面はほぼ平坦であるが、中央がわずかに高くなっている。

【堆積土】自然堆積で10層に分層された。第5・6・8層は壁の崩落土と流入土との混合土である。

【時期】縄文時代であるが、遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。（平山）

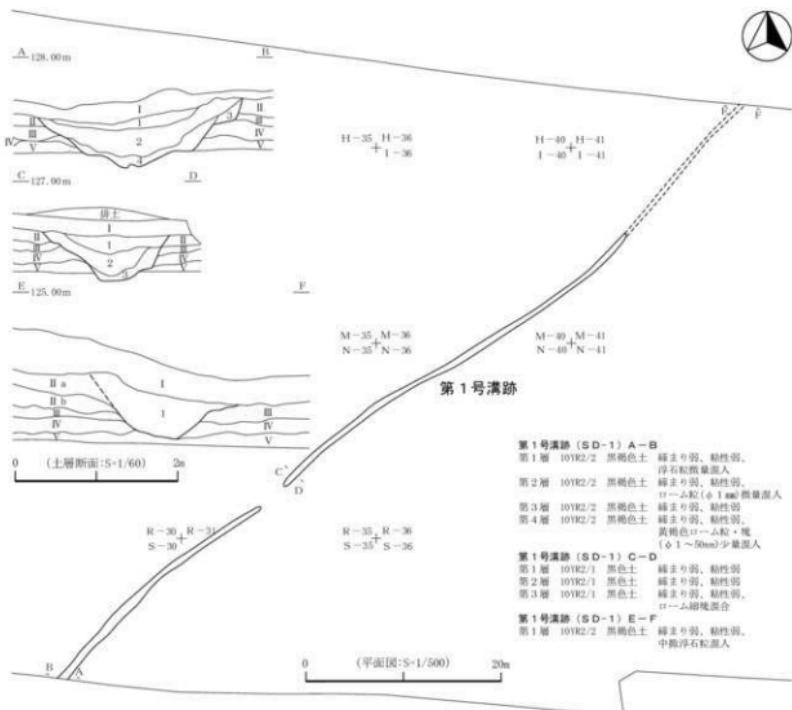


図9 溝跡

第3節 溝跡 (図9)

第1号溝跡 (SD-1) (図9)

【位置・確認】本調査では1条検出された。平面として検出されたのは調査区の南西から中央にかけてであるが、断面が中央北側の壁面で確認されたことから、調査区を斜めに横断していたものと推定される。第II層を掘り込み、第I層に被覆されている。

【形態・規模】平面形は細長い溝状である。検出された規模は、途中途切れる箇所はあるものの、長さ約73m、幅約50~120cm、深さ10~20cmであるが、調査区壁面で確認された断面から推定すると、開口部の最大幅253cm、掘り込み面からの深さが最大で85cmである。検出面上では調査区中央付近で浅く・狭くなるが、底面の標高は調査区南側で高く・調査区北側で低いため、南から北へ向かって傾斜していたものと考えられる。その比高差は約3.5mである。壁は底部から強く外反しながら立ち上がる皿状の断面形状で、底面には若干の起伏が認められる。

【堆積土】自然堆積で最大で3層に分けられる。黒色~黒褐色土主体で、柔らかく、しまりがない。

【時期】遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、掘り込み面や堆積土・被覆状況から新しいことが想像される。地境の溝と推定されるが、地籍とは一致していない。
(平山)

第2章 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は遺構外出土の土器のみで、遺物総量は、接合後の点数で24点である。遺物の出土範囲は遺跡北西端のI-15・16グリッドのII層に限られる。これらは第V群に比定され、同一個体と思われる。特徴的な5点を図示した。底部は出土しなかった。

1は胴上半、2は口縁部片である。器形は、口縁部付近で外面に強く屈曲する鉢形と思われる。文様の一部が観察されるに過ぎないが、胴上半は、外面の屈曲部と口縁部内面に沈線が、口唇部直下と胴部に2個1対の瘤状の貼付が施されている。貼付は口縁と胴部を交互にしていたものと思われる。胴下半は恐らく変形工字文と思われるZ字条の沈線が施されている。内面にはお焦げと思われる黒~黒褐色の物質が付着する。色調は明るく、胎土はきめ細かいが、砂礫が混入し、焼成はやや軟質で器面の摩滅が激しい。3~8は2・3条の平行沈線が施されたものである。小破片で、胴下半部のものと思われる。地繩文が施されているが、器表面の摩滅が激しいため、詳細は不明である。9・10は地繩文のみ施されているものである。これらも摩滅が激しいため、詳細は不明である。
(平山)

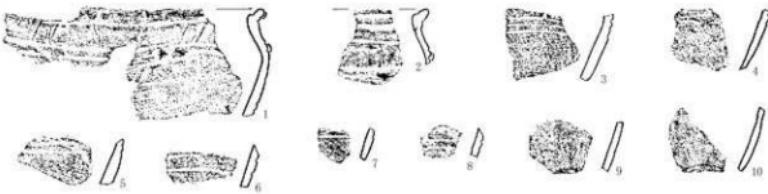


図10 出土遺物

第3章 理化学的分析

出土遺物がなく時期の推定ができなかった第8号土坑の炭化材の放射性炭素年代測定を委託した。

放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1) 遺跡の位置

荒屋敷久保(2)遺跡は青森県八戸市大字金浜字土橋19-6（北緯40° 27' 54"、東経141° 36' 25"）に所在する。

(2) 測定の意義

遺構の廃絶年代を明らかにしたい。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、第8号土坑の第2層から出土した木炭 (AYK(2)-1 : IAAA-71788) である。

(4) 化学処理工程

1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。

4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。

5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)しグラファイトを作製する。

6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

1) 年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用した。

2) BP 年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_s - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_s$: 試料炭素の ^{14}C 濃度: $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{s}}$

$^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ^{14}C 濃度: $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{A}_s = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{13}C 濃度 ($^{14}\text{A}_s$) に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$\Delta^{14}\text{C} = ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_s \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_s \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age : yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正歴年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(7) 測定結果

第8号土坑の木炭(AYK(2)-1:IAAA-71788)の¹⁴C年代は 1210 ± 30 yrBPである。曆年較正年代($\sigma = 68.2\%$)は、775～875ADである。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素含有率も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAACode No.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-71788	試料採取場所: 青森県八戸市大字金浜字土橋 19-6 荒屋敷久保(2)遺跡 木炭	Libby Age(yrBP) : 1210 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) $\Delta^{14}\text{C}$ = -28.31 ± 0.79 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ = 139.6 ± 3.4 $\text{pMC}(\%)$ = 86.04 ± 0.34
	試料名(番号): AYK(2)-1	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ = -145.5 ± 3.1 $\text{pMC}(\%)$ = 85.45 ± 0.31
#2001	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 1260 ± 30

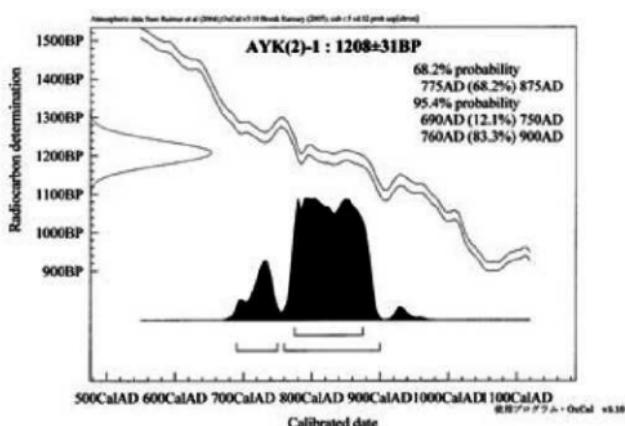
参考資料: 曆年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71788	AYK(2)-1	1208 ± 31

ここに記載する Libby Age (年代値)と誤差は下1桁を丸めない値です。

試料番号	IAAACode No.	前処理方法	試料状態	處理前 試料量	回収炭素量	燃焼量	精製 炭素量	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速器)	Libby Age (yrBP・丸め 込みなし)	曆年較正 1 σ (yrcalBP)	曆年較正 2 σ (yrcalBP)
No.AYK(2)-1	IAAA-71788	AAA處理	乾燥	42.34mg	27.72mg	4.48mg	3.17mg	-28.31±0.79	1210±30	775AD-875AD(68.2%)	690AD-900AD(12.1%)

【参考値: 曆年較正 Radiocarbon determination】



第3編 横沢山(1)遺跡

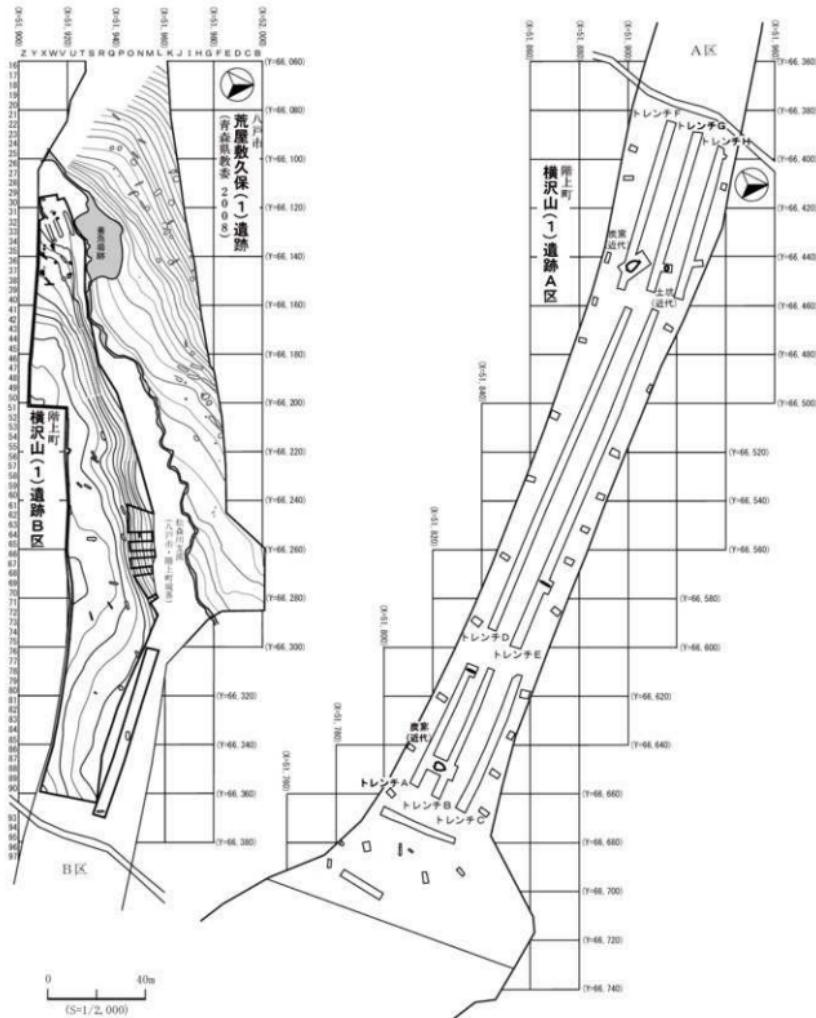


図11 横沢山(1)遺構配置

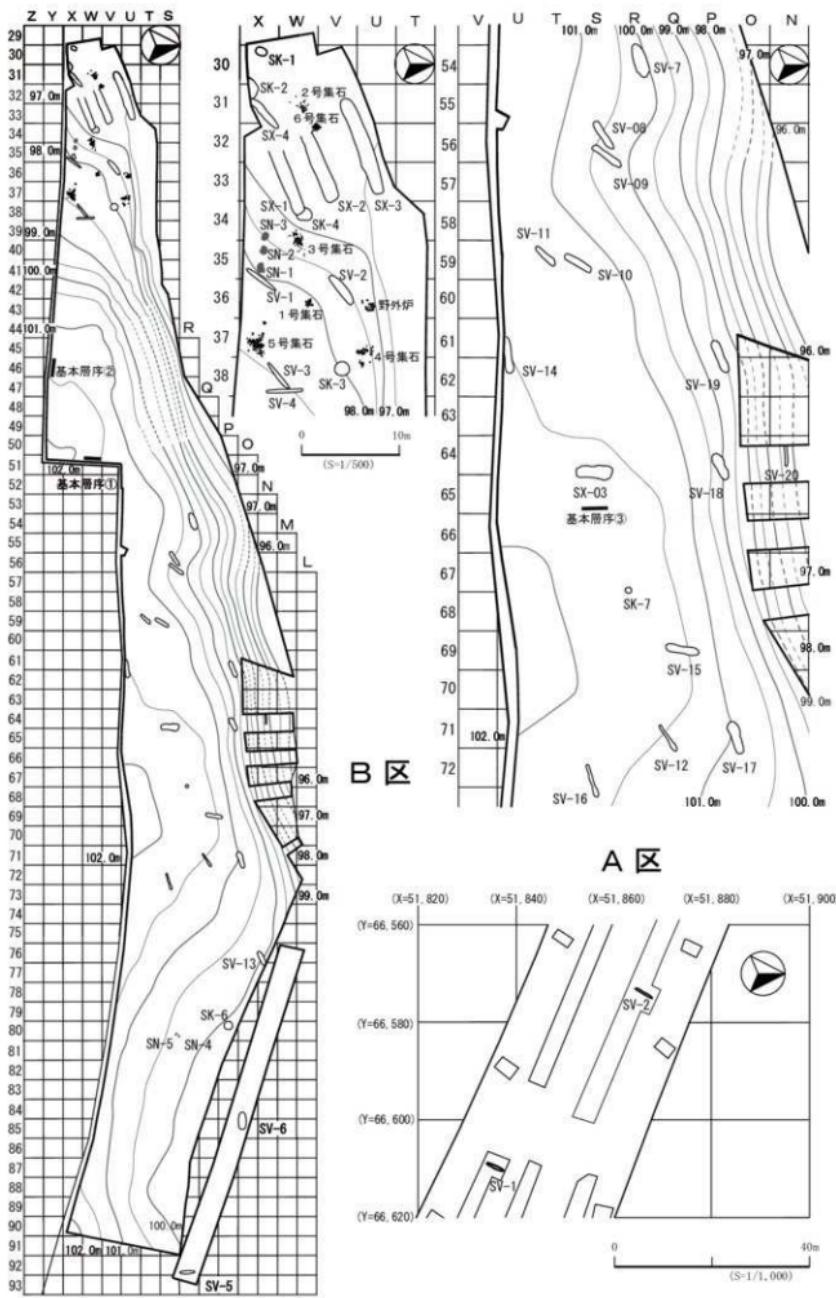


図12 横浜山(1)A・B区遺構配置

第1章 検出遺構と出土遺物

第1節 土坑 (図13)

2ヶ年の調査でA区に1基とB区に7基の総数8基の土坑を検出した。このうちA区の1基は近代のものであり、B区で検出しSK-5は現代の植え込み穴であることが判明したため欠番とした。平成18年度の調査で検出された4基は、小川に面した遺物包含層地点から検出されており、詳細な時期比定までは至らないが、いずれも縄文時代のものと考えられる。平成19年度には2基検出されており、このうち1基は形態から縄文時代の円形落とし穴と考えられる。

第1号土坑 (SK-1) (図13)

[位置・確認] 調査区西端のX-30グリッドに位置し、盛土の下の遺物包含層を撤去後に検出した。この周辺は低湿地で、検出時点では水が染み入る状態であった。第IV層相当の面で検出している。

[形態・規模] 平面形は楕円形で長軸約1.2m、短軸約80cmの大きさである。断面形は巾着袋状のフ拉斯コ状土坑であるが、西側の上部は崩落している。検出面からの深さは約55cmで、底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分けられる。黒色土を主体にしており、グライ層化している。

[出土遺物] 本遺構内からの出土はないが、周辺から縄文時代晩期と弥生時代の土器が出土している。

[時期] 検出状況から縄文時代と考えられるが、時期は特定できない。

第2号土坑 (SK-2) (図13)

[位置・確認] X-31グリッドに位置し、第1号土坑と同じく低地の第IV層相当の面で検出している。

[重複] 第4号炭窯と重複しており、本遺構の方が古い。

[形態・規模] 調査区境界に検出され全体の半分以上が調査区外にある。調査区内には、長軸約2.7m、短軸約90cmの大きさで弧状に検出されており、円形ないしは楕円形の形状が推定される。周壁は10cm～20cmの高さではまっすぐに立ち上がるが、調査区境界の土層面から約60cm～70cmの深さがあつたものと思われる。底面には多少起伏がある。

[堆積土] 4層に分けられる。黒色土を主体にしておりグライ層化している。自然堆積か、人為に埋められているか判断しかねるが、出土遺物の時期から埋められている可能性が高い。

[出土遺物] 底面および覆土中から約390点の土器破片が出土しているが、全体形状のわかるものはない。図21-22と21はR.Lが施文される深鉢形土器で底面から出土している。他6点は覆土からの出土で、24と28は縄文時代早期の貝殻文土器、25は鉢形土器で縄文時代晩期または弥生時代に比定される。

[時期] 底面出土の土器から縄文時代晩期に帰属する可能性が高い。

第3号土坑 (SK-3) (図13)

[位置・確認] V-38グリッドに位置し小川に近い緩斜面につくられている。標高約98mの第IV層面で検出している。

[形態・規模] 開口部の形状は歪んだ円形状で、1.25m×1.35mの大きさである。底面は一辺が70cm～90cmの隅丸方形である。周壁は底面から聞くように立ち上がる逆台形状である。検出面からの深さは

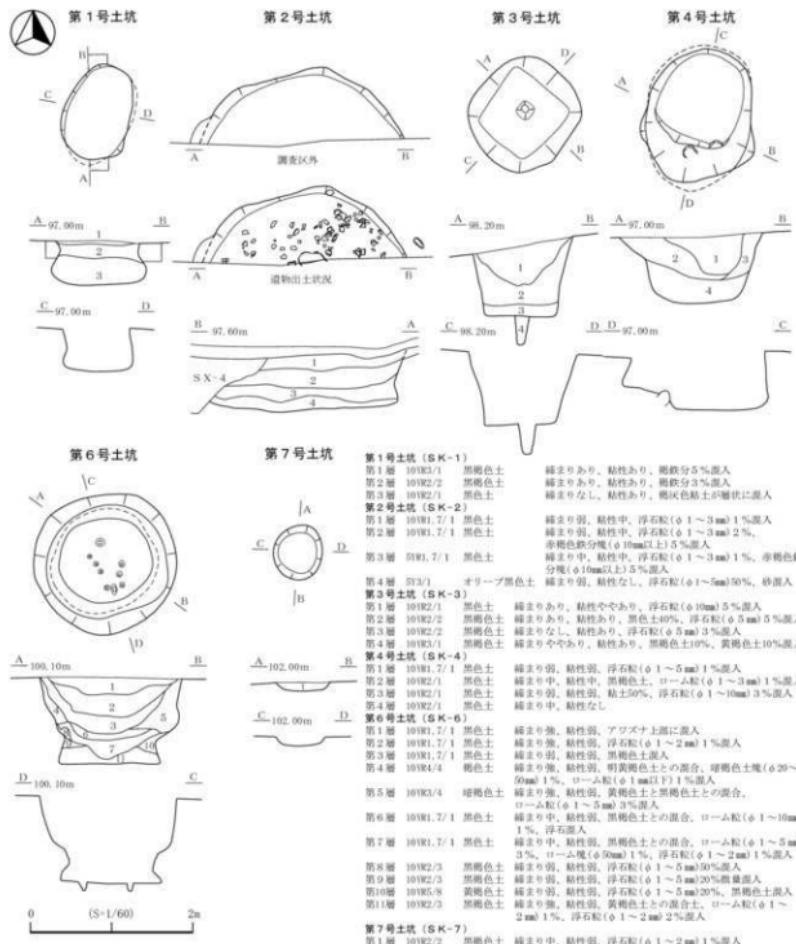


図13 土坑

最大で約1mある。底面は平坦で、ほぼ中央に小Pitが1個設けられている。小Pitは20cm四方の方形に掘られており、底面から約40cmの深さがある。逆茂木を設置したと推定される

[堆積土] 3層に分けられる。黒褐色土を主体にした層で黄褐色の南部軽石の粒が多量に混入する。

[出土遺物] 覆土中から縄文時代早期の土器が2点出土している。

[時期] 出土土器からは時期決定に欠けるが、本遺構の形態的特徴と検出例から縄文時代の古い時期(早期～前期頃)の落とし穴の可能性が高い。

第4号土坑（SK-4）（図13）

【位置・確認】W-34グリッドに位置する。標高約97mの低湿地の第IV層相当面に、6個の角礫が集積した褐色土のプランを検出した。

【形態・規模】開口部の形状は歪んだ楕円形で、長軸1.7m、短軸1.4mの大きさである。底面は約1mの方形状である。短軸方向の断面をみると壁は聞くように立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。また地山に包含される礫を取り除いていないため、段差をもつ形状となっている。検出面からの深さは最大で80cmある。

【堆積土】4層に分けられる。黒色土主体で、第3層には黄褐色のブロックが混入する。

【出土遺物】覆土第2層から纖維混入土器が3点出土している。

【時期】出土土器から時期は特定できないが、縄文時代早中期から前期に帰属する可能性がある。

第6号土坑（SK-6）（図13）

【位置・確認】P-80グリッドに位置し、標高は約100mの第IV層面上に黒色土プランで検出した。

【形態・規模】平面形は歪んだ円形で、開口部は径が約1.8m、底面は1.3mの大きさである。断面形をみると底面から上へ30cm～40cmのところで屈曲し、下はフラスコ状となり上の周壁は聞くように立ち上がる。おそらく屈曲部より上は崩落により生じたものと思われる。検出面からの深さは約1.1mあり、底面は平坦である。また底面には小Pitが9個設けられている。小Pitの配置に規則性はみられず、底面からの深さも4cm～10cmと浅い。

【堆積土】レンズ状の自然堆積で11層に分けられる。第1～3層は黒色土で、第1層中には中揮輕石粒が混入する。第4層以下の層は、壁の崩落土と流入土の混合したものと思われる。

【時期】出土遺物はなく時期決定に欠けるが、本遺構の形態的特徴と検出例から縄文時代の落とし穴の可能性が高く、第1層中に混入する中揮輕石粒から縄文時代前期初頭にはほぼ埋没状態にあり、構築の時期はそれ以前と考えられる。

第7号土坑（SK-7）（図13）

【位置・確認】R-67・68グリッドに位置し、台地平坦部の第IV層面上で検出した。

【形態・規模】60cm×70cmの楕円形で、検出面からの深さも10cmと深い皿状の土坑である。

【堆積土】黒色土の單一層である。

【時期】帰属時期は不明である。

（小田川）

第2節 溝状土坑（図14～17）

平成18年度の調査でA区に2基、B区に6基（SV-1～6）、平成19年度にはB区で14基（SV-7～20）の、総数22基が検出された。検出位置はB区の小川に面した丘陵の端部に集中しており、その内でも西側緩斜面地点と東側平坦部に位置するものに分けられる。概ね等高線と平行するようにつくられているが、特に規則性はみられない。また第3号と4号の重複や、第8号と9号および10号と11号の様に近接した位置にあることから、構築時期には時間差があるものと考えられる。いずれにしても、対岸の荒谷屋敷久保（1）跡地で検出された溝状土坑と関連して機能したものと推察される。

検出層位は第IV層及び第V層であるが、荒谷屋敷久保(1)遺跡の例やA区で検出された遺構の土層面にみられるように大多数が第II層中から掘り込まれているものと思われる。

A区第1号溝状土坑（ASV-1）（図14）

【位置・確認】東側トレンチAの第V層面に遺構の半分を検出し、トレンチ北側を括げて全体形状を確認した。検出面地点の標高は約102.5mである。

【形態・規模】開口部の平面形は歪な葉巻状で、大きさは長軸で約3.5m、短軸は最大55cmある。底面は長軸で約3.3m、短軸は10cm弱である。長軸方向の断面形は北側端部がオーバーハング、南側は垂直に立ち上がる。短軸の断面形はV字状である。底面は若干の起伏をもち北側に傾斜している。検出面からの深さは最大1.1mであるが、トレンチを括げる前に作成した土層図からみて、本来は1.5m程度の深さがあったものと思われる。長軸方向はN-24°-Eである。

【堆積土】自然堆積で5層に分けられる。全体に第II層ないしは第III層に相当する黒色土が主体である。第4層中には壁の崩落したブロックが混じる。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

A区第2号溝状土坑（ASV-2）（図14）

【位置・確認】トレンチEの第V層面に遺構の半分を検出し、トレンチ北側を括げて全体形状を確認した。検出面地点の標高は約102mである。

【形態・規模】開口部の形状は長軸両端部付近が膨らむ葉巻形で、大きさは長軸が約3.75m、短軸の最大幅は両端部で55cm～57cmある。底面の長軸も約3.75mあり、短軸は約20cmある。長軸方向の断面形は両端がほぼ垂直に立ち上がり、短軸の断面形はV字状である。底面は北側に傾斜している。検出面からの深さは約1mであるが、本来は1.5m位あったものと思われる。長軸方向はN-30°-Eである。

【堆積土】自然堆積で6層に分けられる。すべて黒色土を主体としている。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第1号溝状土坑（BSV-1）（図14）

【位置・確認】X-35・36グリッドに位置する。小川湧水地点に向かう緩斜面に、遺物包含層を掘り込んでつくられており、第V層面まで掘り下げて全体形状を確認してから精査している。

【形態・規模】開口部の形状は歪な葉巻形であり、大きさは長軸が約3.7m、短軸の最大幅は48cmである。底面長軸は約4m、短軸は10cm程である。長軸方向の断面形は両端がオーバーハングしたフラスコ状である。短軸の断面形はV字状であるが、遺構の上位を大きく取り去っているため定かではない。長軸方向はN-37°-Eである。

【堆積土】自然堆積で3層に分けられる。すべて黒色土を主体としている。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第2号溝状土坑（BSV-2）（図14）

【位置・確認】V-36グリッドに位置し、小川に近い低地に長楕円形のプランで検出された。

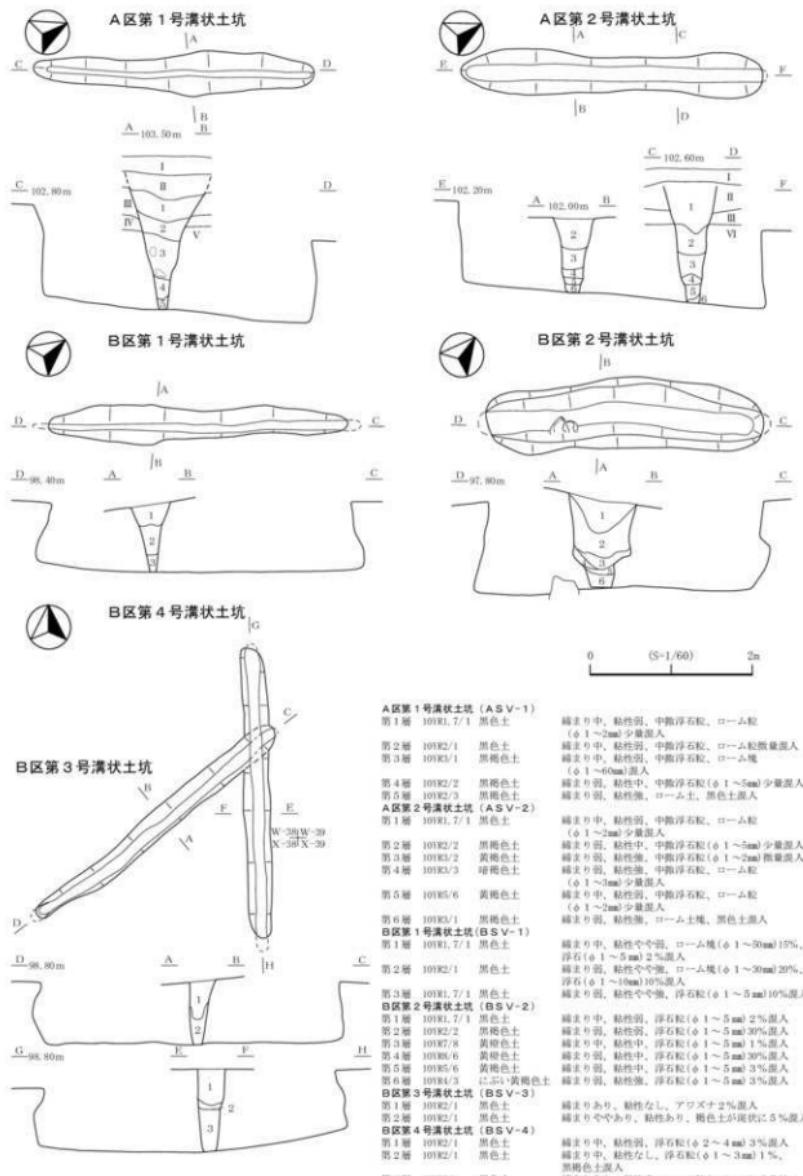


図14 滴状土坑(1)

【形態・規模】開口部の形状は太い葉巻形で、大きさは長軸が約3.4m、短軸の最大幅は88cmである。底面長軸は約3.6m、短軸幅は20cm～25cm程度である。長軸方向の断面では南側が浅くオーバーハングし、北側は抉れた形状である。短軸方向の断面形は、大小の箱形を2段に重ねた様な形状であり、おそらく周壁が崩落して生じたものと思われる。底面は平坦であるが、地山中に包含されている大型礫を残したまま掘られている。長軸方向はN-52°-Eである。

【堆積土】自然堆積で6層に分けられる。第1・2層は流入した黒色土、第3～5層は壁の崩落土、第6層は底面となる第X I b層と黒色土の混合土である。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第3号溝状土坑（B S V-3）（図14）

【位置・確認】W・X-38グリッドに位置し、標高約98.6mの第IV層面で検出した。

【重複】第4号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。

【形態・規模】開口部の形状は棒状で、大きさは長軸が約3.7m、短軸の最大幅は約32cmである。底面部の長軸は約3.8m、短軸幅は最大で15cmある。長軸方向の両端はオーバーハングしており、南西側は抉れている。短軸は筒状である。検出面からの深さは約80cmであるが、遺物包含層を掘り下げて検出しているため本来はもっと深いものと思われる。長軸方向はN-51°-Eである。

【堆積土】自然堆積で2層に分けられる。黒色土が主体で第2層中に崩落した壁のブロックが混じる。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第4号溝状土坑（B S V-4）（図14）

【位置・確認】W・X-38グリッドに位置し、標高約98.6mの第IV層面で検出した。

【重複】第3号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が古い。

【形態・規模】第3号溝状土坑と同じく棒状で、大きさは長軸が約3.6m、短軸の最大幅は約35cmである。底面部の長軸は約3.8m、短軸幅は最大で18cmある。長軸方向の両端はオーバーハングし抉れている。短軸は筒状である。検出面からの深さは最大で1mあるが、本来はもっと深いものと思われる。長軸方向はN-2°-Wである。

【堆積土】自然堆積で3層に分けられる。第2・3層中に崩落した壁の細かいブロックが混じる。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第5号溝状土坑（B S V-5）（図15）

【位置・確認】R-92グリッドに位置し、標高約101.0mの第IV層面で検出した。平成18年度のトレンド調査で検出精査された。

【形態・規模】開口部の形状は柳葉形で、大きさは長軸が約3.1m、短軸の最大幅は約65cmである。底面部の長軸は約3m、短軸幅は最大で15cmある。長軸方向の断面形は菱形状で、南側は開くように立ち上がり、北側は浅くオーバーハングしている。短軸断面はY字状である。底面は平坦で、南側から北側に傾斜している。長軸方向はN-3°-Wである。

【堆積土】自然堆積で5層に分けられる。黒色土が主体で第3・4層中に崩落土のブロックが混じる。

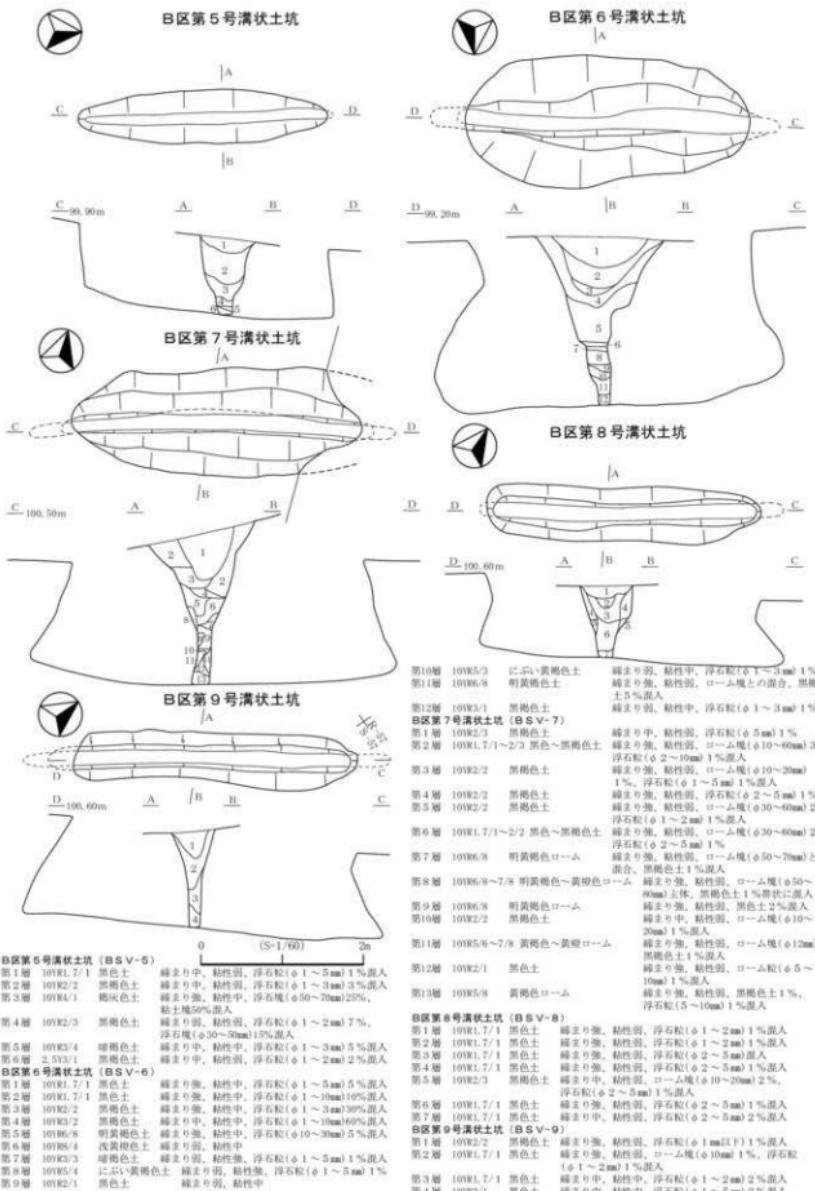


図15 溝状土坑(2)

[時期] 出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第6号溝状土坑（B S V - 6）（図15）

[位置・確認] D-84・85グリッドに位置し、標高約100.0mの第IV層面で検出した。平成18年度のトレンチ調査で検出精査された。

[形態・規模] 開口部の形状は楕円形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸の最大幅は約1.6mである。

中位から底部にかけては垂な葉巻形で、底面の長軸は約4.3m、短軸幅は最大で約30cmある。長軸方向の断面形は両端が大きくオーバーハングしたフラスコ状で、短軸断面はV字状であるが、中位から下位にかけて数段屈曲している。検出面からは約2.1mの深さがあり、長軸方向はほぼN-0°Eである。

[堆積土] 自然堆積で12層に分けられる。第1～3層と第7・9・12層は黒色土である。第4層は浮石粒が混合する褐色土で壁の第IV層が崩落したものと捉えている。同じく第5層は壁の第V～X層が崩落したもので、第6・8・10・11層は第XI層の戸戸火山灰第I層が崩落して混合したものである。

[時期] 出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第7号溝状土坑（B S V - 7）（図15）

[位置・確認] R-54グリッドに位置し、台地縁辺の斜面落ち際に黒色土のプランで検出した。

[形態・規模] 平成18年度の試掘トレンチで遺構の一部を削平してしまったが、開口部の大きさは長軸が約3.6m、短軸の最大幅は約1.4mあり、平面形状は長楕円を呈していたものと思われる。底面の長軸は約4.1m、短軸幅は約20cmである。長軸方向の断面形は両端が鋭角にオーバーハングしたフラスコ状で、短軸断面はY字状である。底面は平坦で両端から中央に向かって深くなり、中央部の深さは検出面から約1.9mである。長軸方向はN-71°-Eである。

[堆積土] 自然堆積で13層に分けられる。第1～4層までは黒色土を主体にした層で、第5層以下は壁の崩落したブロックないしはそれと流入した黒色土の混合土である。

[時期] 出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第8号溝状土坑（B S V - 8）（図15）

[位置・確認] S-56グリッドに位置し、標高約100.5mの第IV層面で検出した。

[形態・規模] 開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.4m、短軸の最大幅は約70cmである。底面の長軸は約3.8m、短軸は15cm～20cmである。長軸方向の断面形は中位で屈曲するフラスコ状で、短軸断面はV字状である。底面にはやや起伏があり北側に向かい傾斜している。検出面からの深さは約90cmで、近接した第7号や第9号より浅いことから削平されている可能性がある。長軸方向はN-71°-Eである。

[堆積土] 自然堆積で7層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。

[出土遺物] 第3層中から縄文時代前期と思われる纖維を混入する土器が2点出土した。

[時期] 出土遺物から構築時期の特定はできないが、縄文時代と思われる。

B区第9号溝状土坑（B S V - 9）（図15）

【位置・確認】大部分がS-56グリッドに位置し、第8号溝状土坑と近接して検出されている。

【形態・規模】開口部の形状は直角三角形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸の最大幅は約70cmである。底面の長軸は約4.5m、短軸幅は15cm～20cmである。長軸方向の断面形はオーバーハングしたプラスコ状で、短軸断面は屈曲の緩いY字状である。検出面からの深さは約1.2mあり、ほぼ平坦な底面は北側に向かい傾斜している。長軸方向はN-34°-Eである。

【堆積土】自然堆積で4層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。

【出土遺物】覆土中から縄文時代早期前葉の土器が1点出土した。

【時期】出土遺物から構築時期の特定はできないが、縄文時代と思われる。

B区第10号溝状土坑（B SV-10）（図16）

【位置・確認】S-T-59グリッドに位置し、標高約101mの第IV層面で検出した。

【形態・規模】開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.1m、短軸の幅は約70cmである。底面の長軸は約2.9m、短軸は最大で20cmある。長軸方向の断面形は箱形で、短軸断面は屈曲の緩いY字状である。検出面からの深さは約1.15mあり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はN-30°-Eである。

【堆積土】自然堆積で11層に分けられる。第1～4層までは黒色土を主体にした層で、第5層以下は壁の崩落したブロックないしはそれと流入した黒色土の混合土である。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第11号溝状土坑（B SV-11）（図16）

【位置・確認】T-59グリッドに位置し、第10号溝状土坑と近接して検出されている。

【形態・規模】開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約2.7m、短軸の幅は約60cmである。底面の長軸は約2.6m、短軸は10cm～15cmある。長軸方向の断面形はほぼ箱形で、短軸断面は屈曲の緩いY字状である。検出面からの深さは1mあり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はN-46°-Eである。

【堆積土】自然堆積で7層に分けられる。第4層以下には黄褐色のブロックおよび細粒が混入する。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第12号溝状土坑（B SV-12）（図16）

【位置・確認】Q-71グリッドに位置し、標高約101.5m地点の第IV層面で検出した。

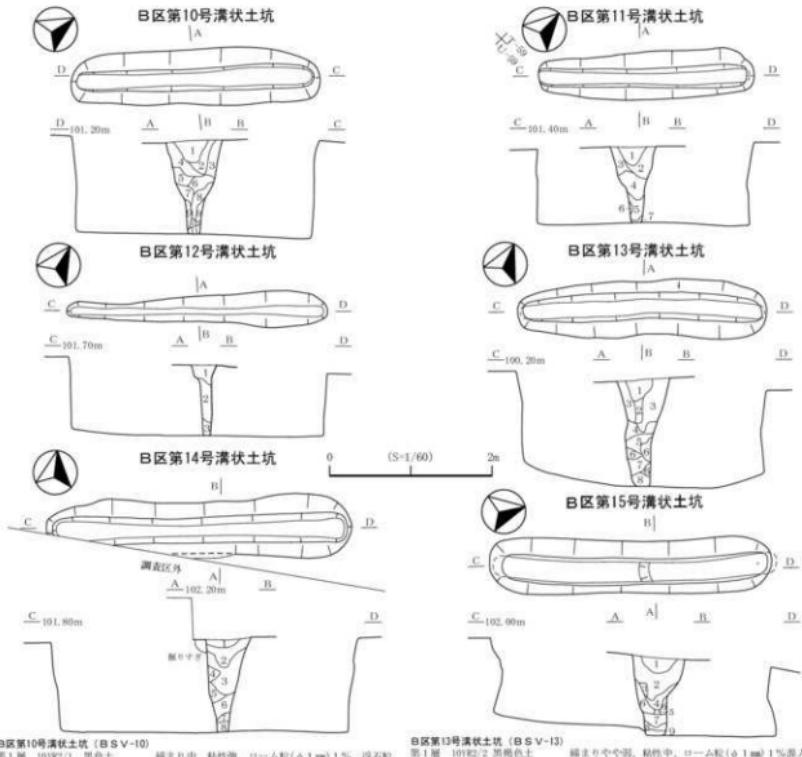
【形態・規模】開口部の形状は直角三角形で、大きさは長軸が約3.2m、短軸幅は18cm～45cmで北側に広い。底面の長軸は約3.1m、短軸幅は最大で12cmである。長軸方向の断面形は箱形で、短軸断面は筒状であるが、形状や深さから上部を削平されているものと思われる。検出面からの深さは86cmで、底面はほぼ平坦である。長軸方向はN-57°-Eである。

【堆積土】自然堆積で3層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第13号溝状土坑（B SV-13）（図16）

【位置・確認】N-76グリッドに位置し、標高約100m地点の第IV層面で検出した。



B区第10号溝状土坑 (BS V-10)

第1層	101R2/1	黒褐色土
第2層	101R2/2	黒褐色土
第3層	101R2/2	黒褐色土
第4層	101R2/2	黒褐色土
第5層	101R3/3	暗褐色土
第6層	101R3/3	暗褐色土
第7層	101R3/3	暗褐色土
第8層	101R4/4	褐色土
第9層	101R5/6	黄褐色土
第10層	101R5/6	黄褐色土
第11層	101R5/6	黄褐色土

B区第11号溝状土坑 (BS V-11)

第1層	101R2/2	黒褐色土
第2層	101R2/2	黒褐色土
第3層	101R2/2	黒褐色土
第4層	101R2/2	黒褐色土
第5層	101R2/2	黒褐色土
第6層	101R2/2	黒褐色土
第7層	101R2/2	黒褐色土
第8層	101R2/2	黒褐色土
第9層	101R2/2	黒褐色土
第10層	101R2/2	黒褐色土
第11層	101R2/2	黒褐色土

B区第12号溝状土坑 (BS V-12)

第1層	101R2/3	黒褐色土
第2層	101R2/3	黒褐色土
第3層	101R2/2	黒褐色土

B区第13号溝状土坑 (BS V-13)

第1層	101R2/2	薄褐色土
第2層	101R2/2	薄褐色土
第3層	101R2/2	薄褐色土
第4層	101R3/3	暗褐色土
第5層	101R3/3	暗褐色土
第6層	101R5/8~8/6	黄褐色~黄褐色ローム
第7層	101R2/2	黒褐色土
第8層	101R2/2	黒褐色土

B区第14号溝状土坑 (BS V-14)

第1層	101R2/2	薄褐色土
第2層	101R2/2	薄褐色土
第3層	101R2/2	薄褐色土
第4層	101R3/3	暗褐色土
第5層	101R3/3	暗褐色土
第6層	101R5/8~8/6	黄褐色~黄褐色ローム
第7層	101R2/2	黒褐色土
第8層	101R2/2	黒褐色土

B区第15号溝状土坑 (BS V-15)

第1層	101R2/3	黒褐色土
第2層	101R3/2	黒褐色土
第3層	101R2/2	黒褐色土
第4層	101R3/2	明黄褐色浮石
第5層	101R3/2	明黄褐色浮石
第6層	101R6/8	明黄褐色浮石
第7層	101R6/8	明黄褐色浮石
第8層	101R6/8	明黄褐色浮石
第9層	101R3/2	黒褐色土

図16 溝状土坑(3)

【形態・規模】開口部の形状は歪な葉巻形で、大きさは長軸が約3.1m、短軸の幅は最大70cmである。底面の長軸は約3m、短軸幅は最大で20cm弱である。長軸方向の断面形はほぼ箱形であるが、中位で緩く折れる。短軸断面は不整なV字状である。検出面からの深さは約1.4mで、底面はほぼ平坦で、中央に向かい緩やかに湾曲している。長軸方向はN-64°-Eである。

【堆積土】自然堆積で8層に分けられる。第1～3層までは黒色土を主体にした層で、第4層以下は壁の崩落したブロックないしはそれと流入した黒色土の混合土である。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第14号溝状土坑（B S V-14）（図16）

【位置・確認】調査区南側境界のU-61・62グリッドに位置し、標高約101.5mの第IV層面で検出した。

【形態・規模】一部調査区の外に出るが、形状は歪な葉巻形である。開口部の大きさは長軸が約3.8m、短軸の幅は最大80cmである。底面の長軸は約3.6m、短軸幅は12cm～25cmで両端部がやや膨らむ。長軸方向の断面形は外側にやや開く箱形で、短軸断面はV字状である。検出面からの深さは約1.2mで、底面は平坦である。長軸方向はN-83°-Eである。

【堆積土】自然堆積で8層に分けられる。第2層以下には黄褐色のブロックおよび細粒が混入する。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第15号溝状土坑（B S V-15）（図16）

【位置・確認】Q・P-69グリッドに位置し、標高約101.5m地点の第IV層面で検出した。

【形態・規模】開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸の幅は最大で約70cmである。底面の長軸は約3.6m、短軸幅は最大で25cmである。長軸方向の断面形は、中位で屈曲するフラスコ状である。短軸断面は不整なU字状である。検出面からの深さは約1mである。底面はほぼ平坦で、中央部から北側が10cm程の深さで一段低く掘られている。長軸方向はN-12°-Eである。

【堆積土】自然堆積で9層に分けられる。第4・6・8層は壁となる第VI～VII層の崩落土である。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第16号溝状土坑（B S V-16）（図17）

【位置・確認】S-72・73グリッドに位置し、標高約101.7m地点の第IV層面で検出した。

【形態・規模】開口部の形状は歪んだ棒形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸幅は最大で約50cmである。底面の長軸は約3.4m、短軸幅は8cm～10cmである。長軸方向の断面形はやや開く箱形で、短軸断面はV字状である。検出面からの深さは約90cmで、底面は平坦である。長軸方向はN-72°-Eである。

【堆積土】自然堆積で4層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第17号溝状土坑（B S V-17）（図17）

【位置・確認】O-71・72グリッドに位置し、標高約101m地点のはば第V層面で検出した。

【形態・規模】開口部の形状は歪んだ葉巻形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸幅は最大で1.1mある。

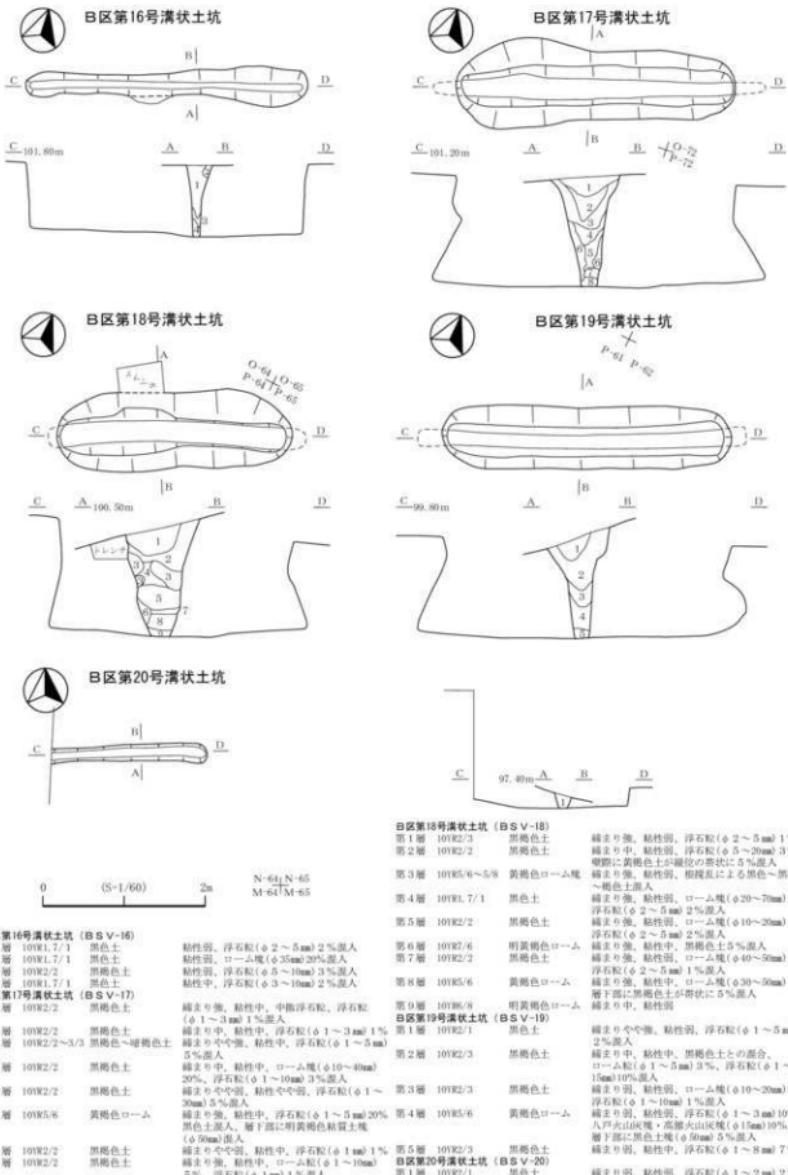


図17 溝状土坑(4)

底面の長軸は約4.1m、短軸幅は15cm～30cmである。長軸方向の断面形は、中位で屈曲し両端部が大きくオーバーハンプするフラスコ状である。短軸断面はV字状である。検出面からの深さは約1.4mであり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はN-71°-Eである。

〔堆積土〕自然堆積で8層に分けられる。黒色土と褐色土を主体にし第6層は壁の崩落土である。

〔時期〕出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第18号溝状土坑（B S V-18）（図17）

〔位置・確認〕P-64グリッドに位置し、斜面落ち際の標高約101m地点で第IV層面で検出した。

〔形態・規模〕開口部の形状は長楕円形で、大きさは長軸が約2.9m、短軸幅は最大で1mある。底面の長軸は約3.2m、短軸幅は最大で25cmある。長軸方向の断面形は、中位で屈曲し両端部がオーバーハンプするフラスコ状である。短軸断面は不整なV字状である。検出面からの深さは約1.4mあり、底面は平坦で中央部がやや深い。長軸方向はN-63°-Eである。

〔堆積土〕自然堆積で9層に分けられる。第3・6・8層は壁の崩落土（第VI～Ⅸ層）である。

〔時期〕出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第19号溝状土坑（B S V-19）（図17）

〔位置・確認〕P-61・62グリッドに位置し、斜面落ち際の標高約99.5m地点の第IV層面で検出した。

〔形態・規模〕開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.6m、短軸幅は最大で80cmある。底面の長軸は約4.1m、短軸幅は15cm～25cmで両端部が膨らむ。長軸方向の断面形は、上位および中位で屈曲しオーバーハンプするフラスコ状で、東側は袋状となる。短軸断面はY字状である。検出面からの深さは約1.3mあり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はN-65°-Eである。

〔堆積土〕自然堆積で5層に分けられる。第3層は壁となる第IV層ないしは第V層のブロックが混合したもので、第4層は第VI～Ⅸ層の崩落土である。

〔時期〕出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

B区第20号溝状土坑（B S V-20）（図17）

〔位置・確認〕N-64グリッドに位置する。急斜面に抜けたトレンチで検出したが、粗掘り作業中に気づかず、第IV層面まで下がってから黒色土のスリット状プランで確認された。

〔形態・規模〕急斜面での検出であり全体形を確認することはしなかったが、検出した部分の長さで約1.9mあり、短軸幅は約20cmある。長軸方向はほぼW-0°Eである。

〔堆積土〕黒色土の単一層で、トレンチ壁面を見ても自然堆積層と遺構覆土の判別ができなかった。

〔時期〕出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

（小田川）

第3節 野外かご（図18）

調査区西側斜面部の遺物包含層内から1基検出した。

〔位置・確認〕標高約97mの小川に近接した斜面地につくられており、U-36グリッドに位置する。遺物包含層中の第IV層面で検出されたことから、堅穴住居跡の存在も考慮したが、周辺に住居の柱穴

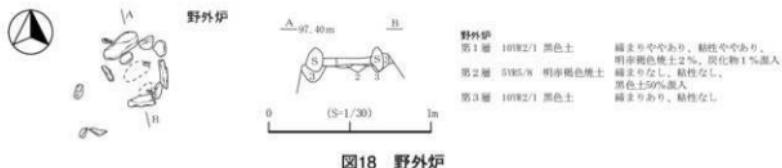


図18 野外炉

などが検出されなかったことから野外炉とした。

〔形態・規模〕 炉は石圓炉で、大きさが10cm～25cmの扁平な礫を40cm×50cmの範囲で「コ」の字状に配置している。西側の斜面下方が空いた状態での検出であり、周辺に礫も散らばっていたことから、掘り方は確認できなかったが方形に囲われていた可能性もある。

〔焼土〕 石圓の中心部には橢円形の焼成面が確認されたが、焼成層は薄く、また礫面の被熱痕跡も弱いことから使用頻度は低かったものと思われる。

〔出土遺物〕 石圓の内から4点の土器破片が出土した。このうちの底部1点が周辺の土器と接合した。すべて斜縄文が施文されている。

〔時期〕 炉内出土土器から縄文時代中期頃のものと思われるが、断定できない。

第4節 集石遺構 (図19)

集石遺構としたものは6基あり、すべて調査区西側の遺物包含層の範囲内で検出した。遺物包含層からは土器と石器のほか多量の礫が出土しているが、そのなかでも特に集合状態にあるものを認定した。これらには形状を意識して配置されている様子は見受けられず、集石の下にも土坑等の遺構は検出されなかった。すべて被熱した自然礫と破碎した礫片であるが、集石の周囲の土壤が焼成を受けた痕跡は確認できなく炭化物も顕著ではなかったが、焼土跡と関連があった可能性もある。これらの内、第2号集石遺構以外の帰属時期は特定できない。

第1号集石遺構 (図19)

〔位置と層位〕 W-36グリッドに位置し、遺物包含層の第II層相当中から検出した。

〔礫の状況と範囲〕 20cm弱～30cm位の角礫が8個ほど、60cm×70cmの範囲に置かれ、その内側を主に10cm未満の破碎片が散在する。

第2号集石遺構 (図19)

〔位置と層位〕 W-31グリッドに位置し、遺物包含層の第IV層のほぼ直上から検出した。

〔礫の状況と範囲〕 30cmを超える2つの被熱礫を中心に、80cm程の範囲に破碎片と土器片が散在する。

〔時期〕 台石(図42-137)の脇から同一レベルで出土している長七谷地Ⅲ群土器から、縄文時代前期初頭の可能性がある。

第3号集石遺構 (図19)

〔位置と層位〕 W-35グリッドに位置し、遺物包含層の第II層相当中から検出した。

〔礫の状況と範囲〕 20cm位の2つの被熱礫をはさみ、約1.1m×1.5mの範囲に破碎片が散在する。

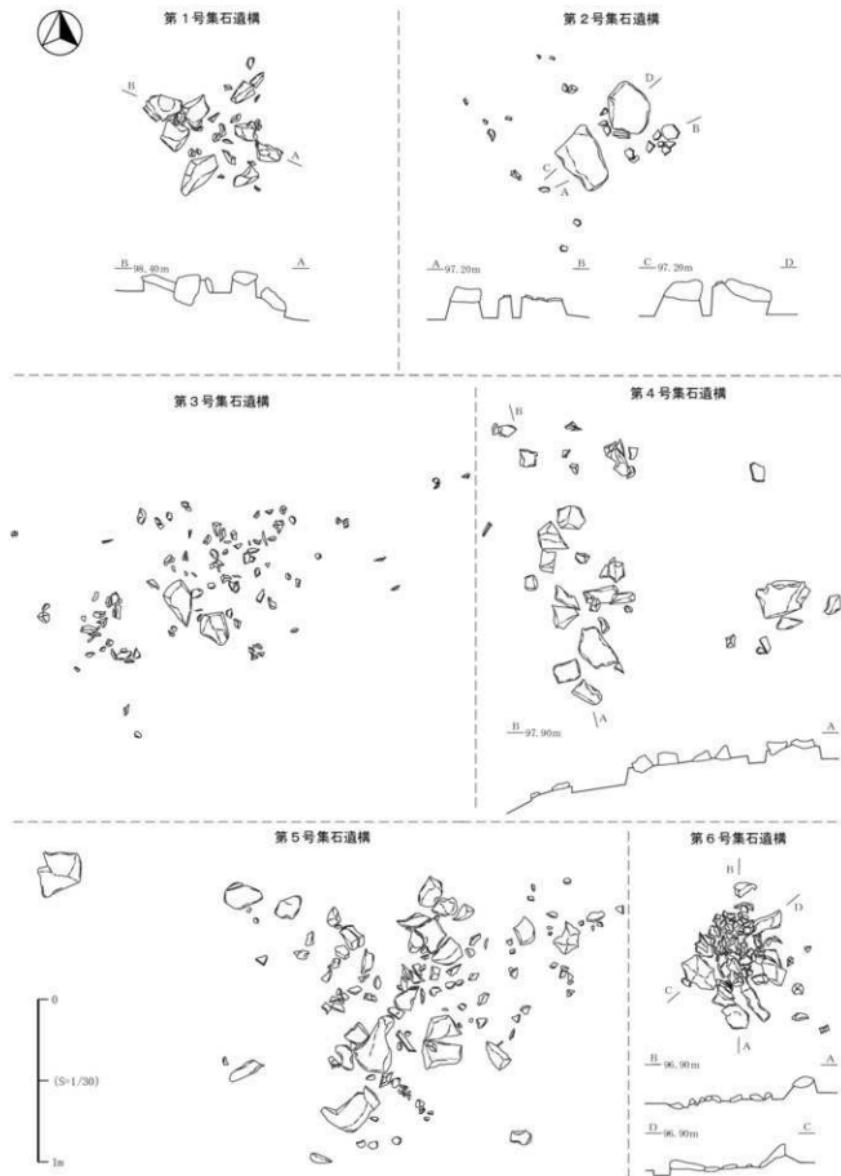


図19 集石遺構

第4号集石遺構 (図19)

【位置と層位】 U-37グリッドに位置し、遺物包含層のはば第Ⅳ層直上から検出した。

【礫の状況と範囲】 被熱した15cm~25cm位の角礫が十数個、同一レベルで約60cm×1.7mの範囲にあり、東側に約1m程離れて同一石材と思われる30cmを超える被熱礫がある。他に比べて破片は少ない。

第5号集石遺構 (図19)

【位置と層位】 X-37グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅱ~Ⅲ層にかけて検出した。

【礫の状況と範囲】 同一石材の破碎した角礫が、約2mの範囲に集中する。礫の大きさは20cmを超えるものが多く、被熱による破碎はもとより、意図的に破壊され捨てられた可能性も考えられる。

第6号集石遺構 (図19)

【位置と層位】 W-30グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅳ層直上から検出した。

【礫の状況と範囲】 15cm~最大25cm程の礫が7~9個ほど約60cm×70cmの範囲に置かれ、その上に多数の礫および破片がまとめられてる。礫はすべて強く被熱しており、おそらく同一石材と思われる。

(小田川)

第5節 焼土跡 (SN-1~5) (図20)

本調査では5基が検出されている。以下にまとめて記述し、個々の規模等については別表に示す。

【検出位置と層位】 各焼土のうち第1~3号までの3基は、調査区西側斜面部のX-34・35グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅱ層相当中から並んで検出されている。第4・5号は調査区東側の産業廃棄物集積地のS-80グリッドに位置し、第Ⅲ層面から検出している。

【規模形状と焼成層】 周辺の土壤とは異なる赤色に変色した範囲を捉えた。第1~3号は赤褐色でブロック状の焼土が斑に拡がるもので、第4・5号は地面が赤色に変化したものである。範囲の形状は不整形および不整楕円形・円形があり、規模は、第1号の約100cm×70cm不整形を最大に、最小は第4号の約30cm径の円形である。焼成層の色調は橙色~明褐色で、第4・5号はレンズ状の焼成層であり、焚き火の痕跡が直に遺存しているものと判断されるが、第1~3号は焼土塊が斑に周囲の土壤にくい込んだ状態にあり、二次的な痕跡の可能性が高い。

【出土遺物と時期】 各焼土に直接伴う出土遺物はなく時期は不明である。

(平山)

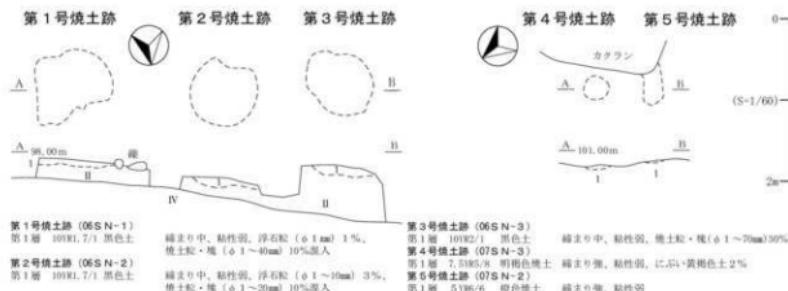


図20 焼土跡

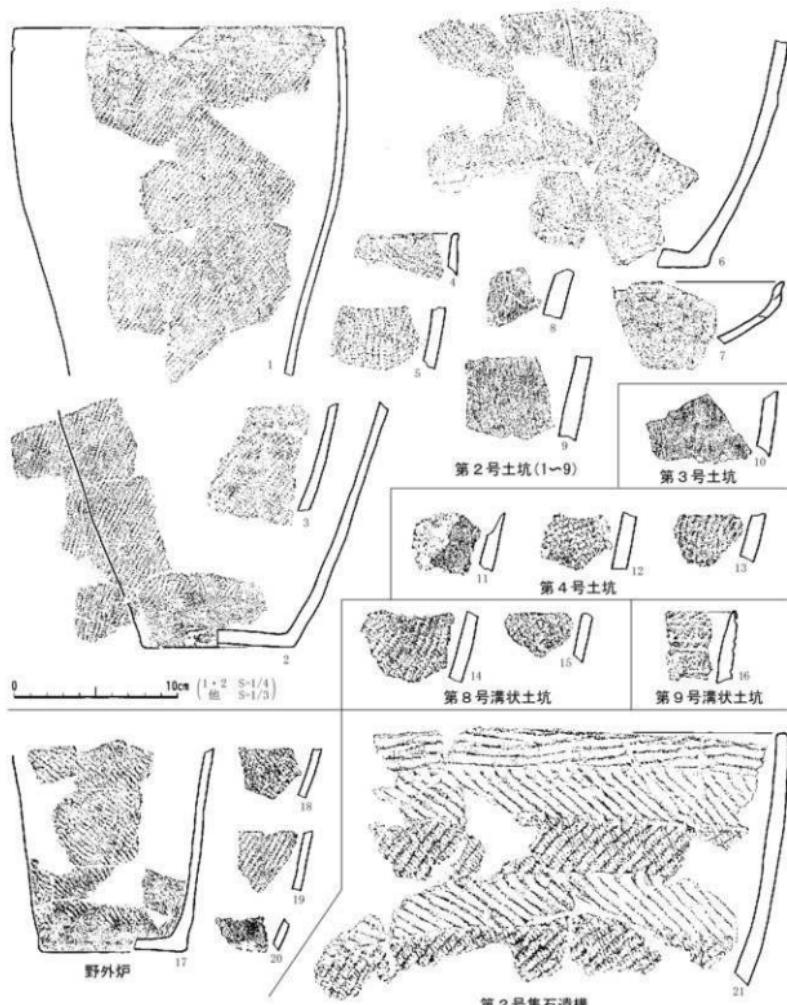


図21 横沢山(1)遺跡遺構内出土遺物

焼土跡一覧

遺構名	グリッド	平面形	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	備考	年代
第1号焼土跡	X-3-5	不整形	第II層	102	68	12	焼土はブロック状	不明
第2号焼土跡	X-3-5	不整円形	第II層	83	72	13	焼土はブロック状	不明
第3号焼土跡	X-3-4	不整円形	第II層	88	67	17	焼土はブロック状	不明
第4号焼土跡	S-8-0	円形	第III層	32	30	6	焼成層はレンズ状	不明
第5号焼土跡	S-8-0	不整形	第III層	42	24	3	搅乱を受けている・焼成層はレンズ状	不明

第6節 炭窯 (図22)

荒屋敷久保(1)遺跡で検出された古代の炭窯と同様な遺構を5基検出した。この内4基は、西側端部の小川に近接した低地から検出されており、遺物包含層を掘り込んで構築されている。川向かいの荒屋敷久保(1)遺跡で検出された製鉄炉に関連したものと捉えている。

第1号炭窯 (図22)

[位置・確認] W・X-32・33グリッドに位置する。緩斜面地の第IV層面で検出した。

[形態・規模] 隅丸長方形を基調とする。遺構の西側端部を欠くが長軸約7m、短軸は約1.4mある。

[堆積土] 黒色土の単一層で、層中に炭化材の細片を多量に混入する。

第2号炭窯 (図22)

[位置・確認] V・W-32・33グリッドに位置する。緩斜面地の第IV層面で検出した。

[形態・規模] 隅丸長方形を基調とする。遺構の西側端部を欠くが長軸約7.5m、短軸は約1.5mある。底面と壁の一部に焼土が検出されている。

[堆積土] 黒色土の単一層で、層の底面付近に炭化材の細片を多量に混入する。

第3号炭窯 (図22)

[位置・確認] U・V-31～33グリッドまで位置し、小川に近接している。第IV層面で検出した。

[形態・規模] 隅丸長方形で、長軸約10.5m、短軸は約1.6mである。精査中に底面から水が染みだすほどの地点にあり、焼成作業の機能からみて不適当地と思われるが、貼り床を施し構築されている。

[堆積土] 黒色土を主体とする層で、第3層には炭化材の細片を多量に混入する。第4層は粘土を主にした貼り床土である。

第4号炭窯 (図22)

[位置・確認] X-31グリッドに位置し、第2号土坑と重複し本遺構が新しい。第IV層面で検出した。

[形態・規模] 隅丸長方形で一部調査区外に伸びる。検出した部分で、長軸約4m、短軸は最大で85cmある。検出面からの深さは20cm程度であるが、調査区壁面の土層からは、少なくとも70cm、またはそれ以上の深さがあったものと思われる。

[堆積土] 黒色土の単一層で炭化材の細片を混入するが、上記の3基ほど多量ではない。

第5号炭窯 (図22)

[位置・確認] 丘陵平坦部のS-65グリッドに位置し上記の4基とは離れている。規模は小さく炭化材や焼成土もないが形態的に似ることから、未使用的炭窯の可能性から含めた。しかし、土層の状態は他のものとは異なり、調査区内に掘られた植え込み痕または風倒木痕の可能性も捨てきれない。

[形態・規模] 歪な隅丸長方形である。長軸約3.7m、短軸は最大で約1.5mある。

[堆積土] 軽石粒を混入する黒色土と褐色土で、ブロック状の堆積である。

(小田川)

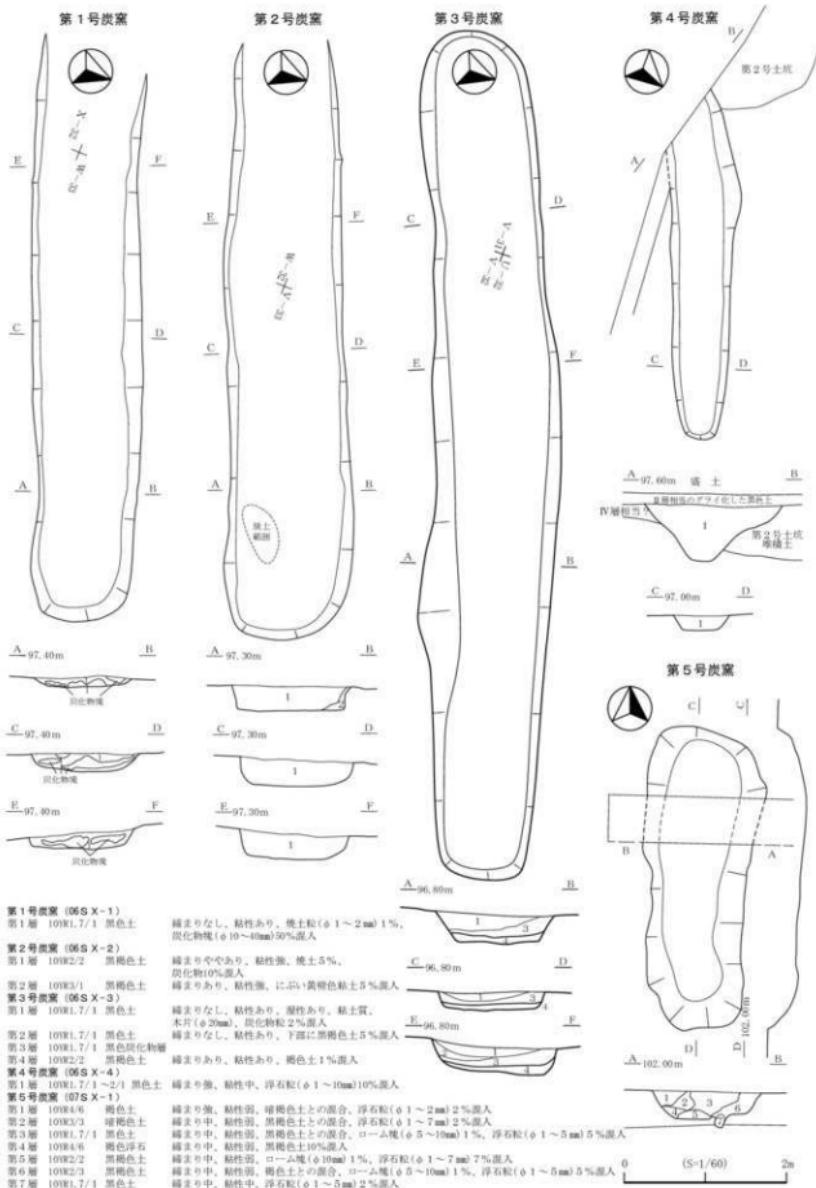


図22 炭窪

第2章 出土遺物

第1節 出土土器 (図23～図33)

2カ年の調査で出土した土器の総数は12,750点（遺構内出土は394点）、総重量126,135gである。土器の時期は、縄文時代早期前葉から晩期、弥生時代前期と後期まで多時期にわたるが、早期前葉の土器を除き、その大多数は、グリッド40ラインから西側の緩斜面、T～X-30～40の範囲から出土している。第1編第4節にも記述したように、この範囲は後世の地形変化が著しく、盛土の中はもとより各時期の土器が混在して出土する地点が多数見受けられた。盛土の下には影響を受けていない遺物包含層も遺存していたが、その内でも縄文時代早期以降の遺物は混在した出土状況を示すものが多く、標高97m以下の水辺縁辺での混入が特に激しい。緩斜面地で二次堆積したほか、長期にわたりこの地点が使われたことにより、遺物が移動しているものと考えられる。このため包含層を時期別に分けることはできなかった。出土土器は破片で全体形がわかるものは少ないが、そのほとんどがいわゆる粗製土器の破片である。その中でも、器形と文様構成のわかる良好な資料に、県内では希な大木3式土器が出土している。包含層以外ではグリッド50～80ラインまでの平坦部からも出土しているが、出土状況は散漫で、すべてが細破片である。またT・U-56～65グリッドの第IV b層から早期前葉の土器片が出土しているが、やはり細かく復元にまで至らない。以下に、各時代ごとに大別し記述する。

第I群—縄文時代早期の土器 (図23-1～図25-98)

早期前葉の土器（1～38）1～21は魚骨回転文土器である。施文される魚骨はニシンタイプで、腹椎骨による浅い櫛歯状の条線と2個の突起の圧痕がある。施文される縄文はL RとR Lがあり、前者の方が多い。胎土には纖維を含む。22～30は日計式押型文土器に伴う縄文土器で、魚骨回転文土器と出土層位と範囲がほぼ同じであることから共伴する可能性がある。胎土には纖維を含み、魚骨回転文土器より硬質な感じを受ける。口唇端部には斜位から削ぎ取るような刻みが施され、口縁部には、縄文施文後に数条の沈線が施されている。31・32は底部付近の破片で、丸底ないしは尖底になるものと思われる。33～38は無文の胴部と底部片である。出土層位から、早期前葉の土器群に含めた。

中期中葉の土器（39～89）39～48は物見台式土器である。沈線に沿って貝殻腹縁刺突を施すものと、沈線を主体にし一部に貝殻腹縁刺突を施すもの（44・46・47）がある。49～61は鳥木沢式土器である。貝殻腹縁刺突を横位羽状に施すもの（49～52・55・61）と、縦位に施文するものがある。（50・51・55・57・58）の内面には貝殻条痕が施されている。62～84は吹切沢式土器である。貝殻腹縁押し引き文が施文されるもの（62～71・73・74・81・82・84）と、貝殻腹縁刺突が施されるもの（72・79・80・）がある。79は鳥木沢式かもしれない。84は5mm程に切断した貝殻を原体に用いている。83は細かい刺突文が施されるもので、75～78は無文である。85～89は底部片で、鳥木沢式および吹切沢式と思われるが、85は縦位の貝殻腹縁刺突が全体に施されており寺ノ沢式が妥当かもしれない。

早期末葉の土器（90～98）90～98は早稻田5類に相当する土器である。0段多条を施文するものが多く、90～92の口縁には縄の側面圧痕が施されている。94～97は表裏面に同一原体で施文されるものである。98は単軸絡条体第1類の施文である。

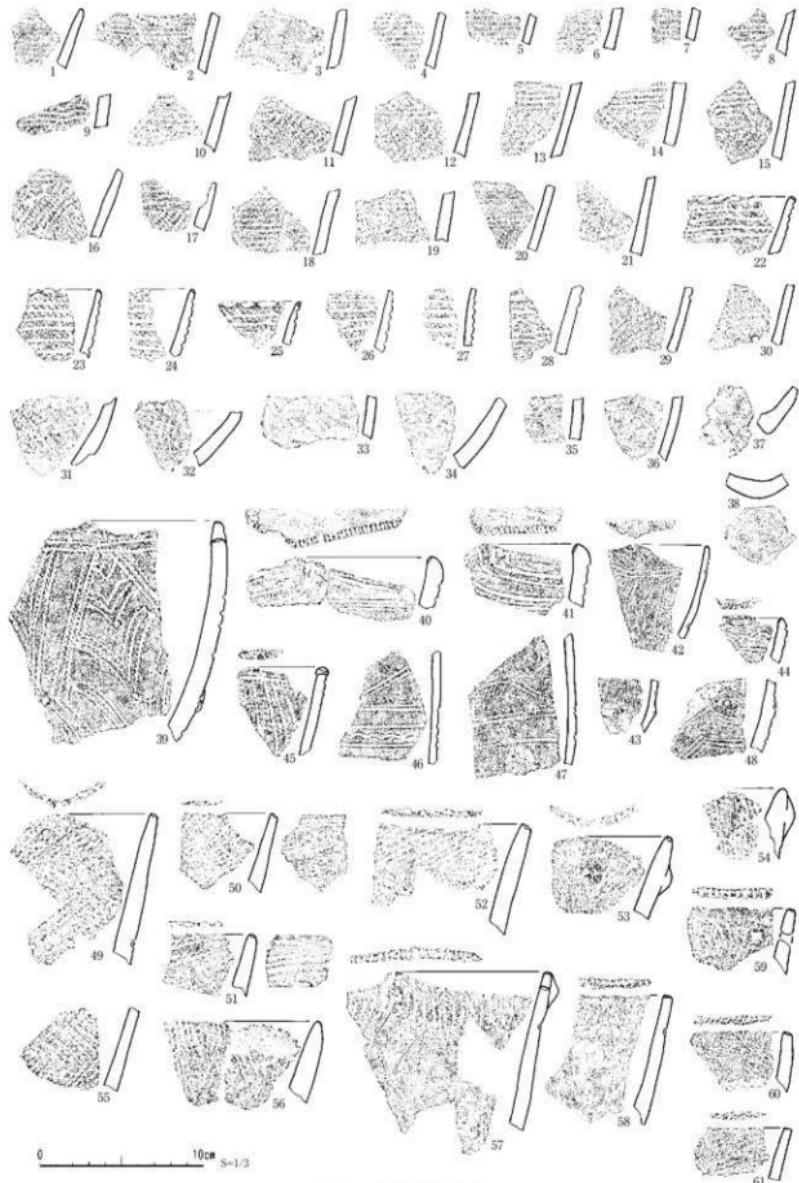


図23 出土土器 (1)

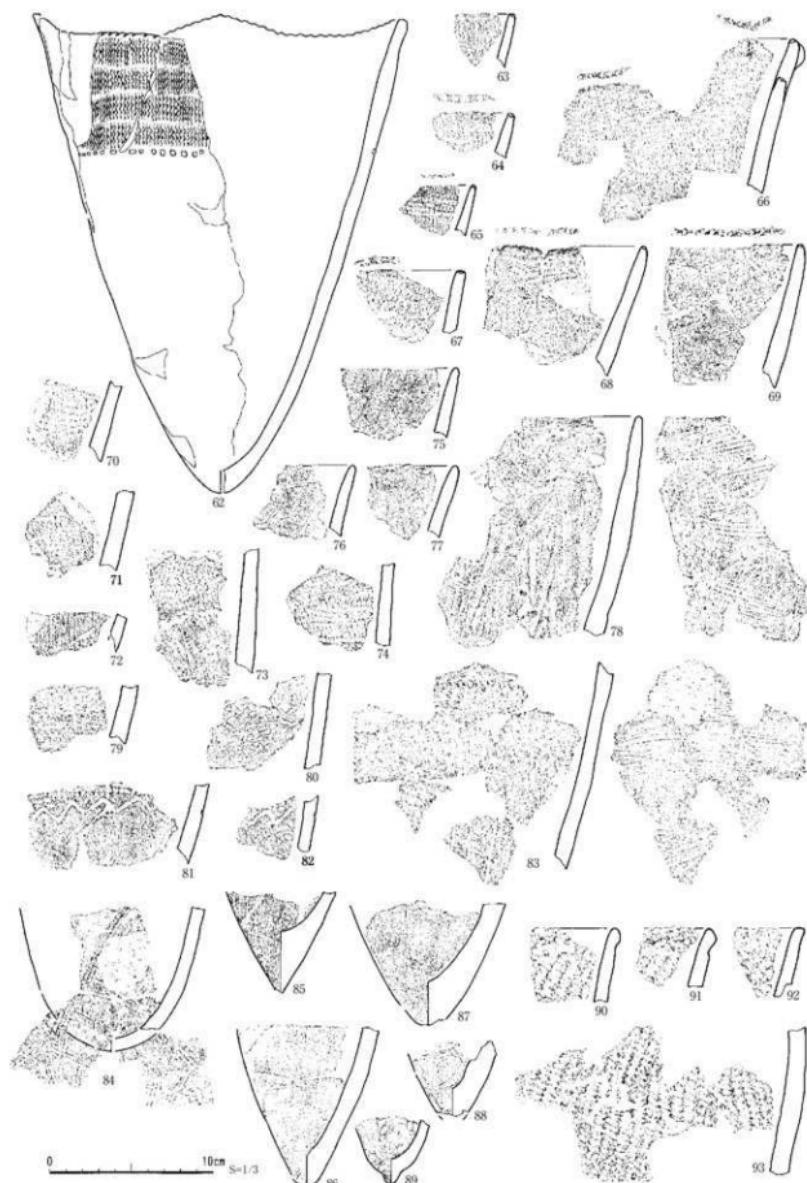


図24 出土土器 (2)

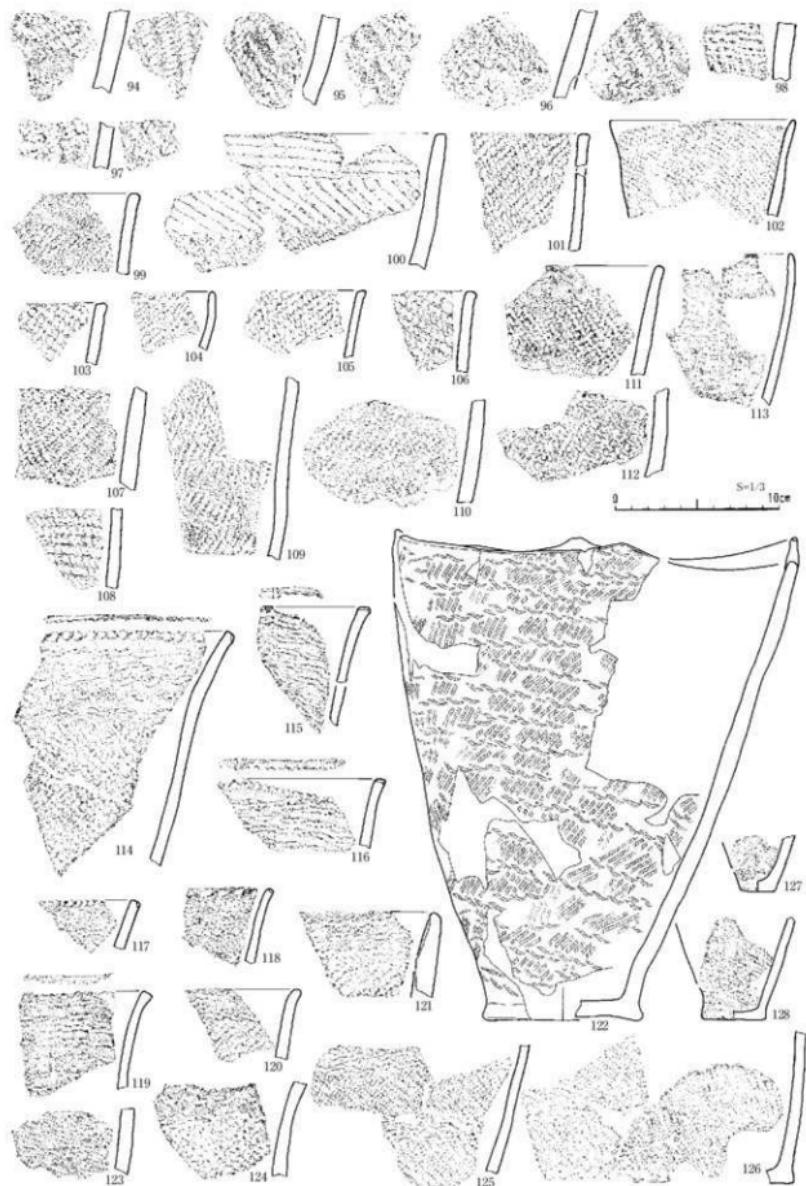


図25 出土土器 (3)

第Ⅱ群—縄文時代前期の土器（図25-99～図28-153）

前期初頭の土器（99～113）100は長七谷地Ⅲ群土器で、第2号集石遺構出土土器と同一個体である。口縁部文様帶に節のない横走縄文？が、その下に節のない縄文とLR縄文が羽状に施文される。口縁部の横走縄文と羽状縄文の片方は、条は明瞭であるが節は圧痕として表出されていない。条間の稜をみると、わずかだが節らしき痕跡も見受けられるが確定できない。節を磨り消しているともいわれるが、その痕跡も明瞭に見られずこの原体については不明である。99・101～109は和野前山第8群E類・柄鉢第II群1類に相当する土器である。斜縄文が施文されるもので、口唇端部は平坦に面取りされるものが多い。胎土に纖維を含み、質感は堅く緻密である。101・103・105は組紐が施文される。110～112は組紐が施文されるもので大木1式に相当するものであろうか。113は無節が施文される。

前期前葉の土器（114～136）114～136は大木2式に相当する土器である。波状口縁のもの（115・116）と、平口縁のもの（114・117～120・129～131）があり、口端が平坦に面取りされているものが多い。また、平坦な口端に縁取るように浅い沈線が施されるもの（114～116・119）がある。文様は、口唇外面に刻みが施され（114～118）、口縁部文様帶には単軸絡条体第3類の所謂葺瓦状撲糸文が施文される。胴部には、組紐が施文されるもの（114・124）と、斜縄文と結節回転文が施文されるもの（121・125・126）がある。122は緩い波状口縁で波頂部に刺突をもち、LR縄文と結節回転文が全面に施文されている。125・126はRL縄文に結節回転文が施文される。128は単軸絡条体第1類が施される小型土器で、大木2式に併行するものとして含めた。129～132は節のない単軸絡条体第5類所謂網目状撲糸文が施文されるもので、球胴形の器形となる。133・134は胴部に組紐が施文され、その下に山形状沈線が施されている。

前期中葉の土器（137～153）137～141・151は大木3式土器である。137・138は比較的太い沈線で弧状文と思われる文様が施されている。139と140は同一個体で、鋸歯状沈線文が二重に施されている。141は細い沈線で、鋸歯状文と曲線文が施されている。151-a～cは同一個体である。遺物包含層のW-38・39グリッドから写真13-中に示したようにまとめて出土しているほか、水辺のT-35グリッドや盛土中からも同一破片が出土している。接合復元がうまくできなかったため、各接合破片を分けて掲載した。胎土は堅く緻密で纖維は含まない。大きさは、口径が約41cmで、底部は欠くが、推定で約45cm程の器高があったものと思われる。器形は、口縁がラッパ口状に大きく開き、胴部上半部は緩やかにくびれて胴部中位が張る、特徴的な形である。平口縁で口唇は丸く成形されており、二ヶ一対の突起が貼り付けられている。この突起の頂部と内面側には刺突が施されているほか、二ヶ一対の突起に挟まれた口唇端部にも刺突が施されている。復元の不備から、二ヶ一対の突起と口端部刺突の単位を明確にできないが、3単位の可能性がある。地文には、太い縄と細い縄のLR縄文が施文されているが、胴部下半から底部にかけては施文されていない。口縁部文様帶は無文で刺突列で区画され、刺突列は斜め上方から施されている。さらに、刺突列の上方には、竹管による円形刺突と先の尖った棒状工具による刺突が、一部分だけに付けられている。主文様となる頸部文様帶には、2条の横位平行沈線がめぐらされ、下位の沈線からさらに平行および直行する沈線でクランク状の文様を描いている。クランク状文様の下端には、竹管による円形刺突が施され、さらに円形刺突の内に尖った棒状工具による刺突が付けられている。牧田貝塚出土土器に類似した文様モチーフが見られる。142～147は大木4式に相当する土器である。142～144・146は同一個体で底部を欠く。口縁部は外反し頭

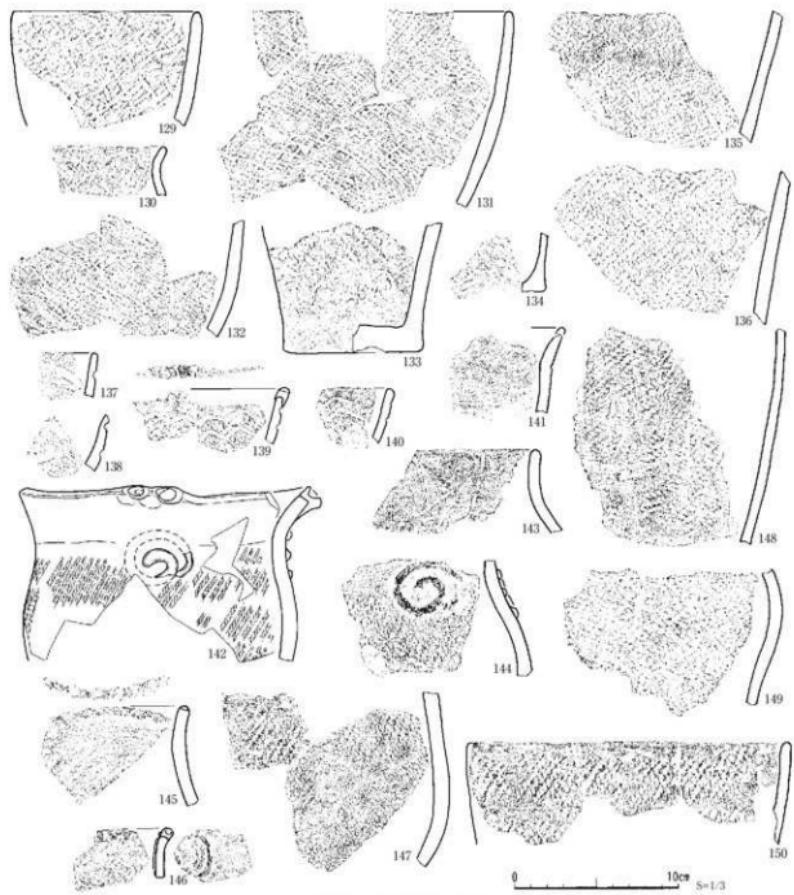


図26 出土土器（4）

部がくびれ胴部が張る、金魚鉢形の器形になると思われる。平口縁で口唇は外傾ぎみに成形されており、口端の一ヵ所に粘土を貼り付けてさらに刺突を加えた装飾を施している。口縁部は無文で、頸部には渦巻き状の隆帯を施している。地文にはLR縄文が施される。147は小型の土器で、口端に粘土を貼り付けてさらに竹管による刺突を3つ施している。内面には剥落しているが渦巻き状の隆帯を施している。地文縄文はRLである。148～150は胎土と器形および施文文様から、大木3～4式土器に含めた。149は組紐縄文が施文されるもので、大木2式の可能性もあるが器形から本類に含めた。152・153は胎土に纖維を含む土器で、型式不明だが縄文前期に帰属するものと思われる。

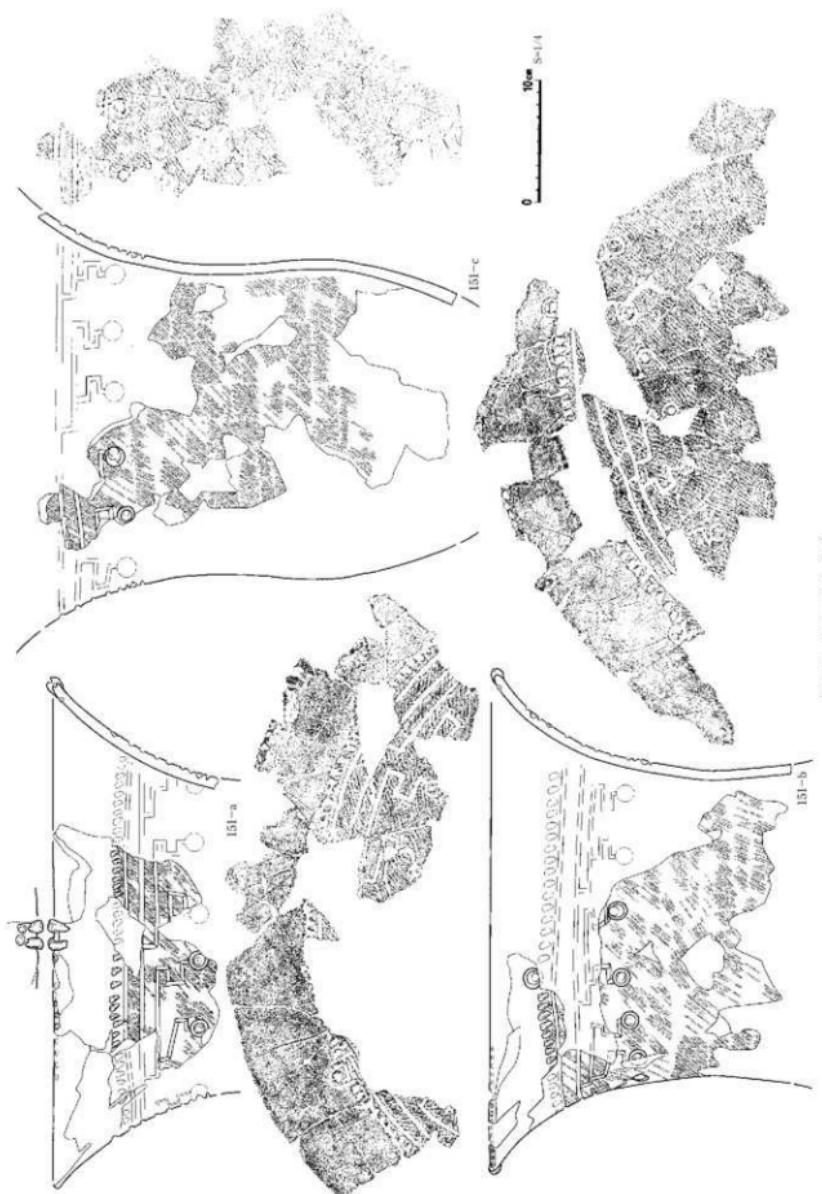


図27 出出土器(5)

第Ⅲ群—縄文時代中期の土器（図28-154～図29-174）

中期前葉の土器（154～160）154は円筒上層a式土器である。平口縁で口唇部に連続する隆帯をめぐらし、頸部の隆帯で区画され口頸部文様帶内には撫糸圧痕が施される。155は円筒上層b式土器である。大型の山形状口縁で、垂下する隆帯で区画される口頸部文様帶内に馬蹄形の撫糸圧痕が施される。156は円筒上層c式土器である。口頸部文様帶内に弧状の隆帯を配し、内部に縄の側面圧痕が施されるほか、頸部隆帯の上方に円形刺突が施文されている。

中期中葉の土器（161～170）161は円筒上層d式ないしはe式である。波状口縁で、波状部に弧状とそこから垂下する隆帯を施している。地文に結束第2種の羽状縄文を施文している。162～168は横位や縱位の沈線文が施される円筒上層e式の破片である。169・170は同一個体で大木式的な感じを受ける。口唇に2条の縄の側面圧痕、口縁部文様に波状の沈線文と曲線文が施される。

中期末葉の土器（171～174）大木10式に併行する土器と思われる。171は沈線による梢円形文内に縄文が充填施文される。173は磨り消し縄文である。174は内面に鱗状突起が施されている。

第Ⅳ群—縄文時代後期の土器（図29-175～図30-189）

後期初頭の土器（175～187）牛ヶ沢式土器・仮称葦窓式に相当する土器である。175は口縁部無文帶、頸部に縄の側面圧痕が施される。176・177は波状口縁を呈し、口縁部文様帶を縱位の隆帯で区画するものである。181・182は同一個体で、波状口縁の波頂部下に断面三角形状の隆帯（線）による渦巻き文が貼付され、胴部は縱位2条の隆帯（線）を横位の短い隆帯で連結している。さらに隆帯（線）から横位の平行沈線と二重の弧状沈線を施し、その中にL R縄文を充填施文している。183は底部付近に隆帯をめぐらしている。184～187は同一個体である。平口縁で無文の口縁部は、胴部まで垂下する縱位隆帯で区画されている。縱位隆帯で区画された胴部には沈線で弧状文と波頭文が施され、R L縄文が充填施文されている。

後期前葉の土器（188・189）十腰内I式に相当する土器である。188は緩い波状口縁で沈線で円形文および曲線文が施される。189は単軸絡条体第5類が施された底部で、大型の土器である。

第Ⅴ群—縄文時代晩期の土器（図30-190～193・図31-214）

晩期中葉の土器（190・191）190は大洞C2式に相当する台付鉢ではば完形で出土した。口唇が内側にはば直角に折れる器形で沈線と刺突が施され、口縁には入組み文とL R磨消縄文が施されている。191は無文の鉢形土器で、口唇に装飾突起が付けられる。大洞C1・C2式に相当するものと思われる。

晩期末葉の土器（192・193・214）大洞A・A'式に相当土器である。193は変形工字文が施されるもので、台付き鉢の可能性がある。214は壺形土器の頸部で、沈線と刺突が施されている。

第VI群—弥生時代の土器（図30-194～図31-229）

前期の土器（194～213）194～213は砂沢式ないしは後続する土器である。台付き鉢（194～199・203）と、鉢形土器（204～212）、壺形土器（213）がある。深鉢形土器は第Ⅳ群に示した。工字文が施文されるもの（194・205・206・208）と、変形工字文のもの（195・196・198）、平行沈線のもの（197・199～204・207・209～212）がある。199は大型の台部で赤彩の痕跡が残る。213は大型の広口壺である。

中期・後期土器（215～229）215～222は念仏間式に相当する土器である。215は平行沈線と二重の鋸歯状沈線が施文され、磨り消し縄文が施されている。216・217は横位の沈線の間に鋸歯状沈線

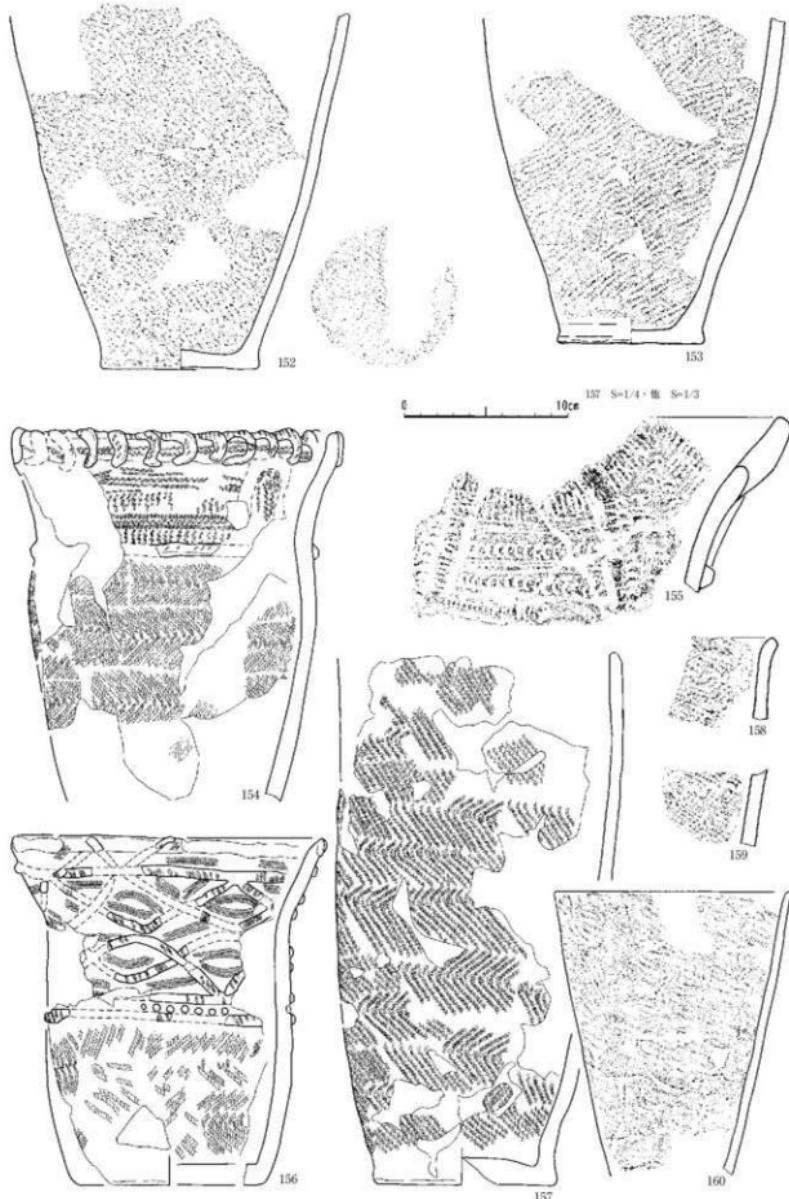


図28 出土土器 (6)

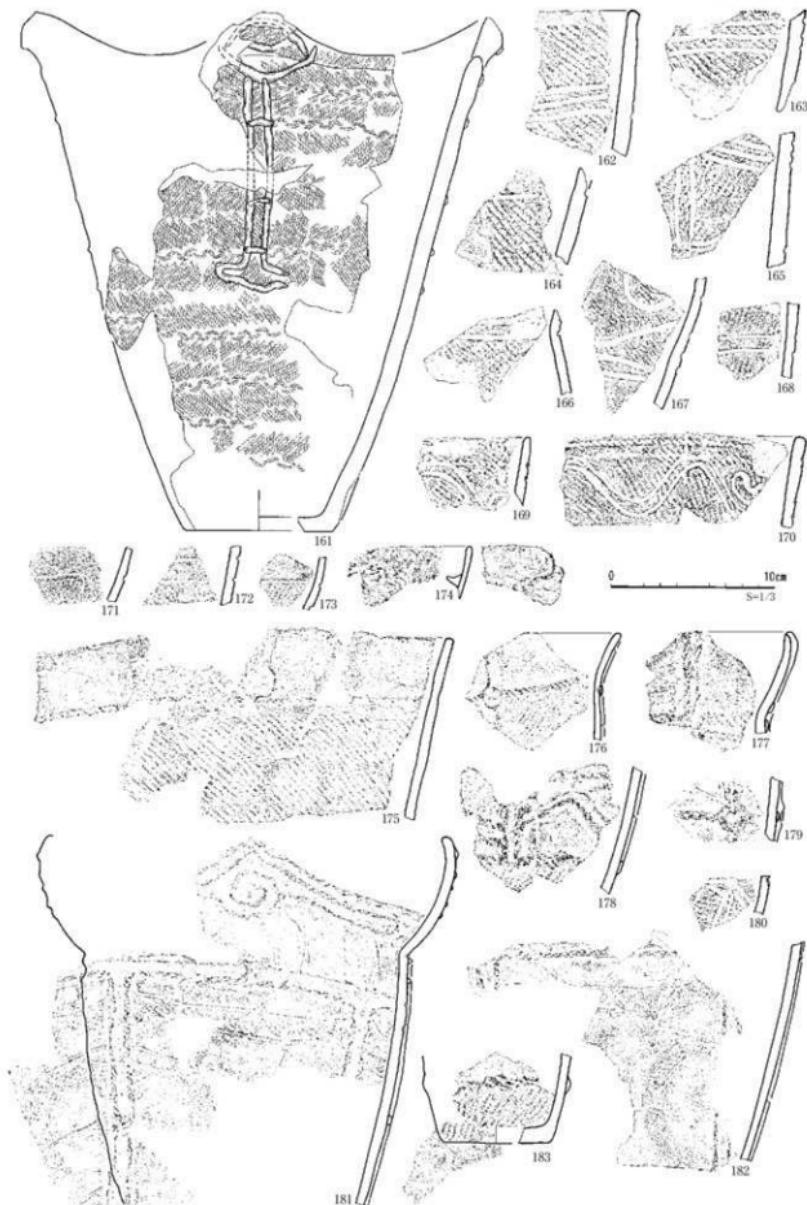


図29 出出土器 (7)

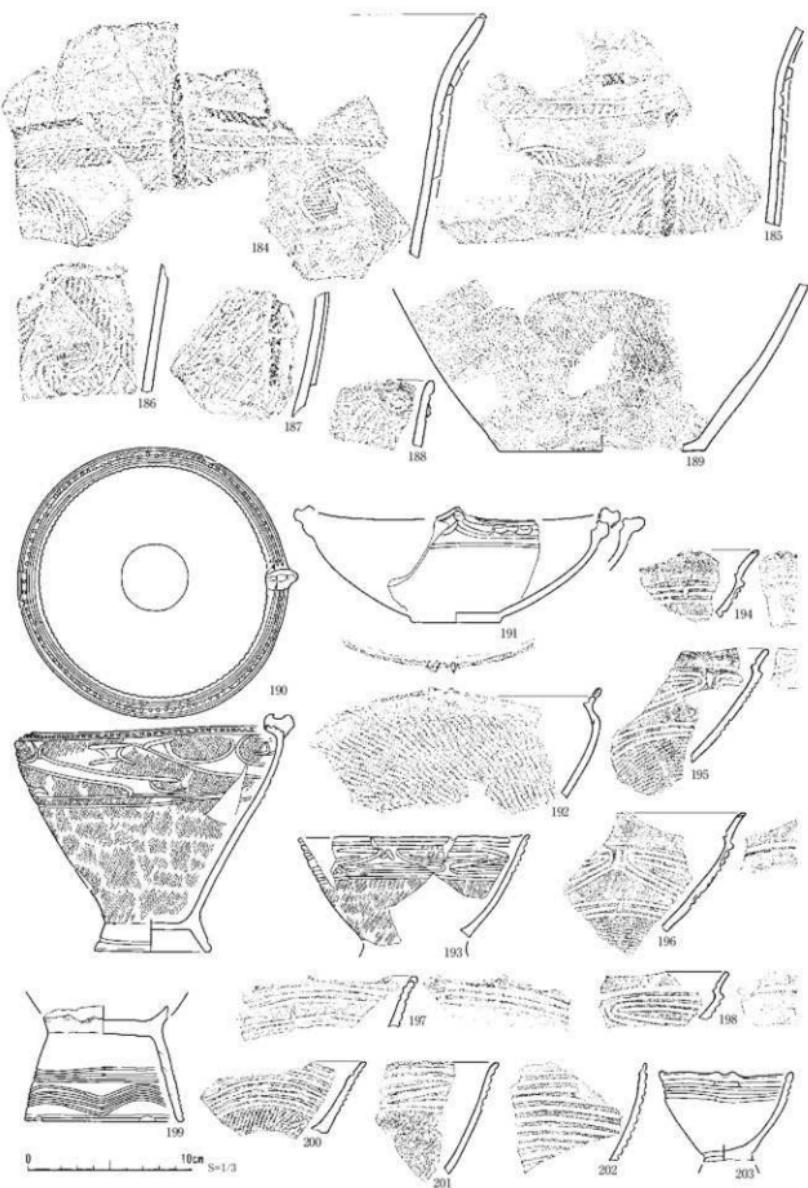


図30 出土土器 (8)

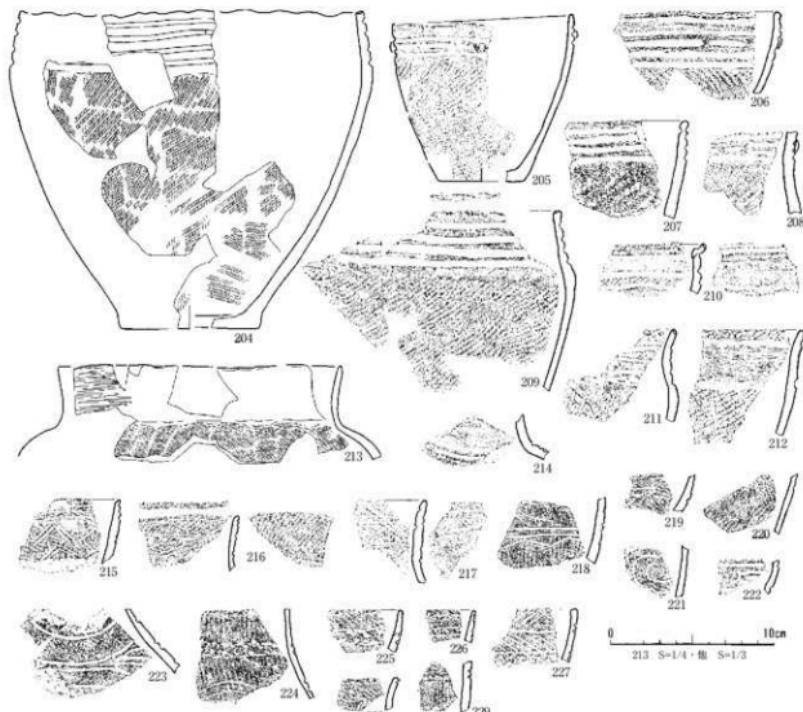


図31 出土土器（9）

が施文されており、217には内面にも施される。219は矢羽根状沈線が施されている。211は蕨状の渦巻き文である。222は平行沈線の間に梢円形文と刺突が施されている。223は頸部の沈線間にR L 繩が充填施文されている。224～229は天王山式に相当する土器である。交互刺突文が施されている。

第VII群—縄文時代中期～晩期・弥生時代の粗製土器（図32～230～図33～252）

出土土器の大多数が斜縄文を施文される、胎土に纖維を含まない所謂粗製土器であり、それらをまとめた。器種は深鉢形で施文原体はR L のものがやや多い。230・238は同一個体で、口縁部に縱走するR L 繩文が施文されている。234は折り返し口縁である。240は工具で面取りされ外傾する口唇である。243は球状に胴部が膨らむ器形となる。246の底部外面には網代の痕跡が残る。250は無文で工具によるケズリとナデで成形されている。これら230～250は縄文中期から晩期の範疇で捉えられるものと思われる。251は内側に屈曲する口縁で、口縁外面は工具と指ナデにより成形され地文が磨り消されている。252は口端に指頭圧痕を施した小波状口縁で、口縁外面は指で成形されている。251と252は弥生時代に相当するものと思われる。



図32 出土土器 (10)

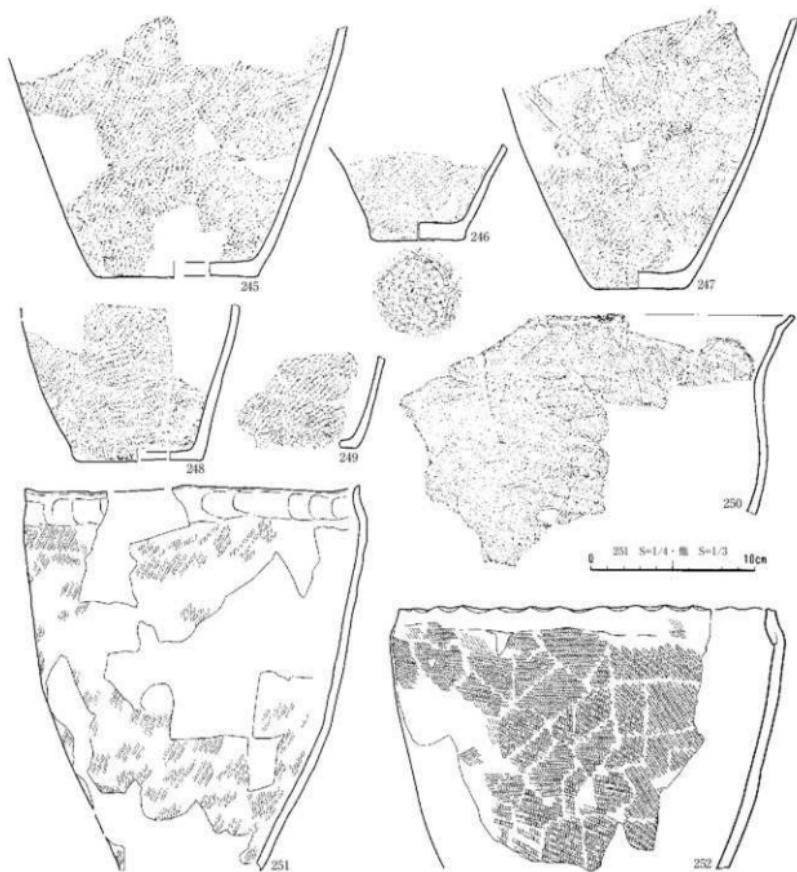


図33 出土土器 (11)

第2節 出土石器 (図34～43)

石器類は遺構内と遺構外から総数120点が出土している。大多数がB区西側の遺物包含層からの出土であり、第Ⅰ層～第Ⅳ層まで縄文時代および弥生時代の土器と混在して出土している。剥片石器類は形態から、礫石器類は形態のほか整形痕と使用痕跡別に分けた。以下に各器種ごとに記述し、各石器の出土位置や石材等については観察表に示した。また、遺構内の第2号溝状土坑出土石錨(図34-8)と第2号土坑出土台石(図42-140)、第2号集石遺構出土台石(図42-137)も遺構外に混せて掲載した。

石錨 (1～19) 遺構内出土の1点を含め19点出土している。基部形態から次のように分けられる。

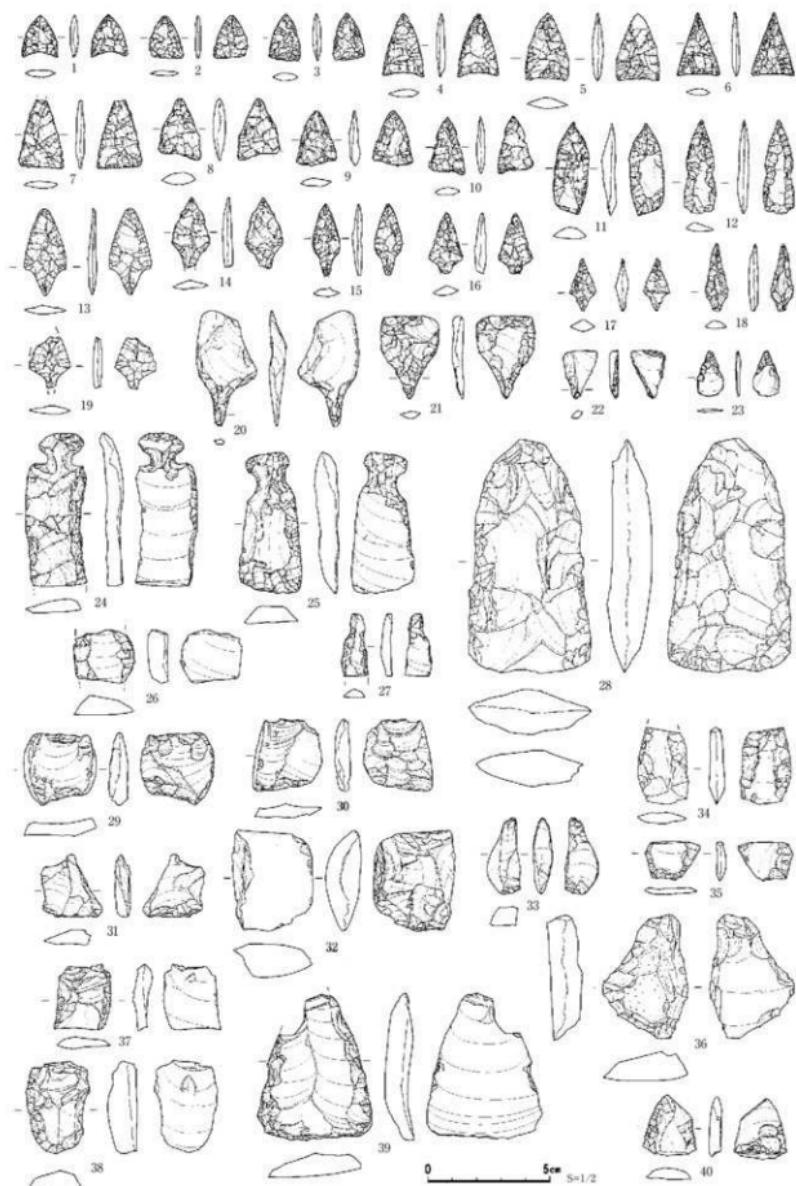


図34 出土石器 (1)

無茎鐵（1～12）明らかに凹基と分けられるもの（1・4）、平基鐵と分けられるもの（2・6・7）と5のように緩い折りで判断に困るものがある。1～3は基部に若干の違いはあるが、大きさと平面形状は似通っている。平面的に見て、両側縁が緩やかに湾曲するものと、直線的なもの（6・7）があり、前者には短い五角形鐵に分けてもよいもの（1・5・8）がある。8～10は再調整されているものだろうか、基部の片方が張り出すようなつくりである。11・12は五角形鐵で、11は側縁が対称ではない歪なつくりである。12は鐵身の中位を抉る調整が施されている。

有茎鐵（13～19）すべて、なで肩状の基部の凸基鐵であり、19以外の基部幅は広く、側縁の形状は直線的なものが多い。18の鐵身は細身である。16の基部には僅かだがアスファルトが付着している。

石錐（20～23）4点の出土である。20は横長剥片の一側端部に両面調整で茎状の錐刃部をつくり出している。21～23は尖頭形の錐刃部である。21は両面の周縁調整で形状が整えられている。22・23は錐刃部だけのつくり出しである。

石匙（24～27）4点の出土ですべて縱型石匙である。刃部下端を欠損している24は、松原型石匙に見られる、背面側右側縁の急角度調整、左側縁の深い押圧剥離、腹面右側縁の連続した小剥離調整の特徴から、早期末～前期初頭頃に帰属する。25はつまみ部を両面調整し、背面の右側縁と剥片端部に剥離を施し刃部をつくり出している。26は上下両端を大きく欠く、印象的に本類に含めたが撫器かもしれない。27は縱長の小剥片を素材とし、簡易な調整剥離でつまみと刃部をつくり出している。

石箒（28）1点出土している。背面の刃部側に礫面を残すもので粗い調整で短冊形に整形されている。側縁には階段状剥離が目立つ。

楔形石器（29～33）9点出土し内5点を図示した。29は両側縁に礫面を残し、大きさからみて両極技法で割られたものであり、上下両端に打撲による階段状剥離が明瞭である。32は直接打撲による礫面を残す剥片素材で、周縁の敲打痕と剥離の状態から本類に含めた。31・33は使用により破碎・剪断したものである。

スクレイバー類（34～54）削器および撫器などとして使用されたと思われるものをまとめた。22点出土し内19点を図示した。34～36・42・43・45は両面の周縁または両面の側縁調整が施されるものである。34は素材の打点側を欠損する。35は薄い小剥片の素材である。36は背面側に急角度調整が施される。45は横長剥片の端部に交互剥離調整が施されるもので錐の可能性もある。37～41・44・46～52は背面調整が施されるものである。背面の両側縁調整のもの（37・40）。背面の周縁調整のもの（38・39・41）。背面の一側縁ないしは端部調整のもの（49～52）がある。38・39・41・50～52は急角度調整剥離から？器の機能が想定され、43・49などは削器として機能したものと思われる。

53は打点側に階段状剥離が見られる。側面形状から楔形石器の可能性もあるが、剥片を剥ぎ取る際の打面調整などの剥離かもしれない。54は腹面の一部に簡単に調整剥離が施されるものである。

剥片 スクレイバーを含む定型石器の他に剥片と破碎片が52点出土している。概ね大きさは53や54のような小剥片で形状も不整形であり、末端が強く湾曲するものも多い。図示しないが、これら剥片の内には、極微細な剥離や剥片端部（エッジ）に細かく折れた、所謂使用剥片と考えられるものが20点ある。各種定型石器の数に比べ剥片や破碎片の数量は極端に少なく、この場所での石器製作は考えにくい。使用剥片の割合も多いことから、石器製作ではなく、何らかの用途で使用するために剥片が持ち込まれたものと思われる。

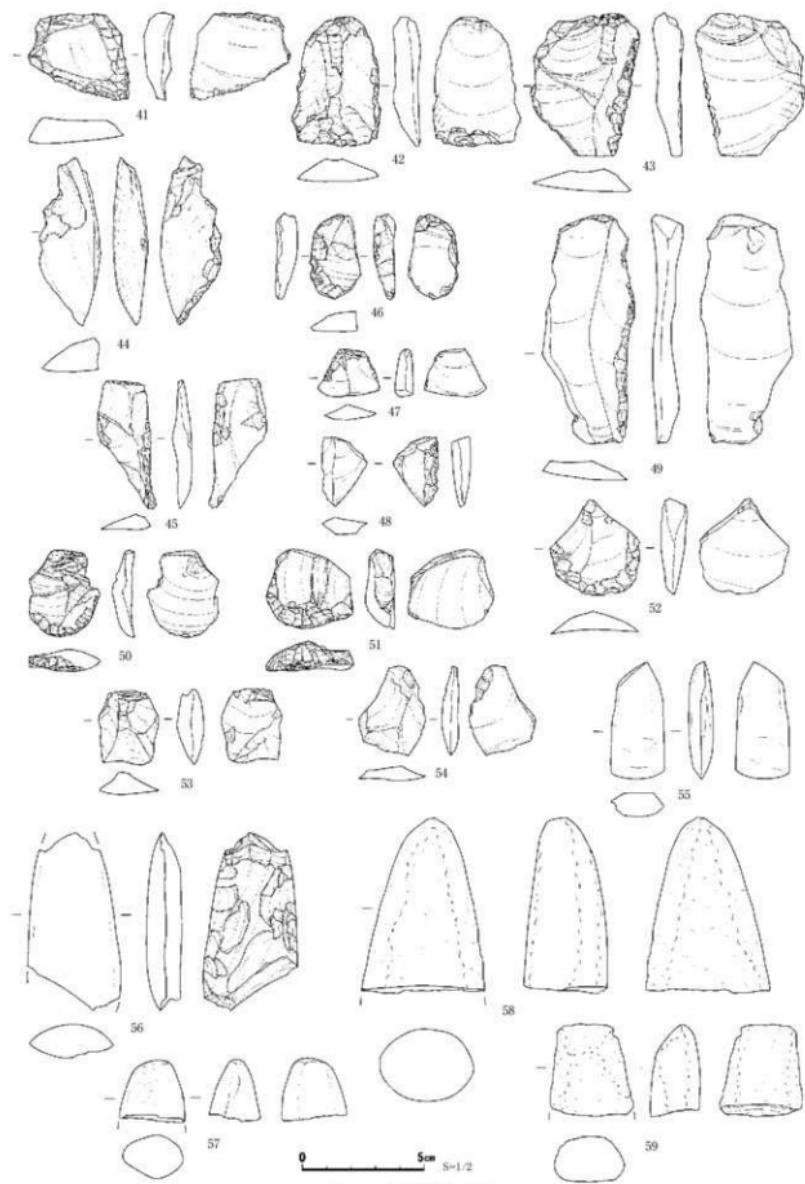


図35 出土石器 (2)

磨製石斧 (55～61) 7点出土している。55は両側縁に擦り切り痕を残す小型の磨製石斧である。研磨は入念で縫や側縁部の棱が残る。56は再調整品だろうか、片面だけに調整剥離が施されている。研磨は両面に見られるが顕著ではない。57～59は基部の破片である。57は研磨されているが、58・59は敲打痕だけで、製作途中に壊れたものと思われる。60・61は基端部を欠損する。60は剥離後に研磨されているが研磨は弱い。61は剥離と敲打痕が残る。

打製石斧 (62) 1点出土している。背面に環面をそのまま残す横長剥片を素材とし、腹面調整により成形されている。素材自体が楕円形であり、厚さを取るための調整かもしれない。

剥離礫 (63・64) 小円礫に剥離調整が施されているもので、後述の礫器に含めてよいかもしれないが、剥離技法と素材の大きさから分けた。63は扁平な小円礫を両極技法で打撃している。一辺が階段状に大きく剥離しており、対辺側には打撃のダメージが点状に認められる。64も扁平な楕円形礫を両極技法で打削している。長軸方向で打ち削った後に、短軸方向からも打撃されており、錯向する階段状の剥離が残る。さらに、打撃後に両面を入念に研磨している。素材となる礫を、楔形石器として製作または使用したものと思われるが、その後に石斧にするため研磨した可能性もある。

磨石 (65～81、105～126) 磨石には、特殊磨石とか三角柱状磨石と称される素材礫の棱線部に狭長な機能面をもつものと、礫の表面全体ないしは一部がツルツルに摩耗したものがある。前者は23点出土しており、その内17点を図示した。後者は24点出土し、内16点を図示した。

65～81は三角柱状磨石の類で、素材には約14cm～16cmの大きさで重量が1kg前後の礫が用いられている。機能面は幅の広いものが多く、機能面の側縁に剥離を多くもつもの (68・69・74～77・79) と、剥離をもたない、ないしは少ないもの (65～67・70～73・78・80・81) がある。機能面には、器体の自然面との感触の差からみて、ツルツルの感触のもの (65・66・68・70) とザラザラの感触のもの (67・69・74～80) のものがある。さらに、71～73の機能面は、長軸方向のほぼ真ん中から左右にツルツルの面とザラザラの面に分かれ、ザラザラの面側には剥離が多く、ツルツルの面側には剥離が無い。72は同一機能面での感触の違いが特に強く、ツルツルの面は変色し若干の光沢も見られる。また、65・67・70・80は複合機能をもつもので、礫の端部に敲打痕を有している。

105～126は摩耗した器面をもつもので、扁平な楕円形礫が多い。器面全体が均一に摩耗しているだけで明確な使用痕跡は見られない。大多数が、転石による自然な摩耗であると思われるが、何らかに使用するため海浜等から持ち込まれたものと思われる。116～120の小礫はまとまって第IV b層から出土している。124は複合的に使われており、一側面に敲打痕が残っている。

半円状扁平打製石器 (82・83) 素材の形状と剥離調整から2点を分けた。82は周縁の剥離だけで、打製石斧や礫器でもよいのかもしれない。83は周縁調整されるもので、機能する部位は直線的に加工されており、狭長な機能面が形成されている。機能面の感触は器面より粗くザラついている。

敲き石 (84～104) 22点出土している。礫の器面に敲打痕跡が残るもので、凹み石に分けられるものも数点あるが含めた。使われる礫は楕円形礫および球状礫と棒状の礫である。84～89は棱や側面が使われるもので、三角柱状磨石に類似する。90～98は礫の端部が使われるもので、楕円形と球状礫のものが多い。敲打痕は明瞭で、90・92・94～97は敲打面がほぼ平坦で使用頻度が高かったものと思われる。99～104は礫の器面に敲打痕が残るものである。敲打の痕跡は浅いものが多く、敲くというより、敲かれるタイプのものと思われる。この内でも102や104は、本来は凹み石に分けるものだろう。

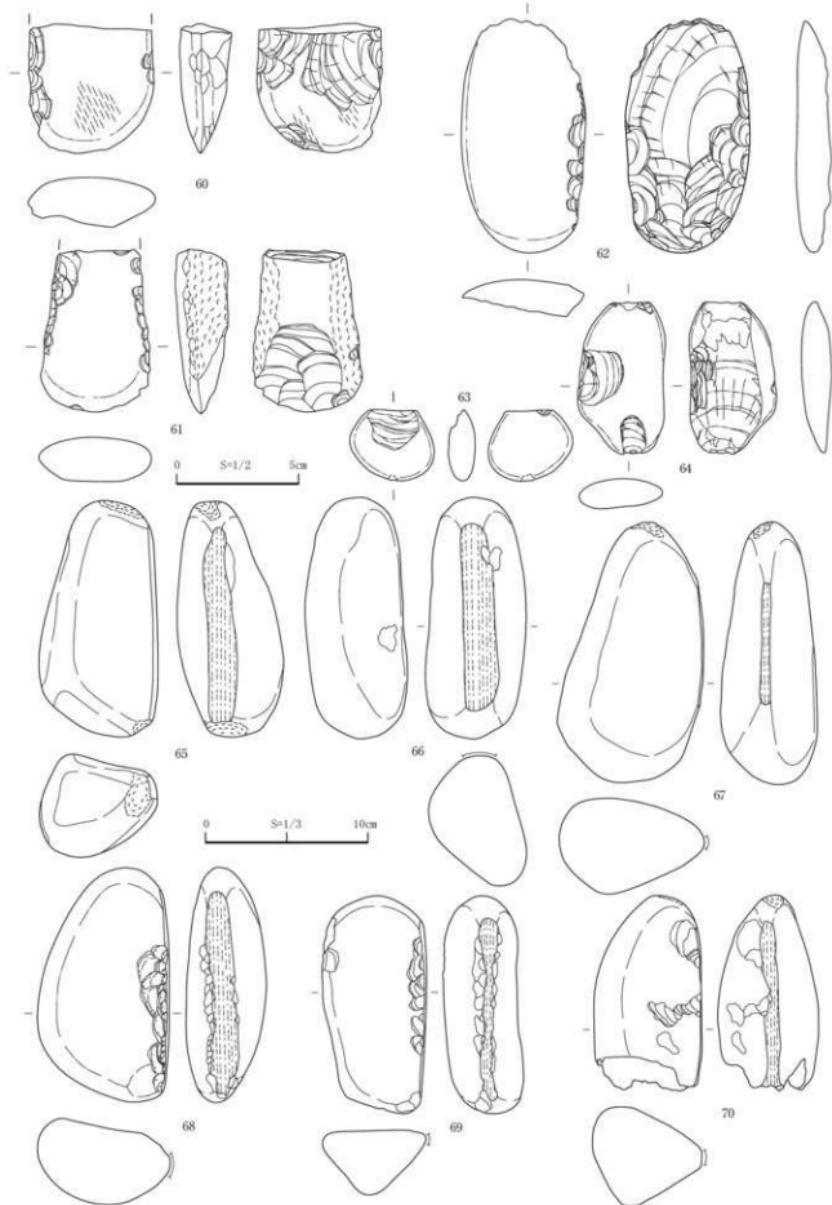


図36 出土石器 (3)

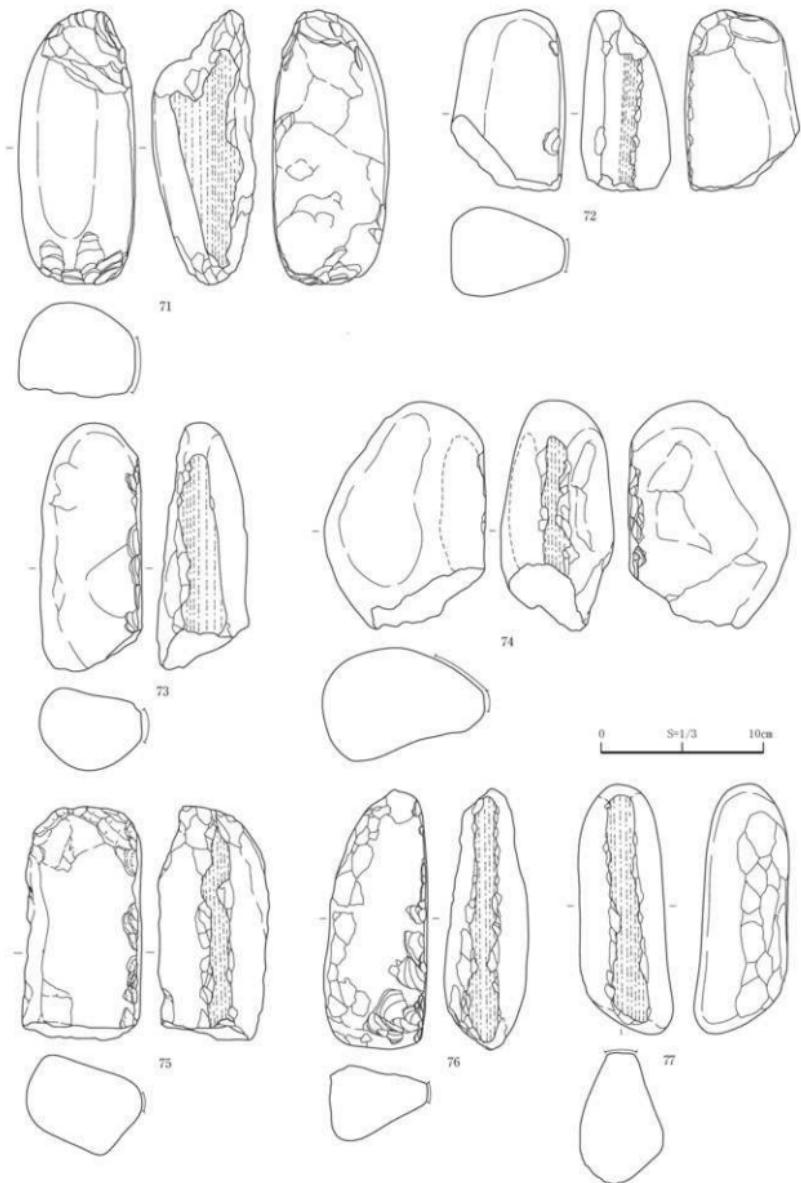


図37 出土石器 (4)



図38 出土石器 (5)

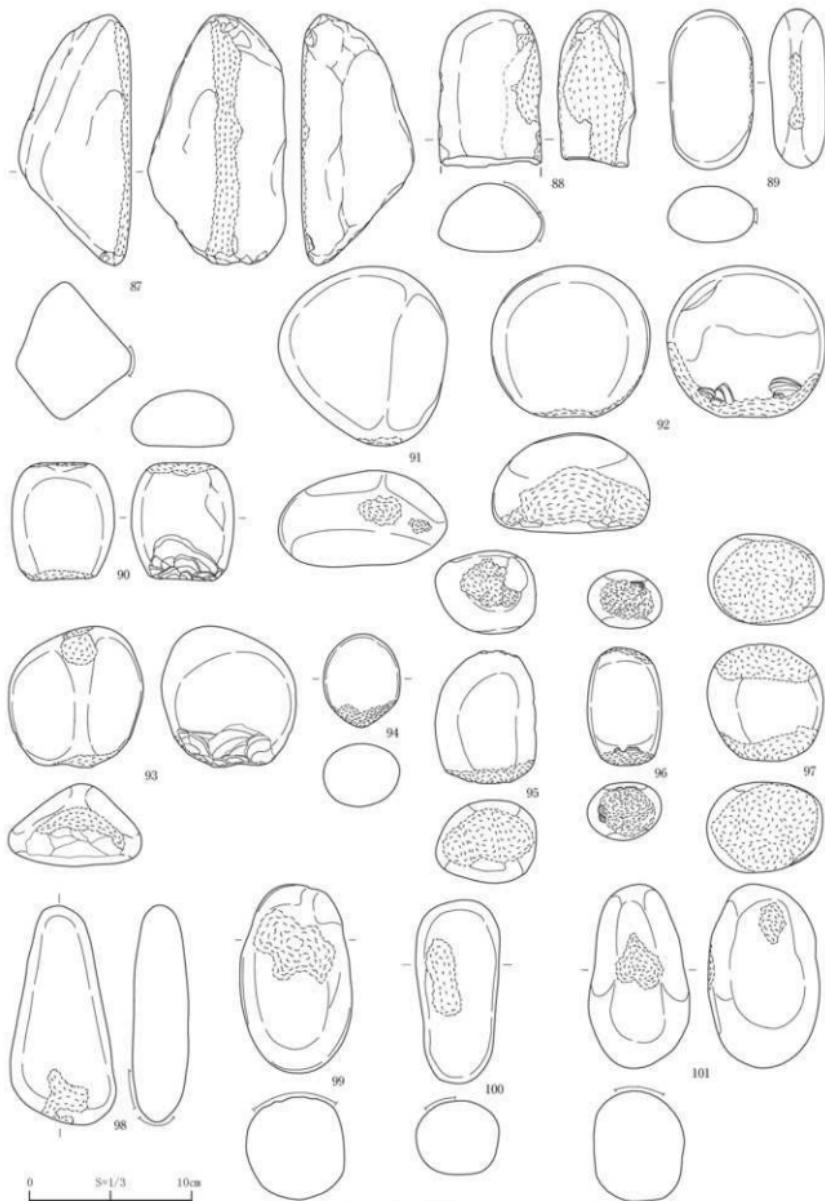


図39 出土石器 (6)

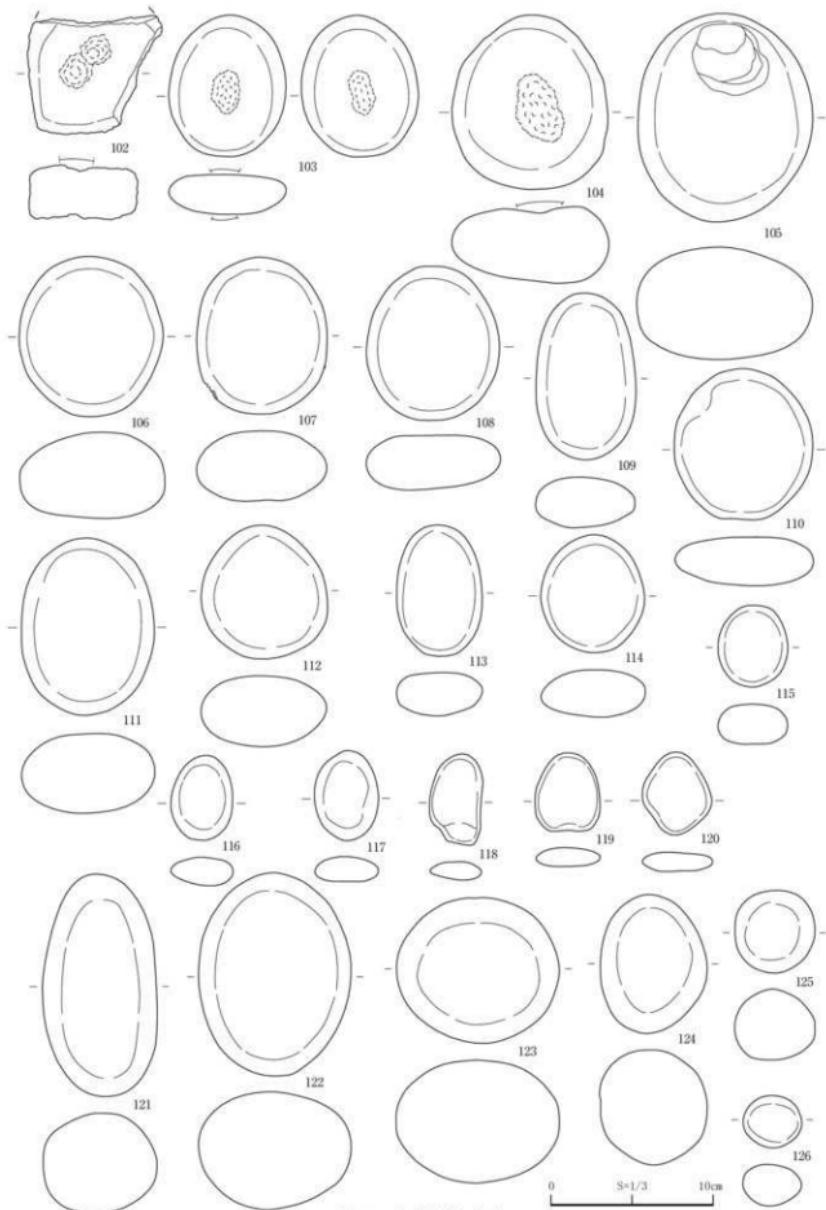


図40 出土石器 (7)

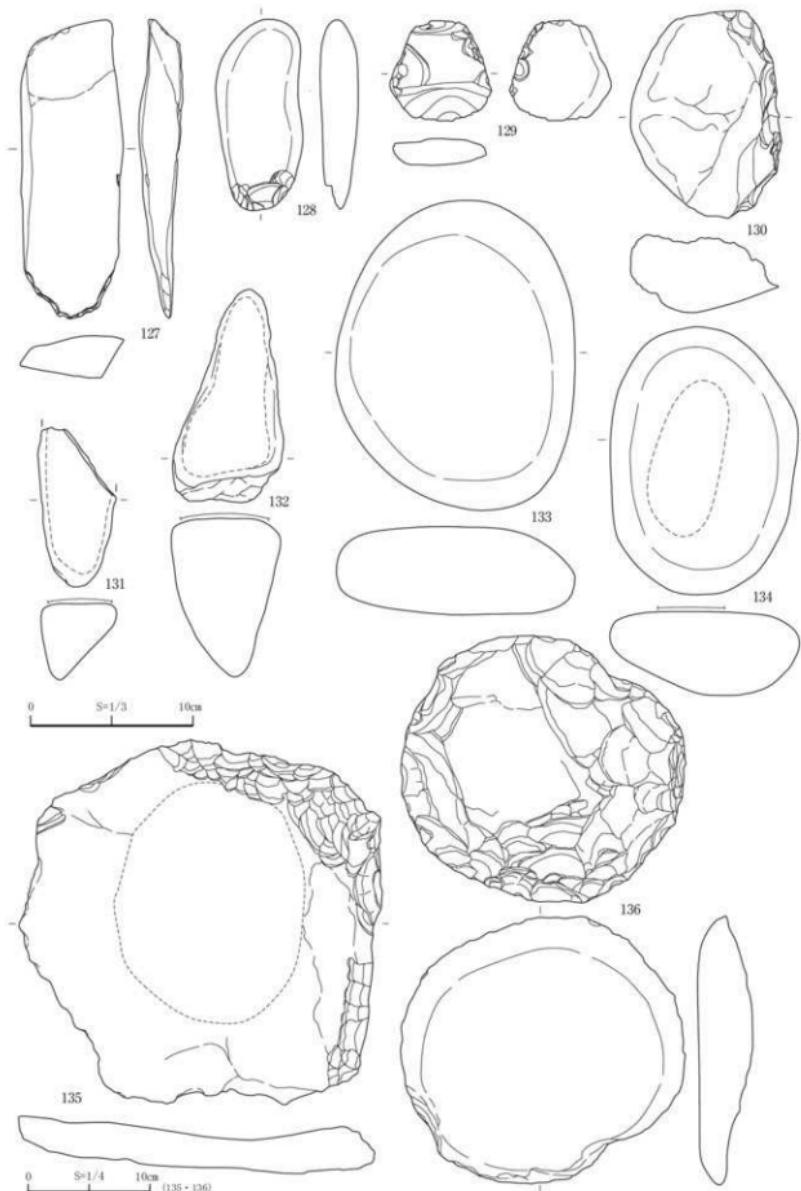


図41 出土石器 (8)

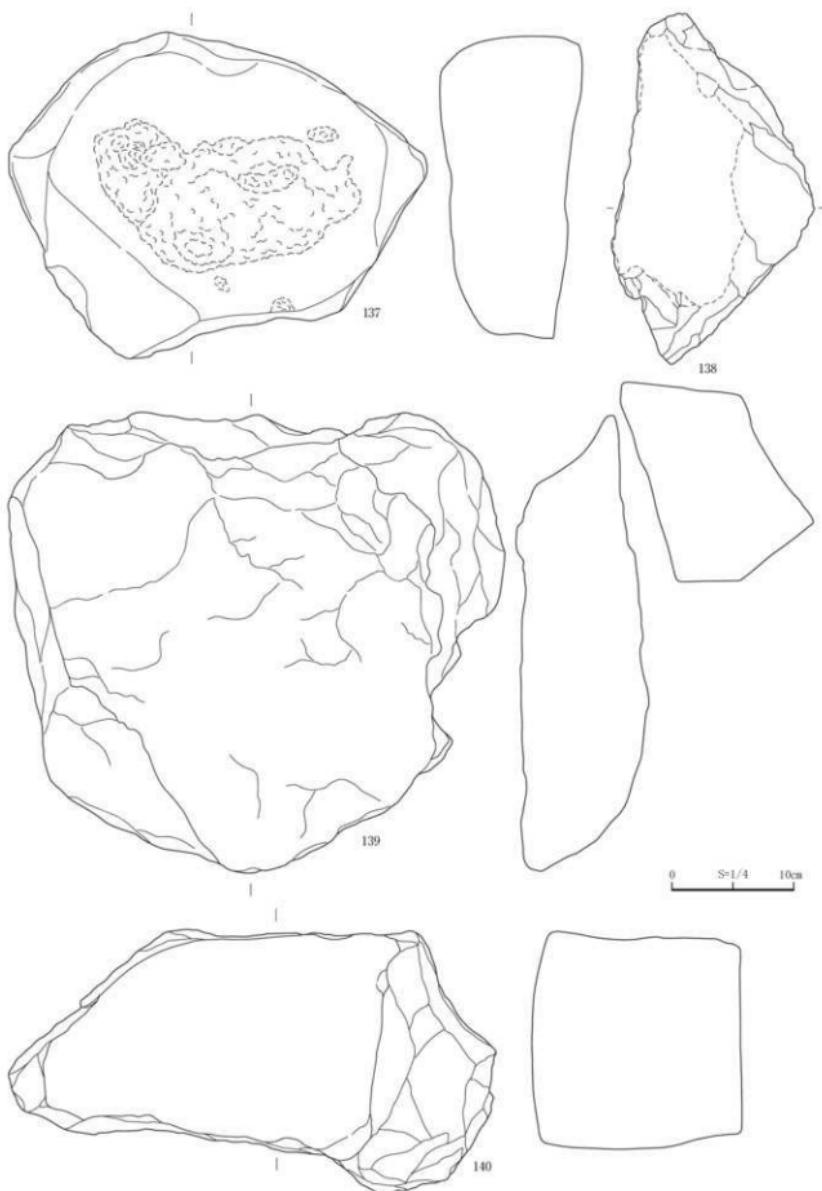


図42 出土石器 (9)

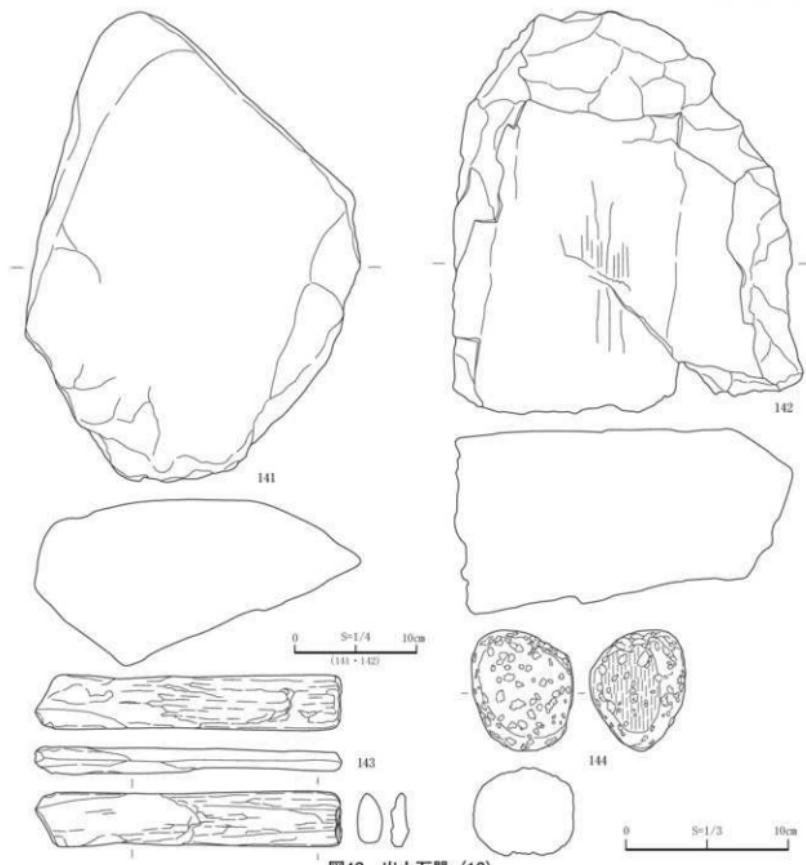


図43 出土石器 (10)

礫器 (127～130) 素材の礫に調整剥離が施されるもので4点出土している。127・128は細長い扁平礫の一端部に剥離が施されている。130は厚みのある礫の一側縁に粗い片面調整剥離が施されている。

台石 (46～49) 矶の平坦な一面が使われているもので12点出土している。131・132は小さい礫の一面が磨りにより摩耗変色している。135は器面の中央部が変色し周辺よりザラついた面となっている。138～142も図示した面に磨りによる摩耗が見られる。137は敲打により器面中央部が粗く凹んでいる。136は周縁を剥離調整して円形に整形されているものである。器面に顕著な使用痕跡は見られないが、本類に含めた。石核ないしは何らかの未製品の可能性もある。

石刀 (143) 1点出土している。素材は粘板岩で、一方の側縁は平坦に対する側縁は鋭角になるよう、器体よりも顕著に研磨されている。

軽石製品 (144) 1点出土している。球状形軽石の一端が擦りにより平坦となっている。

第4編 横沢山(2)遺跡

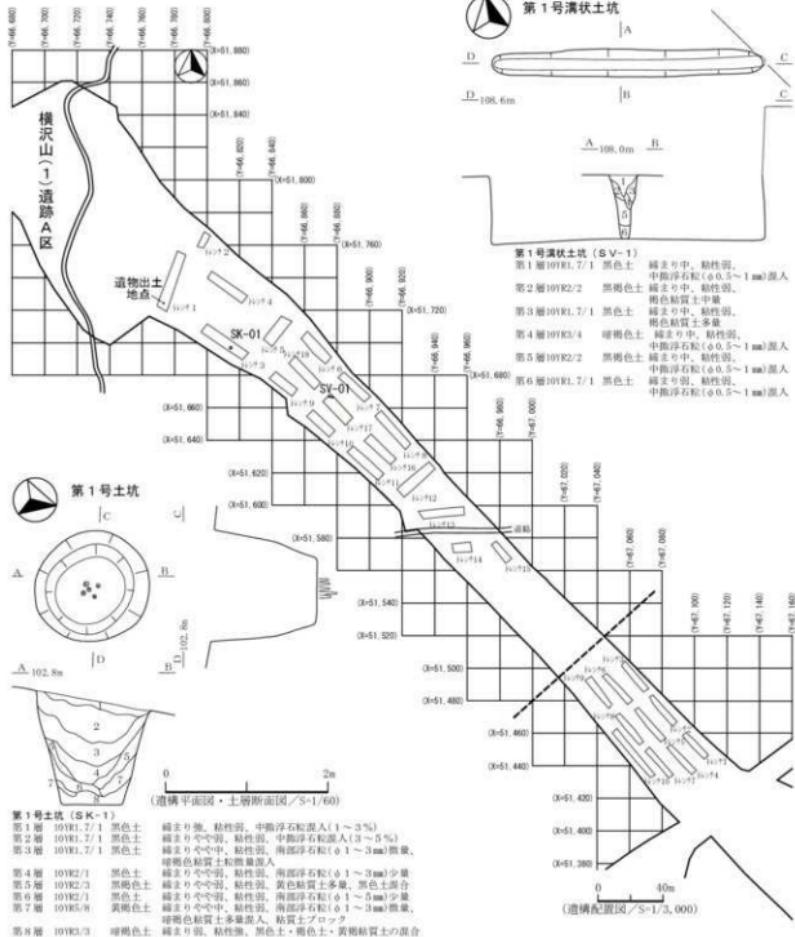


図44 横沢山(2)遺跡遺構配置図・検出遺構図

第1章 検出遺構と出土遺物

第1節 遺構 (図44)

調査対象面積約26,000m²に対し、平成18年度に町道側に10本、翌年に林道より西側に18本のトレントを設定して調査を行い、平成19年度に縄文時代の土坑と溝状土坑を各1基検出した。

第1号土坑 (SK-1) (図44)

【位置・確認】松館川に向かう緩斜面地のトレント3で検出した。標高約102.5mの第IV層面に中揮浮石が斑に折がる楕円形のプランで確認した。

【形態・規模】開口部は約1.4mのほぼ円形で、底面は80cm×90cmの楕円形である。周壁は底面から聞くように立ち上がり、深さは最大で約1.4mある。底面は平坦で中央部に逆茂木痕と推定される円形及び小Pitが5個設けられている。Pitの深さは底面から14cm～25cmあり、打ち込まれたものと思われる。

【堆積土】レンズ状の堆積を示す自然堆積で、黒色土を主体に8層に分けられる。第1・2層中には中揮浮石粒が混入する。第5～8層は第V層の周壁が崩落土と黒色土が混合した層である。

【時期】堆積土上位の中揮浮石から縄文時代前期初頭にはほぼ埋没しており、それ以前の所産である。

第1号溝状土坑 (SV-1) (図44)

【位置・確認】調査区中央部のトレント17の、標高約107.7mの第V層面に棒状のプランで検出した。

【形態・規模】開口部は棒状で、大きさは長軸が約3.35m、短軸の最大幅は約35cmである。底面の長さも開口部とほぼ同じで、幅は15cm弱である。断面形は長軸箱形で、短軸V字形である。検出面からの深さは約80cmであるが、第II層中からの掘り込みで、本来は1m以上の深さがあったと思われる。長軸方向はN-98°-Eである。

【堆積土】自然堆積で6層に分けられる。すべて黒色土を主体とし上位層に中揮浮石粒が多い。

【時期】出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代の所産と思われる。

第2節 遺物 (図45)

トレント1の第IV層下位から砾石器が1点だけ出土した。扁平な棒状器の一方に、打ち削るように両面から剥離調整されており、エッジ部分は敲打により潰れている。石質は砂岩である。

(小田川)

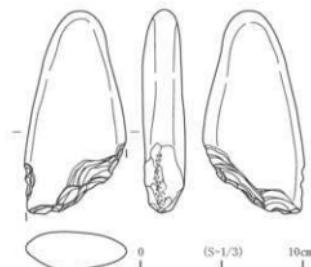


図45 出土遺物

出土遺物觀察表

荒屋敷久保(2)遺跡

遺構外出土土器

岡番号	出土位置	解位	部種	部位	外施文文様等	内面調整	勘上	備考
岡10-1	I-15	Ⅲ層	鉢形	口縁～脚部	沈編(平行)・Z字状・足切	ナダ	砂	P-1・3・4・心面付有
岡10-2	I-15	Ⅲ層	鉢形	口縁部	沈編(平行)・足切	ナダ	砂	P-10・内面付有
岡10-3	I-15	Ⅲ層	鉢形	脚部	沈編(平行)・唇面掌底或不明	ナダ	砂	P-11
岡10-4	I-15	Ⅲ層	鉢形	脚部	沈編(平行)・唇面掌底或不明	ナダ	砂	P-11
岡10-5	I-15・16	Ⅲ層	鉢形	脚部	沈編(平行)・唇面掌底或不明	ナダ	砂	P-7・8・13
岡10-6	I-16	Ⅲ層	鉢形	脚部	沈編(平行)	ナダ	砂	P-14
岡10-7	I-15	Ⅲ層	鉢形	脚部	沈編(平行)・唇面掌底或不明	ナダ	砂	P-12
岡10-8	I-15	Ⅲ層	鉢形	脚部	沈編(平行)	ナダ	砂	P-12
岡10-9	I-15	Ⅲ層	鉢形	脚部	唇面掌底或不明	ナダ	砂	P-12
岡10-10	I-15	Ⅲ層	鉢形	脚部	唇面掌底或不明	ナダ	砂	P-9

横沢山(1)遺跡

遺構内出土土器

岡番号	出土位置	解位	部種	部位	外施文文様等	内面調整	勘上	備考
岡21-1	第2号土坑	底面直上	深鉢形	口縁～脚部	口端平・口輪無・沈編・R.L.(縦)	ミガキ	砂	
岡21-2	第2号土坑	覆土	深鉢形	脚部	直L(縦)	砂少・無少・無化鉄	底付12.5cm	
岡21-3	第2号土坑	覆土	深鉢形	脚部	直L(縦)	ミガキ	砂	
岡21-4	第2号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	直L(縦)	ミガキ	砂	
岡21-5	第2号土坑	覆土	深鉢形	脚部	直L(縦)	ミガキ	砂	
岡21-6	第2号土坑	覆土	深鉢形	脚部	直L(横・斜)	砂少・無化鉄		
岡21-7	第2号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	無文・ナダ	ナダ	細砂・無化鉄	
岡21-8	第2号土坑	覆土	深鉢形	脚部	貝殻模印押付(唇の縁にも見える)	砂多		
岡21-9	第2号土坑	覆土	深鉢形	脚部	無文・ナダ(ケズリ?)	ミガキ?	細砂	
岡21-10	第3号土坑	覆土	深鉢形	脚部	無文・ナダ(ケズリ?)	ミガキ?	細砂	
岡21-11	第4号土坑	覆土2層	深鉢形	脚部	無文・ナダ(ケズリ?)	ナダ	細砂	
岡21-12	第4号土坑	覆土2層	深鉢形	脚部	組紐		粗砂・織維多	大木2式
岡21-13	第4号土坑	覆土2層	深鉢形	脚部	L.R.(横)	砂多・織維少		
岡21-14	第5号溝状土坑	覆土	深鉢形	脚部	L.R.(横)	ナダ?	砂・織維多・無化鉄	
岡21-15	第8号溝状土坑	覆土	深鉢形	脚部	L.R.L(縦)	砂少・織維多		
岡21-16	第9号溝状土坑	覆土	深鉢形	口縁部	口端別輪付・沈編・R.L.R(縦)	砂少・織維多		
岡21-17	野外1	石窓内	深鉢形	脚部	L.(縦)	ミガキ	砂	
岡21-18	野外1	石窓内	深鉢形	脚部	L.(縦)	ミガキ	砂	
岡21-19	野外1	石窓内	深鉢形	脚部	直L(縦)	ミガキ	砂	
岡21-20	野外1	石窓内	深鉢形	脚部	無文・ナダ(ケズリ?)	ナダ	細砂	
岡21-21	第2号集石石槽	集石内	深鉢形	脚部	脚無原修(斜)・O段多段L.R(羽状)	ミガキ	砂・織維	岡21-100同一個体

遺構外出土土器

岡番号	出土位置	解位	部種	部位	外施文文様等	内面調整	勘上	備考
岡22-1	T-63	B層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	ナダ	砂少・織維多	P-930
岡22-2	T-62・O-64	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂多・織維少	P-582-1182	
岡22-3	O-61	上層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂少・織維多	P番無し	
岡22-4	U-60	上層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂・織維	P-561	
岡22-5	O-61	上層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂・織維	P番無し	
岡22-6	U-60	上層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂・織維	P番無し	
岡22-7	T-65	B層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂少・織維多	P-415	
岡22-8	O-49	II層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂多・織維少	P番無し	
岡22-9	S-64	B層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂少・織維多	P-993	
岡22-10	Q-60	B層	深鉢形	口縁部	魚骨回文	砂多・織維少	P-220	
岡22-11	N-61	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P-247	
岡22-12	U-50	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂多・織維少	P番無し	
岡22-13	S-60	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P-1091	
岡22-14	R-59	Ⅲ層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P-209	
岡22-15	R-59	Ⅲ層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂・織維	P-210	
岡22-16	U-60	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.R(横)・端部粘付	砂少・織維多	P番無し	
岡22-17	O-49	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P番無し	
岡22-18	S-56	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P番無し	
岡22-19	R-60	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P-248	
岡22-20	S-67	B層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P-667	
岡22-21	P-51	V層	深鉢形	脚部?	魚骨回文・E.L.(横)	砂少・織維多	P番無し	
岡22-22	T-62	B層	深鉢形	口縁部	口端刷込み・沈編・R.L.(横?)	砂少・織維多	P-585-999	
岡22-23	U-61	B層	深鉢形	口縁部	口端刷込み・沈編・R.L.(横)	砂・織維	P-567	
岡22-24	T-60	II層	深鉢形	口縁部	口端刷込み・沈編・R.L.(横)	砂・織維	P-461	
岡22-25	U-60	II層	深鉢形	口縁部	口端刷込み・沈編・R.L.(横)	砂・織維	P番無し	
岡22-26	T-60	B層	深鉢形	口縁部	沈編・R.L.(横)	砂少・織維多	P-1024	
岡22-27	U-60	II層	深鉢形	口縁部	沈編・R.L.(横?)	砂少・織維多	P番無し	
岡22-28	R-37	B層	深鉢形	脚部?	沈編	砂少・織維多	P-1118	
岡22-29	U-60	表層	深鉢形	脚部	沈編・L.R.(横)	砂多・織維少	P番無し	
岡22-30	R-36	B層	深鉢形	脚部	笠上・L.R.・末晩の穿孔	砂少・織維多	P-229	
岡22-31	P-38	B層	深鉢形	底部付近	笠上(L)	砂少・織維多	P-22	
岡22-32	R-60	B層	深鉢形	底部付近	L.R.(横)	砂少・織維多	P-555	
岡22-33	R-57	B層	深鉢形	脚部	無文・斜位ナダ	砂・織維・無化鉄	P-11	
岡22-34	V-36	II層	深鉢形	脚部	無文	砂・織維	P-730	

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文様等	内面調整	出土	備考	
H23-35	H - 57	Ⅱ層	漆耳杯	側面	無文	砂・織錦多	P - 12		
H23-36	Q - 60	Ⅱ層	漆耳杯	側面	無文	砂・織錦多	P - 551		
H23-37	Q - 66	Ⅱ層	漆耳杯	底部	無文	砂	P - 512		
H23-38	F - 69	Ⅱ層	漆耳杯	底部	無文	砂・催化鉄	P - 839		
H23-39	Y - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口邊施錦刺突・沈縫・貝紋錦刺突	砂	P - 1867		
H23-40	V - W - 36	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口内内側のみ・沈縫・貝紋錦刺突	砂	P - 959-1106		
H23-41	W - 36	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口内内側のみ・沈縫・貝紋錦刺突	砂	P - 974		
H23-42	X - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	沈縫・貝紋錦刺突・工具刺突	砂	P - 1865		
H23-43	W - 38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	沈縫・貝紋錦刺突・工具刺突	砂	P - 2064, 424回・個体		
H23-44	W - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口羽内側のみ・沈縫	砂・全葉片	P - 2003		
H23-45	V - 41	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	沈縫・貝紋錦刺突	砂	P - 941		
H23-46	W - 37	Ⅱ層	漆耳杯	側面	沈縫・貝紋錦刺突	砂	P - 994		
H23-47	W - 37	Ⅱ層	漆耳杯	側面	沈縫・貝紋錦刺突・工具刺突	砂	P - 933, 46回・個体		
H23-48	Y - 40	Ⅱ層	漆耳杯	側面	沈縫・貝紋錦刺突	砂	P - 1868		
H23-49	W - X - 37	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)	砂	P - 2006能		
H23-50	W - 37	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)	砂	P - 2008		
H23-51	U - 42	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)	砂	P - 125		
H23-52	U - 42	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)	砂	P - 136-3071		
H23-53	W - 36	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)・吹抜輪附	砂多	P - 195		
H23-54	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	貝紋錦刺突(底伏)・吹抜輪附	砂多	P - 1876		
H23-55	V - 32	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	貝紋錦刺突(底伏)	砂	P - 949		
H23-56	X - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	貝紋錦刺突(底伏)	砂多	P - 1842		
H23-57	W - 37-38	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突・貝・工具刺突	砂	P - 2485-3064能		
H23-58	Y - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突・貝・工具刺突	砂	P - 2000		
H23-59	X - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)・耳孔	砂多	P - 1858		
H23-60	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)・耳孔	砂	P - 3049		
H23-61	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縁部	口縫刺突・貝紋錦刺突(底伏)	砂多	P - 2036		
H24-62	W - 37-38	Ⅱ層	漆耳杯	口縫・底	口縫・貝・貝紋錦刺突・引手・工具刺突	砂多	P - 2013-3007能		
H24-63	V - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	口縫・貝・貝紋錦刺突・引手	砂多	P - 949		
H24-64	X - 37	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	口工具刺突・貝・貝紋錦刺突・引手	砂多	P - 3037		
H24-65	T - 37	I層	漆耳杯	口縫部	口縫・貝・貝紋錦刺突・引手	砂	P - 1857		
H24-66	W - 39	II-V層	漆耳杯	口縫部	口縫刺突・貝・貝紋錦刺突・引手・吹抜輪	砂多	P - 1827-2048能		
H24-67	W - 40	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	口縫・貝・貝紋錦刺突・引手・吹抜輪	粗い砂	P - 1802		
H24-68	V - W - 40	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	口縫・貝・貝紋錦刺突・引手・吹抜輪	砂	P - 1607-1869能		
H24-69	U - 40-W - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	口縫・貝・貝紋錦刺突・引手・吹抜輪	砂	P - 1170-6854・個体		
H24-70	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	貝紋錦刺突・引手	砂多	P - 3031-6664・個体		
H24-71	V - 37	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	貝紋錦刺突・引手	砂多	P - 556-704回・個体		
H24-72	W - 35	Ⅱ層	漆耳杯	側面	貝紋錦刺突	砂少	P - 1109		
H24-73	X - 37	Ⅱ-V層	漆耳杯	側面	貝紋錦刺突・引手・ナデ	砂・催化鉄	P - 1017-3034		
H24-74	W - 35	Ⅲ層	漆耳杯	口縫部	貝紋錦刺突・引手	砂多	P - 3116		
H24-75	V - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	貝紋錦刺突・引手	砂	P - 2032		
H24-76	不明	既瓦	漆耳杯	口縫部	無文	砂	P - 949		
H24-77	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	無文	砂多	P - 1874		
H24-78	W - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縫・側	無文	砂・催化鉄	P - 3011		
H24-79	X - 39	Ⅱ層	漆耳杯	側面	貝紋錦刺突(底伏)	粗い砂	P - 1208		
H24-80	X - 35	Ⅱ層	漆耳杯	側面	貝紋錦刺突(底伏)	砂多	P - 1757		
H24-81	W - 37	Ⅱ層	漆耳杯	側面	貝紋錦刺突(引手・山形沈	砂	P - 985-995		
H24-82	X - 37	Ⅱ層	漆耳杯	側面	貝紋錦刺突(引手・山形沈	砂	P - 1866-81回・個体		
H24-83	W - 38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	工具刺突・工具ナデ	粗い砂	P - 1174-3076能		
H24-84	V - 27-W - 36	II-V層	漆耳杯	底部	貝紋錦刺突・引手	砂	P - 983-1584能		
H24-85	W - 48	Ⅱ層	漆耳杯	底部	日絞錦刺突(底伏)	砂	P - 127		
H24-86	X - 37	Ⅱ層	漆耳杯	底部	無文・ケリ	砂	P - 2007		
H24-87	W - 36	Ⅱ層	漆耳杯	底部	無文・ケリ	砂	P - 2007		
H24-88	W - 36	Ⅱ層	漆耳杯	底部	無文・ナデ	砂	P - 979		
H24-89	X - 39	Ⅱ層	小型	底部	無文・ナデ	砂	P - 1863		
H24-90	V - 38	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	織錦压住釘・0-20多条L(横)	織錦多・催化鉄	P - 528		
H24-91	V - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	織錦压住釘・0-20多条L(引手)	織錦多・催化鉄	P - 1052-90回・個体?		
H24-92	V - 35	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	織錦压住釘・0-20多条L(横)	砂・催化鉄	P - 2026		
H24-93	V - 37-38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	Q多条L(引手)	織錦多・催化鉄	P - 1599能		
H24-94	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	外面部R・L(引手) 内面部R・L(斜)	砂	P - 2039		
H24-95	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	外面部R・L(引手) 内面部R・L(横)	砂	P - 2045		
H24-96	W - 38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	外面部Q多条R・L(引手) 内面部Q多条R・L(横)	砂	P - 2767		
H24-97	X - 38	Ⅱ層	漆耳杯	側面	外面部Q多条R・L(引手) 内面部Q多条R・L(横)	砂	P - 826		
H24-98	V - 37	Ⅱ層	漆耳杯	側面	單輪轎子第3期	砂	P - 2942		
H24-99	U - 40	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和L・R(横)	砂	P - 1633		
H24-100	W - 31-32	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和無原体(引手)・Q多条L・R(斜)	Lガラ	砂・織錦	P - 949	
H24-101	W - 36	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和無原体(引手)・Q多条L・R(横)	砂・織錦	P - 735-1102		
H24-102	W - 41	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和L・R(横)	砂	P - 200-213		
H24-103	V - 40	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	京 L・R (横)	砂	P - 1612		
H24-104	U - 40	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	L R (横)・結節錦柾	砂	P - 1450		
H24-105	V - 37	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和L・R (横)	砂	P - 1587		
H24-106	X - 39	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	R L R (横)	砂	P - 1855		
H24-107	U - 34	Ⅱ層	漆耳杯	側面	足 L・R(横)・文施文	砂石黒芯	P - 949		
H24-108	X - 39	Ⅱ層	漆耳杯	側面	足 L・R(横)	砂	P - 1860		
H24-109	V - 41-U - 40	Ⅱ層	漆耳杯	側面	L R (横)	砂多	P - 1489		
H24-110	U - 35	Ⅱ層	漆耳杯	側面	紹和 L R (横)	砂	P - 2865		
H24-111	V - 41	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和 L R (横)	砂	P - 949		
H24-112	U - 35	Ⅱ層	漆耳杯	口縫部	紹和 L R (横)	砂	P - 2874		
H24-113	W - 32	Ⅱ層	漆耳杯	口縫・側	足 L・R(横)	砂・催化鉄	P - 2083		
H24-114	U - 40-X - 29	Ⅱ-V層	漆耳杯	口縫部	口縫刺突・甲輪轎子第3期・紹和	紹和・織錦少・催化鉄	P - 1830		

遺物番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	出土	備考	
H25-115	T-41	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	波頭部斜ア-1引削付・半輪鉗合体第3期	細砂・織羅少・滑化鉄	P 巻無し		
H25-116	U-41	Ⅱ層	漆屏形	波頭部	波頭部斜ア-1引削付・半輪鉗合体第3期	細砂・織羅少・滑化鉄	P-1290		
H25-117	X-38	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	口引削付・半輪鉗合体第3期	砂・織羅・滑化鉄	P-144		
H25-118	S-69	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	口引削付・半輪鉗合体第3期	細砂・織羅少・滑化鉄	P 巻無し		
H25-119	T-41	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	口端斜削・半輪鉗合体第3期	細砂・織羅少	P 巻無し		
H25-120	O-60	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	半輪鉗合体第3期・L(R)(横)	砂	P-242		
H25-121	T-35	I層	漆屏形	口縁部	半輪鉗合体第3期・波多条L(R)(横)	粗い砂	P 巻無し		
H25-122	T-U-35-36地	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	波頭部斜ア-1引削付・L(R)(横)	細砂・織羅少	P-494-905-990地		
H25-123	X-37	Ⅱ層	漆屏形	側部	R L(横)・絞部	細砂	P-1032		
H25-124	U-42	Ⅱ層	漆屏形	側部	絞部・織羅	細砂・織羅少・滑化鉄	P-147		
H25-125	W-41-X-40	Ⅱ層	漆屏形	側部	R L(横)・絞部(半輪鉗合体第3期?)	細砂	P-201-425		
H25-126	X-40	Ⅱ層	漆屏形	側部	工具鉗・工具袋	ナデ	P-280		
H25-127	V-41	Ⅱ層	漆屏形	底部	無文	砂	P-1430-1441		
H25-128	V-39-40	Ⅱ層	漆屏形	底部	L甲輪鉗合体第1期	細砂・織羅少・滑化鉄	P 巻無し		
H26-129	T-41	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	甲輪鉗合体第5期(波多条L(R)型)	細砂・織羅少	P 巻無し		
H26-130	X-32	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	甲輪鉗合体第5期(波多条L(R)型)	細砂・織羅少	P-2301		
H26-131	V-42	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	甲輪鉗合体第5期(波多条L(R)型)	細砂・織羅少	P-72-90地		
H26-132	U-42-T-29	Ⅱ層・断子	漆屏形	側部	波頭部	細砂・織羅少	P-181-131同一個体		
H26-133	V-40-W-41	Ⅱ層	漆屏形	底部	絞部・山形波紋・ナデ	細砂・織羅少	P-451 風呂86cm		
H26-134	U-41	Ⅱ層	漆屏形	底部	絞部・山形波紋	細砂・織羅少	P-1496		
H26-135	X-41	Ⅱ層	漆屏形	側部	絞部	砂	P-275		
H26-136	S-41	Ⅱ層	漆屏形	側部	絞部	粗い砂	P 巻無し		
H26-137	V-39	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	沈澱(弦状?・管状工具?)・鍼不明帶	細砂・織羅少	P-1680		
H26-138	V-39	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	沈澱(弦状?・管状工具?)・鍼不明帶	細砂・織羅少	P-1681 137同一個体		
H26-139	U-34	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	口端突起(沈澱(弦状?))・邊文不明帶	ナデ	P-2644		
H26-140	U-35	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	沈澱(弦状?・邊文不明帶)	細砂・織羅少	P-2512,139同一個体		
H26-141	T-38	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	沈澱(弦状?・曲線)	ナデ	P 巻無し		
H26-142	X-40-41	Ⅱ層	金魚形鉢	口縁部	口外斜曲部・鰐形(波色?)・L-R(横)	砂	P-274-429		
H26-143	W-37	Ⅱ層	金魚形鉢	口縁部	無文・ナデ	ミガキ	P-905		
H26-144	X-36	Ⅱ層	金魚形鉢	側部	陸帶(波色?)・R-L(横)	細砂・滑化鉄	P-1131,1142同一個体		
H26-145	U-41	Ⅱ層	金魚形鉢	口縁部	口端突出(波色)・邊文不明帶(結節?)	細砂・織羅少	P-1296		
H26-146	X-40	Ⅱ層	金魚形鉢	側部	L(R)(横)	砂	P-275		
H26-147	V-40	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	口端斜削(竹青剥皮?)・L-R(横)・内面黒帯(波色?)	砂	P-1615		
H26-148	X-35	Ⅱ層	漆屏形	側部	瓦上(縦)	ナデ	P-319		
H26-149	V-42	Ⅱ層	金魚形鉢	側部	絞部	砂	P-75-26		
H26-150	V-36	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	L-L(横)前段斜削リ・結節粘附	ナデ	P-527-1592-1593		
H27-151	W-38-39地	Ⅱ層・断子	漆屏形	口縫・側部	口端突起・利尻(波色・平行・カランク状)・円形	ナデ	砂	P-629-2785地・口け41cm	
H28-152	W-U-41	Ⅱ層	漆屏形	側・底部	直角・直部	直角反覆	砂・織羅	P-1284-1481地・底径2.2m	
H28-153	V-36-W-38	Ⅱ層・断子	漆屏形	側・底部	L-L(横)・波色(波)	ナデ	P-95-97		
H28-154	X-32-33	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	陸帶・織羅直部・波(波谷付)・捲毛	砂	P-2405-2418地・口徑20cm		
H28-155	W-31-32	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	陸帶・織羅直部・直板	砂	P-2081		
H28-156	W-36-V-38地	Ⅱ層	漆屏形	口縫・底部	波(波谷付)・直板・R-L(横)・R-L(縦)2列羽状	ミガキ	P-2757地・口徑19cm・底径11.2cm		
H28-157	W-38	Ⅰ・Ⅱ層	漆屏形	側・底部	直L-L(横)直角付	砂	P-1077地・底径14cm		
H28-158	W-53	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	直L-L(横)直角付直板	砂	P-3198		
H28-159	V-33	Ⅱ層	漆屏形	側部	瓦上(縦)・交差施文・直角付筋組回転	砂	P 巻無し		
H28-160	X-33-39	Ⅱ層	漆屏形	口縫・側部	(横)・直角付筋組回転	砂	P-1338-1705		
H29-161	W-33	Ⅱ層	漆屏形	側部	直L-L(横)・直角付筋組回転	砂	P-1384 銀灰約9cm		
H29-162	O-65	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	波(波谷付)・直板・R-L(横)	砂	P 巻無し		
H29-163	O-65	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P 巻無し		
H29-164	O-65	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P 巻無し		
H29-165	O-65	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P 巻無し		
H29-166	X-37	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P-1376		
H29-167	X-29	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	ミガキ	P 巻無し		
H29-168	W-34	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P-1521		
H29-169	X-37	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P-1004		
H29-170	U-34-W-35	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P-277-169同一個体		
H29-171	W-32	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	ミガキ	P 巻無し		
H29-172	W-33	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P 巻無し		
H29-173	U-32	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P 巻無し		
H29-174	X-37	Ⅱ層	漆屏形	口縁部	無文直ナデ・直角付筋組回旋	ナデ	P-884 石英尖粒		
H29-175	U-35-V-34	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	口縫部無文・直角付筋組回旋・R-L(縦)	砂・滑化鉄	P-2561-2664地		
H29-176	W-32	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	降伏・直角付直L-L(縦)	ミガキ	P-2114		
H29-177	W-32	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	波(波谷付)・直角付直L-L(縦)	ミガキ	P-1069-1093		
H29-178	W-X-38	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	降伏・直L-L(縦)	ミガキ	P-826-2018,177同一個体		
H29-179	W-33	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	降伏・直L-L(縦)	砂・石英粒	P 巻無し		
H29-180	V-33	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)	砂	P 巻無し・弥生土器?		
H29-181	V-36-40	Ⅱ層	漆屏形	口縫・側部	口縫内凹・直角付直L-L(横)・R-L(横)充填施文	ミガキ	P-482-750地		
H29-182	V-36	Ⅱ層	漆屏形	側部	直L-L(横)・直角付直L-L(横)・R-L(横)充填施文	ミガキ	P-743地・181同一個体		
H29-183	X-39	Ⅱ層	漆屏形	底部	R-L(L)-縫帶	粗い砂	P-408-410,直径6.6cm		
H30-184	U-V-34-36	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	口縫無文・直L-L(横)・R-L(横)充填施文	砂・滑化鉄	P-740-2468地		
H30-185	W-32	Ⅱ層	漆屏形	側部	直L-L(横)・直角付直L-L(横)・R-L(横)充填施文	砂・滑化鉄	P-2157-2898地・18同一個体		
H30-186	U-35	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)・R-L(横)充填施文	砂・滑化鉄	P-2497-2511同一個体		
H30-187	U-35	Ⅱ層	漆屏形	側部	波(波谷付)・直L-L(横)・R-L(横)充填施文	砂・滑化鉄	P-2885-1841同一個体		
H30-188	V-36	Ⅱ層	漆屏形	口縫部	内周帯直L-L(横)・R-L(横)	砂	P-196		
H30-189	U-34-W-37	Ⅱ層・断子	漆屏形	底部	直輪鉗合体5期類似	粗い砂	P-398-910地		
H30-190	M-67	Ⅱ層	台付鉢	完形	口引(波谷・直L-L)・直L-L(横)・直R-L(横)崩削	ミガキ	P 巻無し		
H30-191	M-68	表塗	漆屏形	側部	無文・口引(波谷・直L-L)・直R-L(横)	ミガキ	P-1126		
H30-192	W-32	Ⅱ層	台付鉢	口縫・側部	口端膨脹直L-L(横)・R-L(横)	ミガキ	P-2125-2210地		
H30-193	N-O-63	Ⅱ・Ⅲ層	台付鉢	口縫・側部	变形工字文・R-L(横)	ミガキ	P 巻無し		

団番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文様等	内面調整	出土	備考
H30-194	P - 68	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	丁字文	ミガキ	細砂	P - 172
H30-195	N - 69	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	変形工字文・L R(斜)	ミガキ	細砂	P - 832-1168
H30-196	O - 58	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	変形工字文・L R(斜)	ミガキ	細砂	P番無し、195同一個体
H30-197	V - 31	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	沈縫	ミガキ	細砂・焼化鉄	P - 1950
H30-198	Q - 67	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	変形工字文	ミガキ	細砂	P - 765,195同じ個体?
H30-199	W - 34	Ⅱ層	台付鉢	右部	沈縫(横平行・波状)・R L(斜)・赤絵	ミガキ	細砂	P - 1364
H30-200	表様	I層	小型鉢	口縁部	沈縫・L R(横)	ミガキ	細砂・焼化鉄	P番無し
H30-201	N - 63	I+II層	台付鉢	口縁・側部	沈縫・L R(横)	ミガキ	細砂・焼化鉄	P番無し
H30-202	表様	I層	台付鉢	側部	沈縫	ミガキ	細砂・針状物	P番無し
H30-203	N - 67	Ⅱ層	小型台付鉢	右部欠	4波状(縦・無文・沈縫)	ミガキ	細砂	P番無し
H31-204	N - 67	Ⅱ層	鉢形	口縁部	口縁斜削・R L(横)	砂	砂	P番無し
H31-205	O - P - 65-66	I+II層	鉢形	口縁部	工字文・L R(横)	砂	砂	P - 1104
H31-206	W - 40	Ⅱ層	鉢形	口縁部	工字文・L R(横)	砂	砂	P - 233
H31-207	N - 65	Ⅱ層	鉢形	口縁部	沈縫・R L(縦)	細砂	細砂・焼化鉄	P - 1178
H31-208	O - 64	泡丸	鉢形	腹部	工字文・L R(横)	砂	砂	P番無し
H31-209	M - 66	Ⅱ層	鉢形	口縁・側部	口縁稍凸・L R(横)・側部削消し	ミガキ	細砂・石萬鉄	P - 183
H31-210	V - 32	Ⅱ層	鉢形	口縁部	口縁外削人・L R(横)・沈縫・側部削消し	ミガキ	砂	P - 3370
H31-211	V - 32	Ⅱ層	鉢形	口縁部	L R(横)削人・R L(横)	砂	砂	P番無し
H31-212	M - 72	Ⅱ層	鉢形	口縁部	L R(横)・泡丸・口縁無・側部削消し	砂	砂・火炎粒	P - 1124
H31-213	T - 41-U - 29	II層	燈形	口縁・側部	口縁直立・ミガキ・R L(縦)	ミガキ	細砂	P - 1669
H31-214	表様	I層	燈形	腹部	沈縫・通縫鉢	細砂	細砂	P番無し
H31-215	T - 66	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁内削・沈縫・横削・前斜面削・R L光坦	細砂	細砂	P - 16
H31-216	V - 40	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	L R(横)・内削・R L(横)・通縫鉢沈縫	細砂	細砂	P - 1435
H31-217	U - 32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	平(口縁削)・前斜面削・内面同彫	細砂	細砂	P番無し
H31-218	Q - 63	Ⅱ層	深鉢形	側部	沈縫(横・二重底削人)・R L(横)	細砂	細砂	P - 130
H31-219	M - 63	Ⅱ層	深鉢形	側部	規則削(外羽根削)・R L(横)	細砂	細砂	P番無し
H31-220	P - 68	Ⅱ層	深鉢形	側部	足 L(縦)・沈縫(曲線)	細砂	細砂・焼化鉄	P - 171
H31-221	P - 67	Ⅱ層	深鉢形	側部	沈縫(泡丸)・足 L(縦)・充墨施文	細砂	細砂・焼化鉄	P - 801
H31-222	泡丸	不明	深鉢形	側部	沈縫・横削(行)・羽根削(横)	細砂	細砂	P番無し
H31-223	W - 35	Ⅱ層	燈形	肩部	沈縫(曲線)・R L光坦施文	細砂	細砂	P - 182
H31-224	P - 67	Ⅱ層	燈形	肩部	R L(横)・沈縫・交叉互刺削	ナデ	細砂	P - 791
H31-225	O - 64	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	R L(横)・沈縫・交叉互刺削	細砂	細砂	P番無し
H31-226	F - 64	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	L R(横)・沈縫・交叉互刺削	細砂	細砂	P - 1106
H31-227	P - 63	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	L R(横)・沈縫・交叉互刺削	細砂	細砂	P - 438
H31-228	P - 68	Ⅱ層	深鉢形	側部	R L(横)・沈縫・交叉互刺削	細砂	細砂・焼化鉄	P - 950
H31-229	N - 66	I層	深鉢形	側部	R L(横)・沈縫・交叉互刺削	細砂	細砂	P番無し
H32-230	X - 35-37-38	II層	深鉢形	口縁・底部	口縁走毛・R L(斜)・R L(縦)	砂	砂	P - 323-828-1024他
H32-231	U - 32	II層	深鉢形	口縁部	(脚多)多毛 R L(縦)	ミガキ	砂	P番無し
H32-232	W - 33	II層	深鉢形	口縁部	L R(横)	砂	砂	P番無し
H32-233	V - 33	II層	深鉢形	口縁部	R L(縦)	ナデ	砂	P番無し
H32-234	W - 33	II層	深鉢形	口縁部	R L(縦)	砂	砂	P番無し
H32-235	U - 35	II層	深鉢形	口縁部	R L(横)	ミガキ	砂	P番無し
H32-236	X - 35	II層	深鉢形	側部	R L(横)	砂	砂	P - 1338
H32-237	U - 32	II層	深鉢形	側部	R L(横)	砂	砂	P番無し
H32-238	X - 35	II層	深鉢形	口縁部	口縁走毛 R L(斜)・其 L(横)	砂	砂	P - 1338-230同じ個体
H32-239	X - 35	II層	深鉢形	口縁部	R L(縦)	ナデ	砂	P - 330-339他
H32-240	X - 35	II層	深鉢形	口縁部	口縁外削・R L(縦)	ミガキ	砂	P - 372
H32-241	V - 31	泡丸	深鉢形	底部	R L(横)・外底面水痕	砂	砂	P番無し
H32-242	U - 36	II層	深鉢形	脚部・底部	R L(縦)	ナデ	砂・企賀母片	P - 1341-1345他
H32-243	V - 31	II層	深鉢形	脚部	双脚・R L(横)	ナデ	細砂・焼化鉄	P - 1950他
H32-244	L - 59	II層	深鉢形	口縁・側部	L R(斜)・R L(横)	ナデ	細砂・焼化鉄	P番無し
H32-245	U - V - 42	II層	深鉢形	脚部・底部	L R(横)	砂	砂	P - 65-70-109
H32-246	X - 35	II層	深鉢形	底部	足 L(縦)・外底面代鉄	ナデ	砂・企賀母片	P - 2
H32-247	N - O - 63	I+II層	深鉢形	脚部・底部	ナテ扒張・凹面而縫縄不明	砂	砂	P - 1178
H32-248	U' - V - 34	II層	深鉢形	脚部・底部	L R(横)・斜	砂	細砂	P番無し
H32-249	V - 33	II層	深鉢形	底部	足 L(縦)	ナデ	砂	P番無し
H32-250	U - 34	II層	深鉢形	口縁部	無文(ケヤクナナデ)	ナデ	砂・企賀母片	P - 1963-2631他
H32-251	M - 66-67	II層	深鉢形	底部外	口縁内削・外底ナナデ	砂	砂	P番無し
H32-252	W - 40	II層	深鉢形	底部外	口縁外削・外底ナナデ・R L(横)	砂	砂	P - 230-1269

出土石器

測定番号	出土地点	層位	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	取上番号	備考
H34-1	石頭	Y - 40	II	珪質岩	17.5	14.9	3.3	0.8	S - 362
H34-2	石頭	Y - 39	II	珪質岩	17.5	14.1	2.2	0.5	S - 466
H34-3	石頭	V - 40	II	珪質岩	19.4	13.0	3.3	0.7	S - 216
H34-4	石頭	W - 36	II	珪質岩	26.1	16.9	3.7	1.1	S - 100
H34-5	石頭	T - 69	II	珪質岩	28.0	18.0	5.0	1.9	S - 69
H34-6	石頭	Y - 40	II	珪質岩	26.3	17.4	3.3	1.0	S - 244
H34-7	石頭	V - 41	II	珪質岩	28.2	18.6	3.6	1.5	S - 210
H34-8	石頭	S.V - 2	II	珪質岩	25.5	17.3	5.2	1.6	S - 3
H34-9	石頭	U - 40	II	珪質岩	22.7	16.5	4.6	1.2	S - 98
H34-10	石頭	U - 41	II	珪質岩	23.7	14.7	3.6	0.9	S - 205
H34-11	石頭	V - 31	II	珪質岩	38.0	14.5	6.2	2.7	S - 1299
H34-12	石頭	R - 77	II 層位	珪質岩	39.0	13.0	4.5	1.7	S - 14
H34-13	石頭	O - 61	II	珪質岩	36.0	17.0	3.5	1.5	S - 866
H34-14	石頭	U - 36	II	珪質岩	29.2	15.5	4.4	1.4	凸溝有りで斜状の基部
H34-15	石頭	L - 54	II	珪質岩	29.5	11.3	4.1	0.9	S - 866
H34-16	石頭	X - 34	II	珪質岩	25.1	13.9	4.9	1.1	凸溝有り・基部破損
H34-17	石頭	M - 67	II	珪質岩	22.0	11.0	3.5	0.6	S - 866

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	取上番号	備考
H34-18	石器	N-65	II	珪質頁岩	27.0	9.0	4.0	0.8	S-番無し	凸丸有茎・小型縫合
H34-19	石器	R-59	II	珪質頁岩	21.0	17.0	4.1	1.1	S-5	凸丸有茎・体部上半破損失
H34-20	石器	V-40	盛土	珪質頁岩	47.7	24.9	7.0	6.0	S-番無し	楕円形打刃素材・側縫合・体状の端部に片面彫整
H34-21	石器	W-38	N	珪質頁岩	34.3	24.1	4.9	3.2	S-1709	端部二角・オール状・片面彫整・端部磨耗
H34-22	石器	V-29	II	珪質頁岩	19.8	14.1	3.8	0.9	S-285	端部端面・側縫合・端部磨耗・光沢・側縫合
H34-23	石器	W-30	II	珪質頁岩	18.7	10.4	2.1	0.3	S-1500	小窓口付・チップ材・端部調和・直歛でも可
H34-24	石器	X-37	II	珪質頁岩	63.1	25.4	9.8	12.9	S-101	縫合・刃部欠失・背面彫整用削溝・松原型・早期
H34-25	石器	U-39	II	珪質頁岩	58.1	25.8	9.9	13.9	S-256	縫合・周縫合調整・腹面の端部にも側縫合
H34-26	石器	U-34	II	珪質頁岩	22.1	25.4	8.6	5.7	S-1003	縫合・破損端部片・片面彫整・急角度彫整
H34-27	石器	V-40	盛土	珪質頁岩	25.8	11.0	4.9	1.0	S-番無し	側・背面彫整・腹面彫整つまみ部・とりあえず石か?
H34-28	石器	Q-60	II	珪質頁岩	96.0	50.0	18.0	83.1	S-10	短縫合・背面に難縫合
H34-29	楔形打刃	W-34	N	珪質頁岩	29.7	30.1	8.0	7.1	S-730	上下二対の刃部・両端に表皮残
H34-30	楔形打刃	V-41	II	珪質頁岩	29.8	28.3	6.5	5.2	S-番無し	上下二対の刃部・一側縫合に表皮残
H34-31	楔形打刃	V-30	參	珪質頁岩	25.8	25.6	6.5	3.4	S-番無し	破断片
H34-32	楔形打刃	S-X-3	1層	珪質頁岩	41.3	33.5	14.6	24.6	S-番無し	ビエスだらう? 上端部と右縫合の流れ
H34-33	楔形打刃	V-38	II	珪質頁岩	31.4	23.8	8.1	3.6	S-584	縫合・せん断部・背面に表皮残
H34-34	スクレイバー	P-64	II	珪質頁岩	32.0	21.5	6.6	4.3	S-73	両面の側縫合溝・鋸歯・直歎?
H34-35	スクレイバー	S-67	II	珪質頁岩	16.0	23.0	3.0	1.3	S-54	薄い小窓口材・両面彫整・彫刻
H34-36	スクレイバー	T-61	II	珪質頁岩	51.5	35.5	15.0	21.6	S-30	背面彫整・立体・急角度彫整・表皮
H34-37	スクレイバー	Q-63	II	珪質頁岩	27.0	23.0	8.0	4.0	S-60	背面の側縫合溝・端部破損・バタク残
H34-38	スクレイバー	T-65	II	珪質頁岩	36.6	26.5	12.5	11.3	S-68	背面彫整・彫刻・急角度彫整・表皮
H34-39	スクレイバー	U-39	II	珪質頁岩	60.3	47.0	12.0	28.7	S-203	背面彫整・彫刻・直歎・側縫合
H34-40	石器	V-37	II	珪質頁岩	25.0	22.0	5.4	2.9	S-436	縫合・破損刃片・破損刃使用・腹面に難縫合
H34-41	スクレイバー	P-66	II	珪質頁岩	36.0	41.0	12.5	17.9	S-27	背面彫整・彫刻・急角度彫整
H34-42	スクレイバー	W-36	II	珪質頁岩	53.3	36.3	11.3	20.5	S-331	板長片表材・左端部の端面・難縫合・背面両側面に粗い彫整
H34-43	スクレイバー	U-41	II	珪質頁岩	59.0	45.1	12.7	25.3	S-2670	背面彫整・彫刻・左端部折りによるような彫整
H34-44	スクレイバー	X-34	II	珪質頁岩	69.1	25.0	14.4	20.3	S-112	破損品・片面・彫刻・彫刻
H34-45	スクレイバー	T-63	N	珪質頁岩	53.0	24.5	8.0	6.4	S-71	一側縫合・陰干剥離・端部・縫合機能?
H34-46	スクレイバー	X-48	鹿丸	珪質頁岩	35.1	21.0	8.9	4.8	S-8	基礎破損・無い両面彫整
H34-47	スクレイバー	R-69	II	珪質頁岩	20.0	26.0	7.5	3.1	S-43	背面両縫合に小窓口彫整・素材剥片端部破損
H34-48	スクレイバー	Q-65	II	珪質頁岩	28.5	18.5	7.5	3.6	S-28	破損品・片面彫刻・腹面
H34-49	スクレイバー	R-62	II	珪質頁岩	94.5	38.0	13.0	33.9	S-23	縫合式?・背面一側縫合・直歎?
H34-50	スクレイバー	W-40	II	珪質頁岩	35.6	29.3	9.2	7.6	S-218	背面彫整・彫刻・直歎・直歎
H34-51	スクレイバー	W-38	II	珪質頁岩	32.7	33.5	12.2	14.5	S-48	基礎破損・背面彫整・彫刻・直歎・縫合
H34-52	スクレイバー	R-60	II	珪質頁岩	39.0	36.5	10.5	12.3	S-9	背面・縫合・端部・裏面・削形?
H34-53	鉤形石器?	R-67	II	珪質頁岩	31.0	25.0	11.0	7.2	S-46	四辺形・上端削落・難縫合
H34-54	スクレイバー	P-68	II	珪質頁岩	37.0	27.0	7.0	5.3	S-47	腹面彫刻の一端・難易易彫整
H34-55	削製石斧	V-32	II	珪質頁岩	49.0	22.0	100	17.3	S-2490	小型・両側面削り切り前・觸
H34-56	削製石斧	W-44	1	珪質頁岩	77.5	38.5	14.5	43.7	S-番無し	鋼部片・両側面
H34-57	削製石斧	U-40	II	珪質頁岩	26.0	27.0	21.0	18.1	S-252	破損・基礎彫刻
H34-58	削製石斧	U-40	II	珪質頁岩	72.5	51.0	34.0	157.1	S-281	腕上半端彫刻・最打痕・研磨なし未製品・製作途中に破損
H34-59	削製石斧	U-43	II	珪質頁岩	38.0	34.0	20.0	38.2	S-5	未製品・基础彫刻
H34-60	削製石斧	Q-70	II	珪質頁岩	53	52	21	79.6	S-53	研平彫刻材・敲打・難縫合
H34-61	削製石斧	表材	II	珪質頁岩	67	46	20	94.9	S-番無し	平行斜材・敲打・縫合・基部彫刻
H34-62	打製石斧	U-36	II	珪質頁岩	97	51	15	104.1	S-375	平面彫刻石斧・早期前一期前縫合
H34-63	剥離輝石	R-37	II	砂岩	29.0	35.0	11.0	14.8	S-15	研平・理・素材・両側面刀片に隙縫・斜縫合
H34-64	剥離輝石	P-39	II	珪質頁岩	63.0	36.0	12.0	40.8	S-11	扁平下端裏材・内側縫合・逆彫刻・端部?ビエス?右端未削
H34-65	磨石	T-46	I	チャート	145	74	63	862.8	S-番無し	三角柱・磨石・両端に嵌合
H34-66	磨石	V-36	II	砂岩	149	60	81	104.0	S-323	三角柱・磨石・側面削り・直歎・研磨
H34-67	磨石	V-36	II	砂岩	161	90	60	104.9	S-318	三角柱・磨石・研磨・削面・彫刻
H34-68	磨石	河床表材	II	四隅丸石	145	81	48	806.0	S-番無し	角状磨石の軸・直角形の刃を用意・直角の片側に難縫合
H34-69	磨石	U-40	II	粗粒玄武岩	135	64	45	544.8	S-200	角状磨石の軸・一部・難縫合・直角
H34-70	磨石	V-40	II	粗粒玄武岩	121	67	61	64.6	S-450	角柱・粗粒石・研磨・難縫合
H34-71	磨石	V-37	II	砂岩	170	71	62	1061.9	S-303	角柱・磨石・研磨・端部・端縫合
H34-72	磨石	V-32	II	砂岩	127	70	55	540.3	S-2524	角柱・磨石・研磨・直歎
H34-73	磨石	V-35	II	粗粒玄武岩	154	63	56	793.5	S-508	角柱・磨石・研磨・削面・彫刻に弱い難縫合、破損
H34-74	磨石	W-40	II	砂岩	142	100	69	109.6	S-78	角柱・磨石・研磨・難縫合
H34-75	磨石	S-63	II	安山岩	144	74	68	807.4	S-26	角柱・磨石の軸・長方形の刃を用意
H34-76	磨石	W-37	II	砂岩	161	64	50	714.2	S-397	角柱・磨石・研磨・難縫合・直角
H34-77	磨石	S-X-2	鹿丸	砂岩	155	57	83	1016.4	S-14	角柱・磨石・研磨・難縫合・直角
H34-78	磨石	W-38	II	粗粒玄武岩	79	48	87.2	S-47	角柱・磨石・研磨・直角形の刃・端部に嵌合	
H34-79	磨石	X-37	II	細粒玄武岩	145	84	44	549.7	S-537	角柱・磨石・研磨・直角形の刃
H34-80	磨石	X-37	II	砂岩	111	66	34	269.2	S-538	角柱・磨石・小型・端部崎立
H34-81	磨石	U-36	II	粗粒玄武岩	121	80	43	322.1	S-882	角柱・磨石・研磨・難縫合・端部に難縫合
H34-82	手状研磨平行裂石器	Y-31	鹿丸	カキシフタス	102	79	21	183.1	S-番無し	とりあえず千手型・難縫合調整
H34-83	手状研磨平行裂石器	X-37	II	粗粒玄武岩	187	119	36	1102.0	S-389	大型の直角・弱い側縫合
H34-84	磨石	V-40	II	砂岩	99	58	28	134.8	S-96	一側縫合に広い直打机
H34-85	磨石	T-62	II	砂岩	142	77	44	670.8	S-61	一側縫合に弱い直打机
H34-86	磨石	T-61	II	砂岩	72	51	28	125.6	S-29	難縫合端部に弱い直打机
H34-87	磨石	S-77	II	珪質頁岩	155	85	77	1022.3	S-12	三角柱・直打机の二面を直打机に使用
H34-88	磨石	R-77	II	粗粒玄武岩	96	64	48	491.8	S-13	直打机の刃の両側面に直打机
H34-89	磨石	O-60	II	流紋岩	99	52	35	281.8	S-番無し	直打机の刃の両側面に弱い直打机
H34-90	磨石	X-36	II	カキシフタス	73	63	35	334.9	S-338	やや屈曲・方形彫刻・直角彫刻最底
H34-91	磨石	X-38	II	チャート	110	105	38	915.9	S-63	不整打机・端部に崎立
H34-92	磨石	T-36	II	チャート	93	98	62	815.6	S-1048	内縫(複型状態)・難縫合の半分に崎立
H34-93	磨石	W-36	II	カキシフタス	87	84	50	558.3	S-166	不整打机・端部に崎立
H34-94	磨石	X-36	II	砂岩	58	47	39	142.5	S-320	内縫・端部に崎立・使用による直角縫合
H34-95	磨石	V-36	II	カキシフタス	82	62	52	187.7	S-1324	内縫・直角縫合
H34-96	磨石	W-40	II	カキシフタス	72	72	55	532.0	S-77	内縫・周縫合

国版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	取上番号	備考
ME0-98	閃石	P-69	Ⅱ	粗粒玄武岩	135	66	35	4396	S-49	縁の一部に削い打痕
ME0-99	閃石	X-35	Ⅱ	チャート	116	69	35	7730	S-105	粗円形縁、一側縁に亂さ、無清い凹み、小窓台石
ME0-100	閃石	S-62	Ⅲ	粗粒岩	113	52	45	4271	S-34	粗円形縁の一端表面に鋭い凹み、一端に削い打痕
ME0-101	閃石	W-32	Ⅱ	チャート	114	62	68	6859	S-1716	粗円形縁、縁端の中央部に鋭い、無清い凹み小型台石
ME0-102	閃石	U-36	Ⅲ	粗粒岩	73	83	36	2616	S-826	粗張、両面に凹み
ME0-103	閃石	U-61	Ⅲ	砂岩	68	72	25	2194	S-65	扁平縁の両面、中央部に削い打痕痕跡
ME0-104	閃石	P-69	Ⅲ	砂岩	108	96	49	684.0	S-51	扁平円筒の一部表面に凹み、無縁の一部削い打痕
ME0-105	閃石	X-34	Ⅱ	砂岩	128	108	70	1407.5	S-333	扁平円筒、表面の摩滅
ME0-106	閃石	S-63	Ⅱ	流紋岩	99	89	53	682.5	S-35	厚みのある扁平円筒、表面フルフル
ME0-107	閃石	V-30	Ⅲ	チャート	97	80	49	564.5	S-1275	扁平円筒、表面の摩滅
ME0-108	閃石	Q-70	Ⅲ	安山岩	96	82	34	401.4	S-52	扁平円筒、表面フルフル
ME0-109	閃石	X-31	Ⅱ	輝緑岩	103	62	32	337.9	S-303	表面無し
ME0-110	閃石	S-62	Ⅲ	粗粒岩	94	85	30	351.9	S-32	扁平円筒
ME0-111	閃石	S-58	Ⅲ	カルクシラウス	82	90	65	6557	S-49	厚みのある扁平熱凹彫刻、表面フルフル
ME0-112	閃石	V-32	Ⅲ	黒色巻雲片岩	83	78	44	4290	S-2403	扁平円筒、表面の摩滅
ME0-113	閃石	X-37	Ⅲ	輝緑岩	81	53	27	2041	S-202	扁平円筒、表面の摩滅
ME0-114	閃石	S-32	Ⅲ	砂岩	73	64	29	1891	S-1	扁平円筒、表面フルフル
ME0-115	閃石	U-41	Ⅲ	チャート	51	43	25	89.2	S-303	扁平円筒、表面の摩滅
ME0-116	自然縞	P-61	Ⅲ	月片岩	53	38	18	47.2	S-19	86~90まで比較的近い場所でまとめて出土
ME0-117	自然縞	P-61	Ⅲ	粗粒岩	56	39	16	50.0	S-20	
ME0-118	自然縞	P-62	Ⅲ	流紋岩	57	33	11	26.1	S-21	
ME0-119	自然縞	P-62	Ⅲ	流紋岩	49	40	11	34.1	S-22	
ME0-120	自然縞	Q-61	Ⅲ	頁岩	51	43	12	33.0	S-17	
ME0-121	閃石	U-35	Ⅲ	チャート	137	71	62	87.6	S-1346	粗円筒、彫面の摩滅
ME0-122	閃石	X-33	Ⅲ	チャート	125	94	73	1204.9	S-337	粗円筒、表面の摩滅
ME0-123	閃石	W-35	Ⅲ	透巖岩	90	100	76	920.2	S-303	圓錐
ME0-124	鉱石	U-36	Ⅲ	安山岩	86	66	71	586.6	S-761	一部面に変色、円錐
ME0-125	閃石	V-33	Ⅲ	チャート	51	50	44	164.7	S-2426	球状縫隙、表面摩滅
ME0-126	閃石	U-41	Ⅲ	チャート	33	36	26	46.6	S-303	球状縫隙、表面摩滅
ME0-127	理透	R-54	Ⅲ	砂岩	185	63	26	227.3	S-3	長方形凹彫刻、一側縁と薄い底面に複数溝
ME0-128	理透	W-38	Ⅲ	粗粒玄武岩	118	54	24	239.4	S-57	扁平平行凹彫刻の長軸一面面に溝縫網目
ME0-129	理透	U-39	Ⅲ	チャート	62	63	17	76.0	S-204	周縁に圓錐、一部削い流れ
ME0-130	理透	V-44	Ⅲ	黒色巻雲片岩	128	93	48	648.8	S-3	一個圓錐型、
ME0-131	白石	X-33	Ⅲ	黒色巻雲片岩	99	48	47	239.7	S-1564	三角孔内埋、粗張、表面に削い摩滅
ME0-132	白石	X-37	Ⅲ	黒色巻雲片岩	132	69	98	816.5	S-1528	一部面に削い摩滅、白色
ME0-133	白石	W-35	Ⅲ	輝緑岩	192	148	55	2466.2	S-500	扁平錐
ME0-134	白石	U-60	Ⅲ	安山岩	166	116	52	1539.2	S-57	粗円形縁、表面の中央部摩滅(フルフル)
ME0-135	白石	T-69	Ⅲ	安山岩	298	300	45	4642.9	S-62	大型縫隙、中央部に擦滅
ME0-136	白石	R-60	Ⅲ	砂岩	235	219	45	2864.5	S-6	円形に渦巻済、片側(面)は自然面、大型の理透?
ME0-137	白石	2号集石		砂岩	344	270	116	13,380.0	S-968	圓形節理に鋸歯
ME0-138	白石	V-37	Ⅲ	チャート	216	126	124	3231.1	S-368	一部面に削い摩滅、白色
ME0-139	白石	W-35	Ⅲ	角礫岩	408	379	109	22,300.0	S-501	示された表面摩滅
ME0-140	白石	S-K-2	底面	角礫岩	400	219	172	21,580.0		示された表面摩滅
ME0-141	白石	W-38	Ⅲ	頁岩	385	277	136	19,800.0	S-476	示された表面摩滅
ME0-142	白石	W-36	Ⅲ	安山岩	330	290	152	20,120.0	S-483	示された表面摩滅、白色
ME0-143	石刀	Q-61	Ⅲ	粘板岩	190	35	16	142.9	S-16	無い研磨
ME0-144	籽石製品	W-34	Ⅲ	鵠卵石	75	63	55	51.6	S-793	球形鵠卵石、一部を削り平坦面

横沢山(2)遺跡

遺構外出土石器

国版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	取上番号	備考
ME44	鉱石	トレンチ1	Ⅱ	砂岩	126	63	25	214.7	S-1	埋堆部西端、周縁に鋭き、早期?

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1983 「鶴平(1)遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 「和野前山遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 「蔚佐遺跡」
- 青森県教育委員会 1984 「沢橋込遺跡」
- 青森県教育委員会 1993 「野場(5)遺跡」
- 青森県教育委員会 1999 「見立山道跡・弥次郎宿跡Ⅱ」
- 青森県教育委員会 1999 「鶴引遺跡」
- 青森県教育委員会 2003 「柄船遺跡」
- 青森県教育委員会 2008 「荒屋敷久保(1)遺跡」
- 八戸市教育委員会 1988 「八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」「鳥木沢遺跡」
- 八戸市教育委員会 1989 「赤御堂道跡発掘調査報告書」
- 八戸市教育委員会 2004 「牛ヶ沢(4)遺跡Ⅲ」
- 八戸市教育委員会 2004 「田向遺跡」
- 階上町教育委員会 1988 「白座遺跡・野場(3)遺跡」
- 階上町教育委員会 2007 「寺下道跡・荒烟遣除発掘調査報告書」
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 「牧田貝塚発掘調査報告書」
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 「沢田2号道跡発掘調査報告書」
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 「新田道跡発掘調査報告書」
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 「大清水上道跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第436集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第439集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第475集
- 相原淳一 1982 「特集日付式土器群の成立と解釈」「赤い本 刀剣号」赤い本同人会
- 大沼 忠春 1985 「魚骨文の新例について」「北海道考古学」第21号
- 茅野 雄雄 2002 「いわゆる結節回転文から見た円筒下肩式について」「専修考古学」第9号



作業状況 (E→)



作業状況 (SE→)



基本層序 ① (N→)



基本層序 ② (S→)

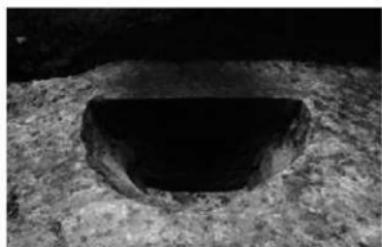
写真1 荒屋敷久保(2)遺跡 作業状況・基本層序



第1号土坑 土層 (S→)



第1号土坑 完掘 (N→)



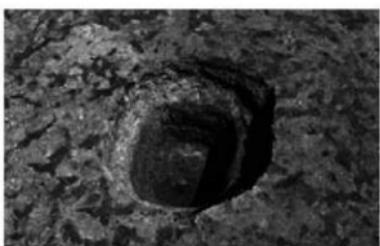
第3号土坑 土層 (NE→)



第3号土坑 完掘 (NE→)



第10号土坑 土層 (SW→)



第10号土坑 完掘 (SW→)



第5～8号土坑検出状況 (W→)

写真2 荒屋敷久保(2)遺跡 土坑(1)

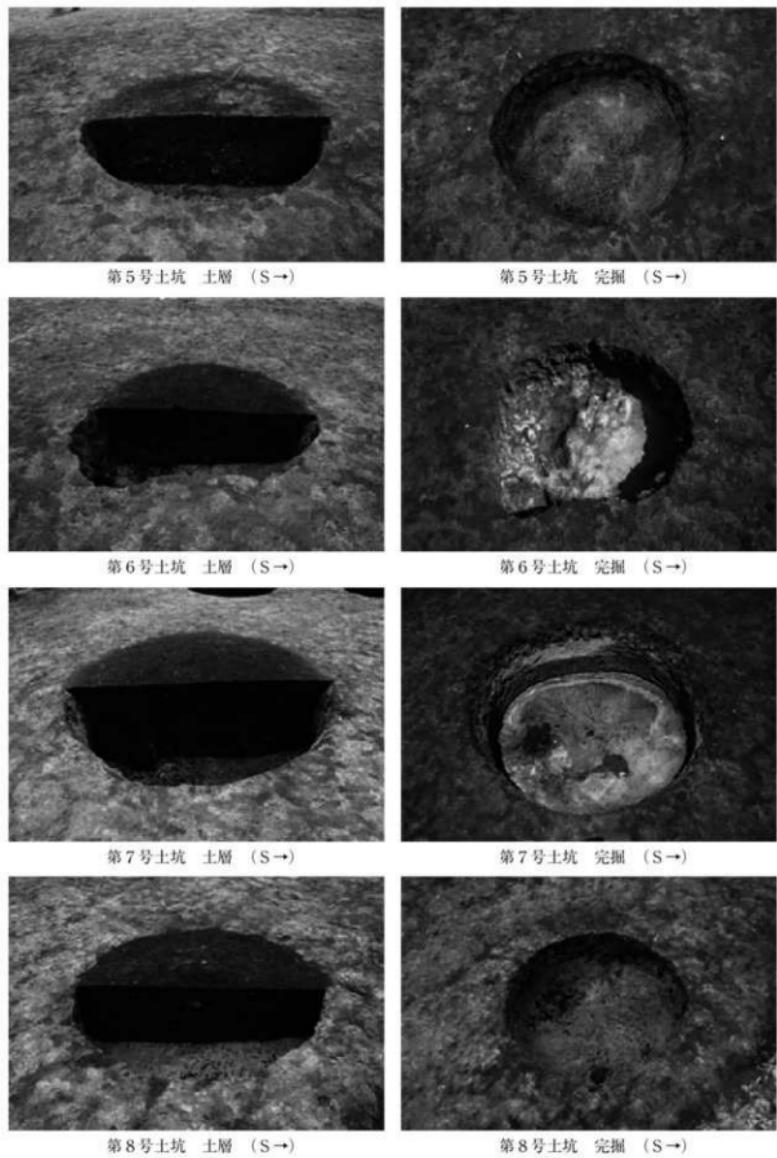
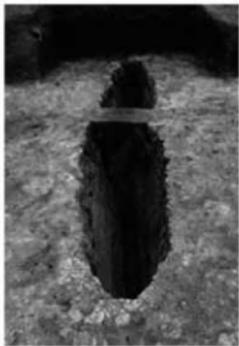


写真3 荒屋敷久保(2)遺跡 土坑(2)



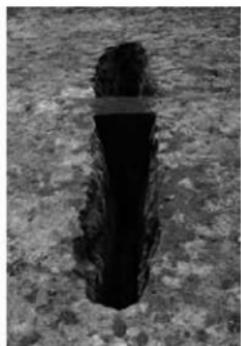
第1号溝状土坑土層 (S W→)



第2号溝状土坑土層 (S W→)



第3号溝状土坑土層 (S W→)



第4号溝状土坑土層 (S W→)



第5号溝状土坑土層 (W→)



第6号溝状土坑土層 (W→)



第7号溝状土坑土層 (S E→)



第8号溝状土坑土層 (NW→)



第1号溝跡 完掘 (N E→)

写真4 荒屋敷久保(2)遺跡 溝状土坑・溝跡



A区トレンチ精査作業状況 (E→)



B区近景・包含層調査状況 (W→)



B区平坦部精査作業状況 (E N→)

写真5 横沢山(1)遺跡 調査状況



基本層序 ① (W→)



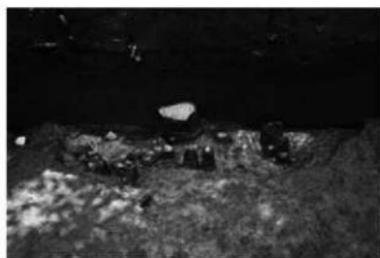
基本層序 ③ (W→)



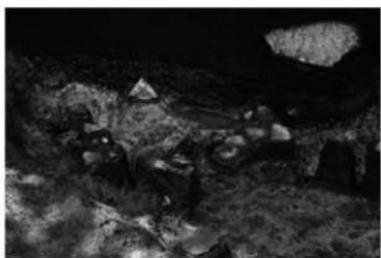
B区第1号土坑土層 (E→)



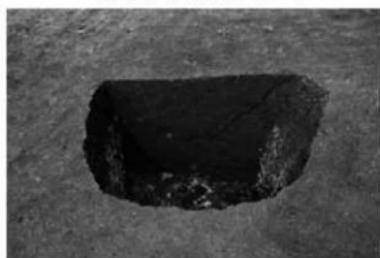
B区第1号土坑完掘 (E→)



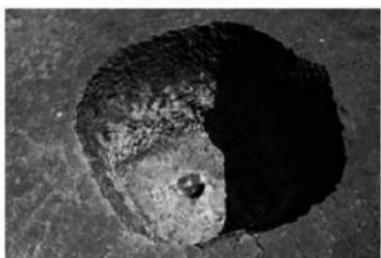
B区第2号土坑土層 (N→)



B区第2号土坑完掘 (NW→)



B区第3号土坑土層 (SW→)



B区第3号土坑完掘 (W→)

写真6 横沢山(1)遺跡 基本層序・土坑(1)



B区第4号土坑土層 (S→)



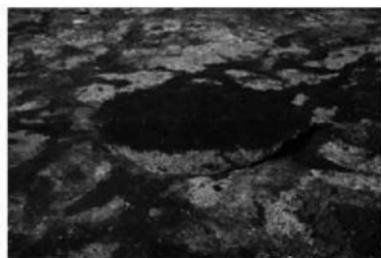
B区第4号土坑完掘 (S→)



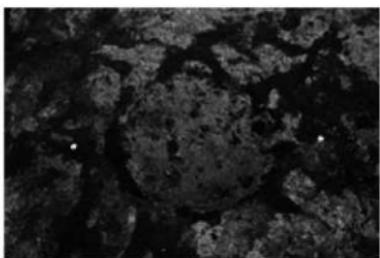
B区第6号土坑土層 (SW→)



B区第6号土坑完掘 (S→)



B区第7号土坑土層 (W→)



B区第7号土坑完掘 (W→)



B区野外炉土層 (W→)



B区野外炉完掘 (N→)

写真7 横沢山(1)遺跡 土坑(2)・野外炉



A区第1号溝状土坑土層 (S→)



A区第2号溝状土坑土層 (S→)



B区第1号溝状土坑完掘 (N→)



B区第2号溝状土坑土層 (N→)



B区第3号・4号溝状土坑完掘 (NE→)



B区第5号溝状土坑土層 (S→)



B区第6号溝状土坑土層 (E→)



B区第7号溝状土坑土層 (W→)

写真8 横沢山(1)遺跡 溝状土坑(1)



B区第8号溝状土坑土層 (SW→)



B区第9号溝状土坑土層 (S→)



B区第10号溝状土坑土層 (S→)



B区第11号溝状土坑土層 (SW→)



B区第12号溝状土坑土層 (SW→)



B区第13号溝状土坑土層 (SW→)



B区第14号溝状土坑土層 (E→)

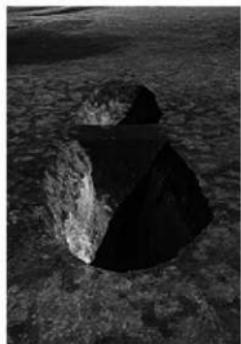


B区第15号溝状土坑土層 (S→)

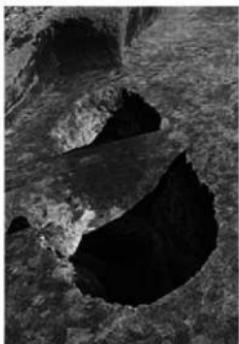


B区第16号溝状土坑土層 (W→)

写真9 横沢山(1)遺跡 溝状土坑(2)



B区第17号溝状土坑土層 (W→)



B区第18号溝状土坑土層 (S W→)



B区第19号溝状土坑土層 (W→)



B区第1号炭窯完掘 (E→)



B区第2号炭窯土層 (E→)



B区第3号炭窯完掘 (N E→)



B区第4号炭窯完掘 (N E→)

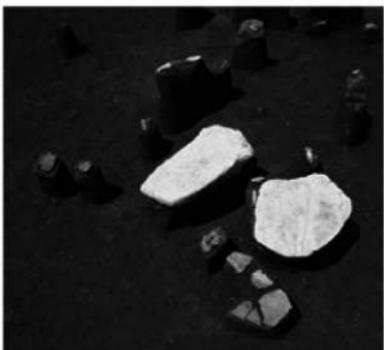


B区第2号炭窯精査作業狀況 (E→)

写真10 横沢山(1)遺跡 溝状土坑(3)・炭窯



B区第1号集石遺構 (E→)



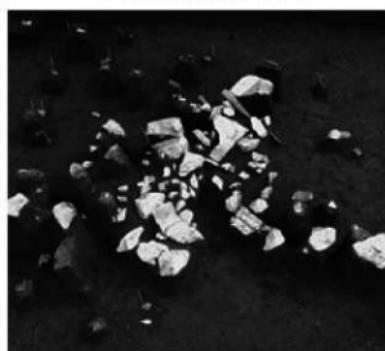
B区第2号集石遺構 (S E→)



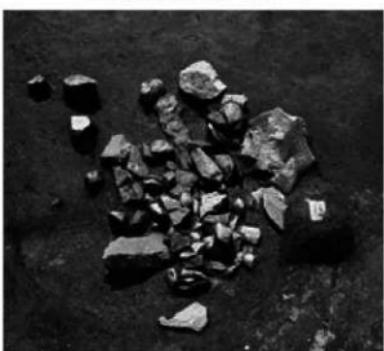
B区第3号集石遺構 (E→)



B区第4号集石遺構 (S E→)



B区第5号集石遺構 (N→)



B区第6号集石遺構 (N→)

写真11 横沢山(1)遺跡 集石遺構



B区包含層調査状況 (E N→)



B区包含層遺物出土状況 (W→)



B区包含層調査状況 (E→)

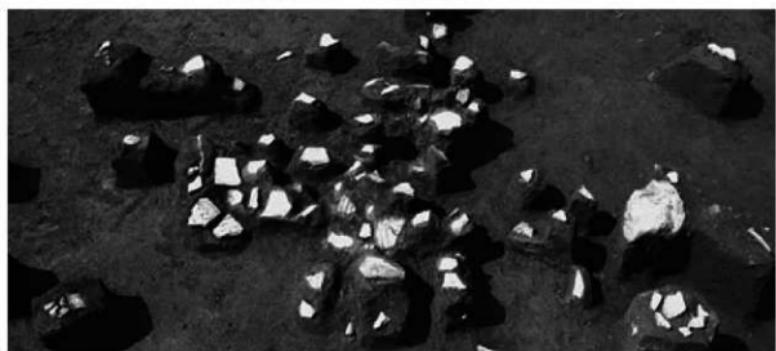


B区包含層調査状況 (S E→)

写真12 横沢山(1)遺跡 B区包含層調査状況



B区包含層・U-36グリッド遺物出土状況 (N E→)



B区包含層・U-37グリッド大木3式土器出土状況 (E→)



B区包含層・X-37グリッド遺物出土状況 (W→)

写真13 横沢山(1)遺跡 B区包含層遺物出土状況



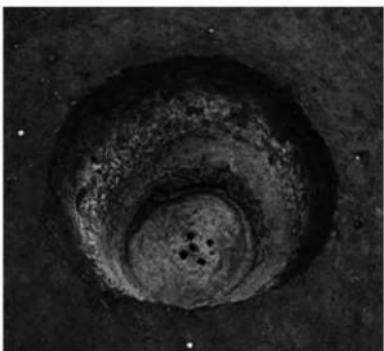
トレンチ11完掘 (S E→)



トレンチ8完掘 (S E→)



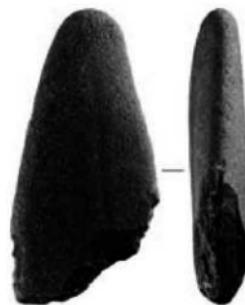
第1号土坑 土層 (E→)



第1号土坑 完掘 (E→)



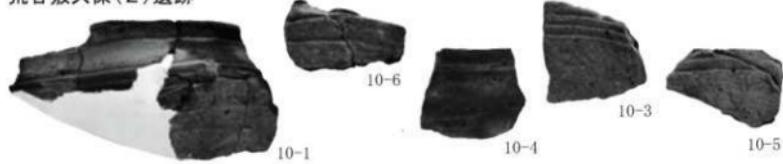
第1号溝状土坑土層 (W→)



出土遺物

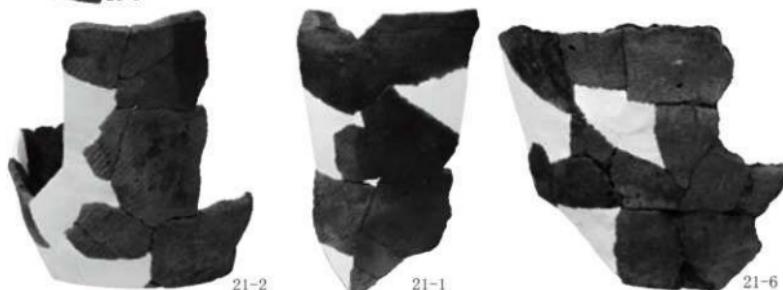
写真14 横沢山(2)遺跡 トレンチ完掘・土坑・溝状土坑・出土遺物

荒谷敷久保(2)遺跡

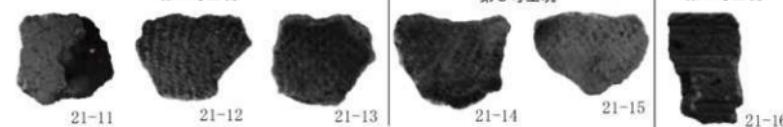


横沢山(1)遺跡

第2号土坑



第4号土坑



第8号土坑



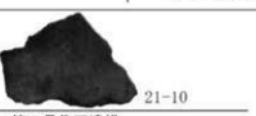
第9号土坑



野外炉



第3号土坑



第2号集石遺構

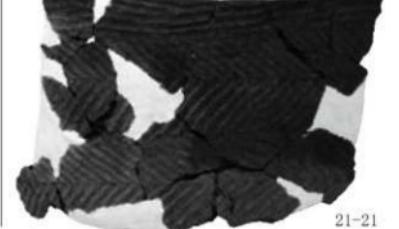


写真15 荒屋敷久保(2)遺跡出土遺物・横沢山(1)遺跡遺構内出土遺物

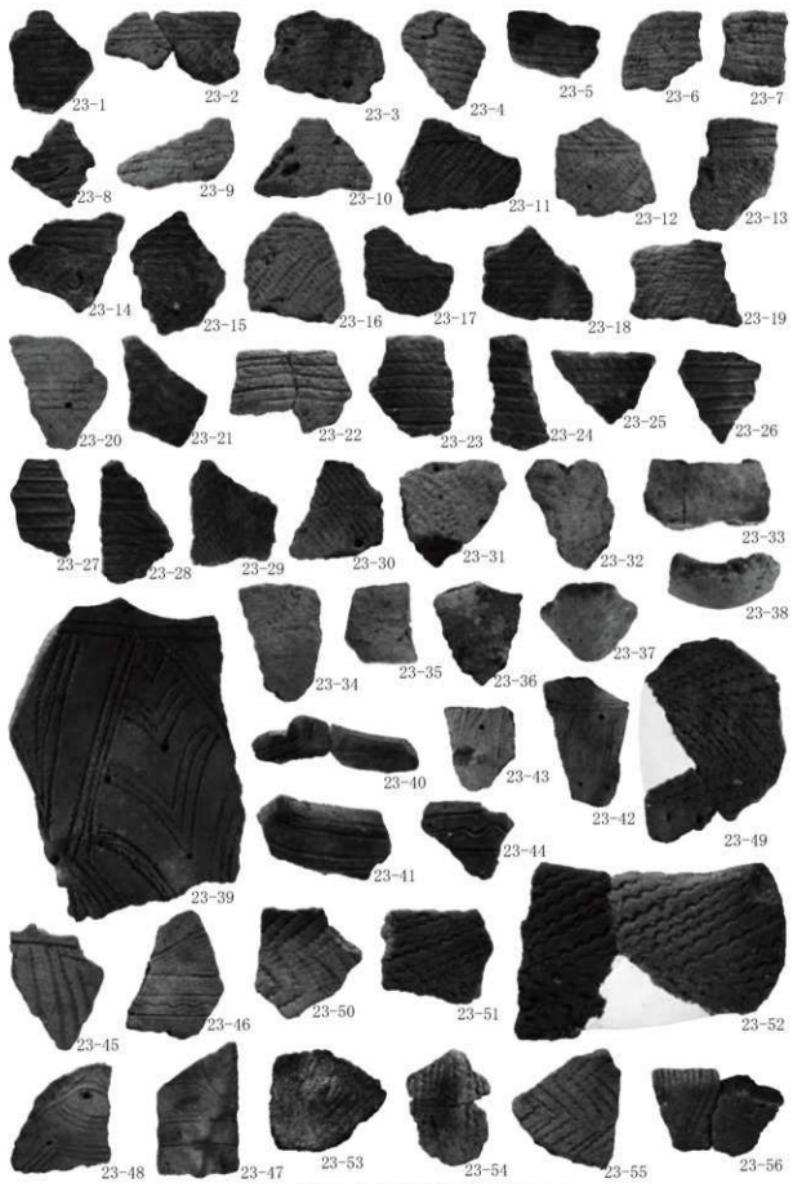


写真16 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(1)

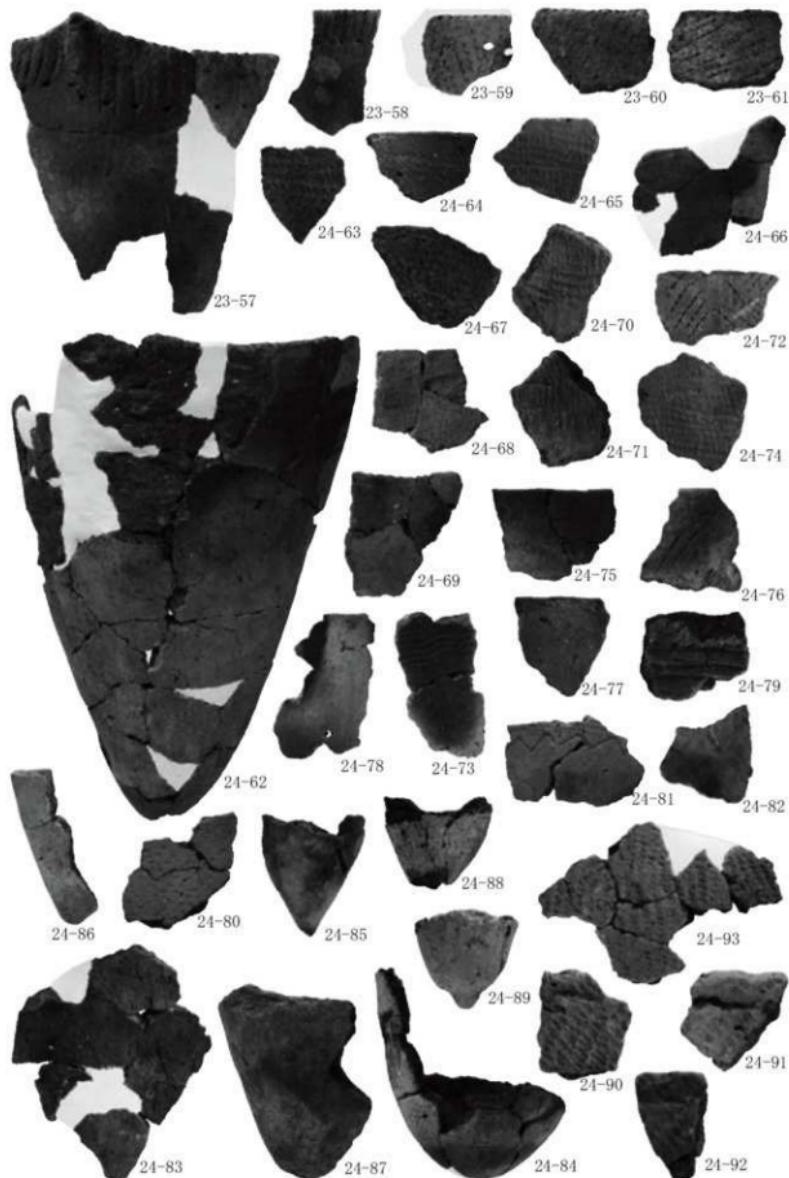


写真17 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(2)

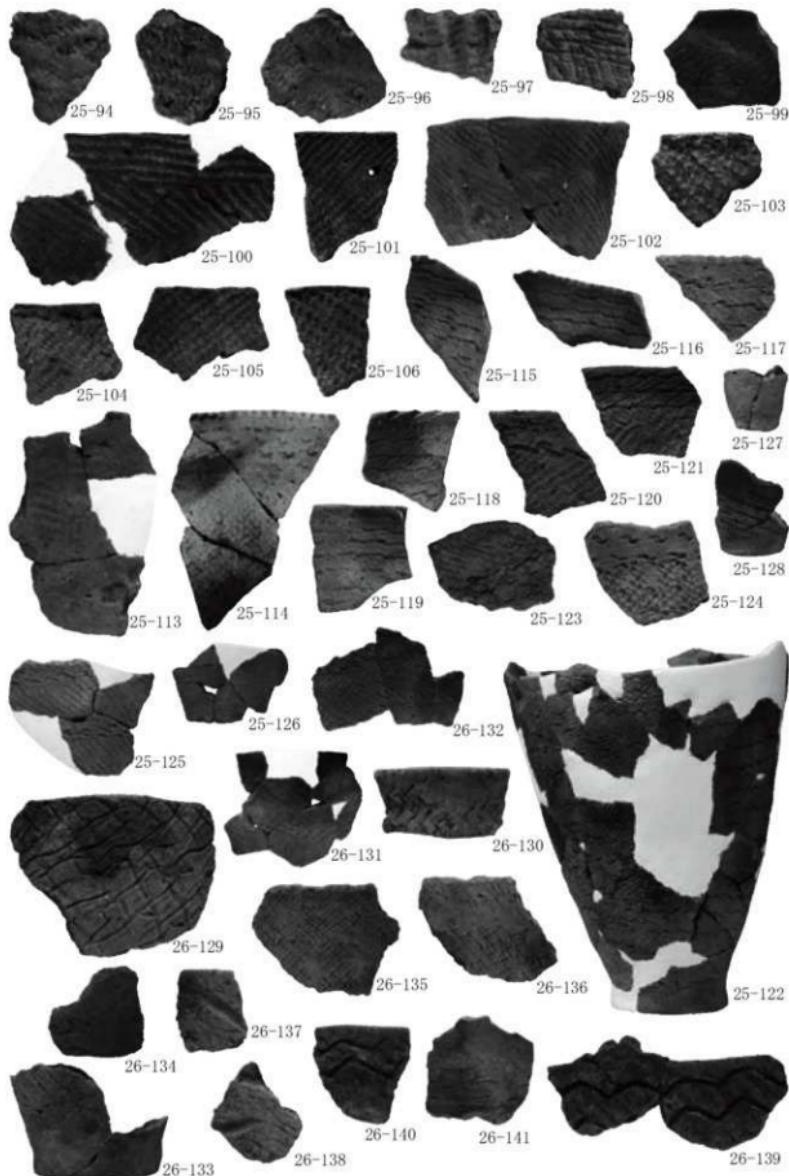


写真18 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(3)

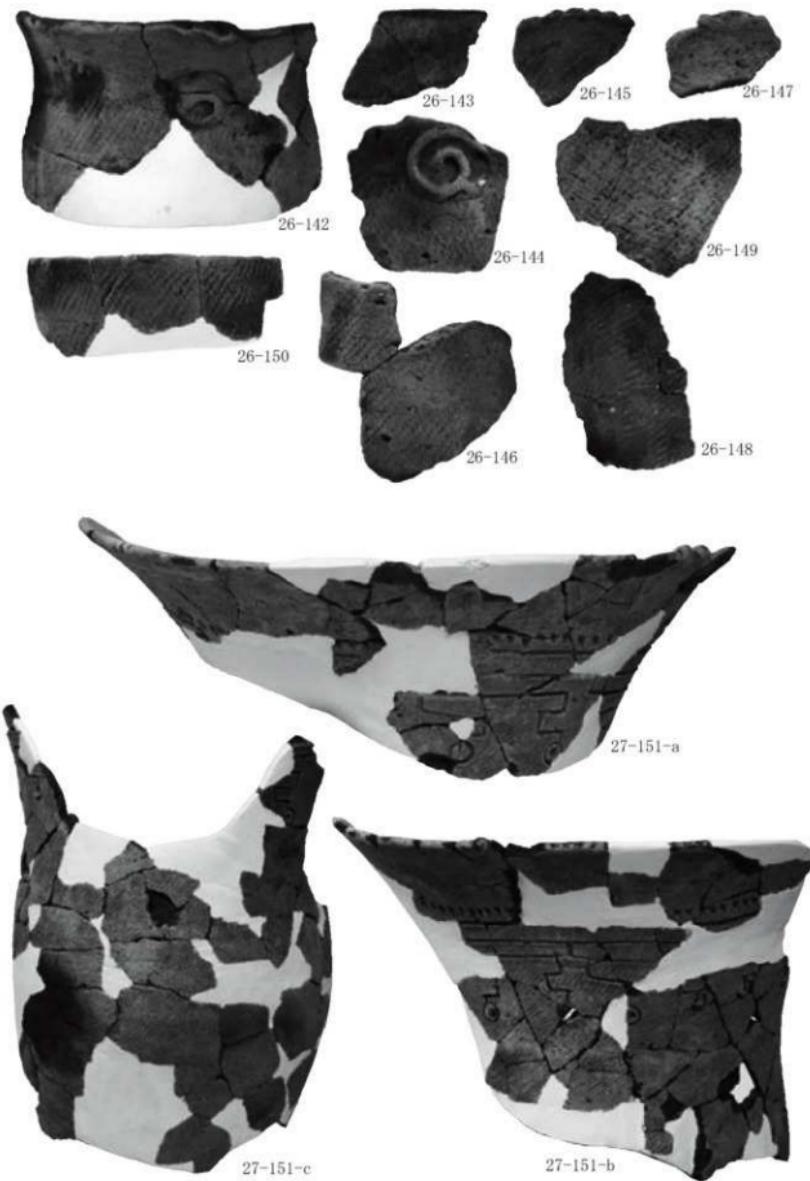


写真19 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(4)



写真20 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(5)

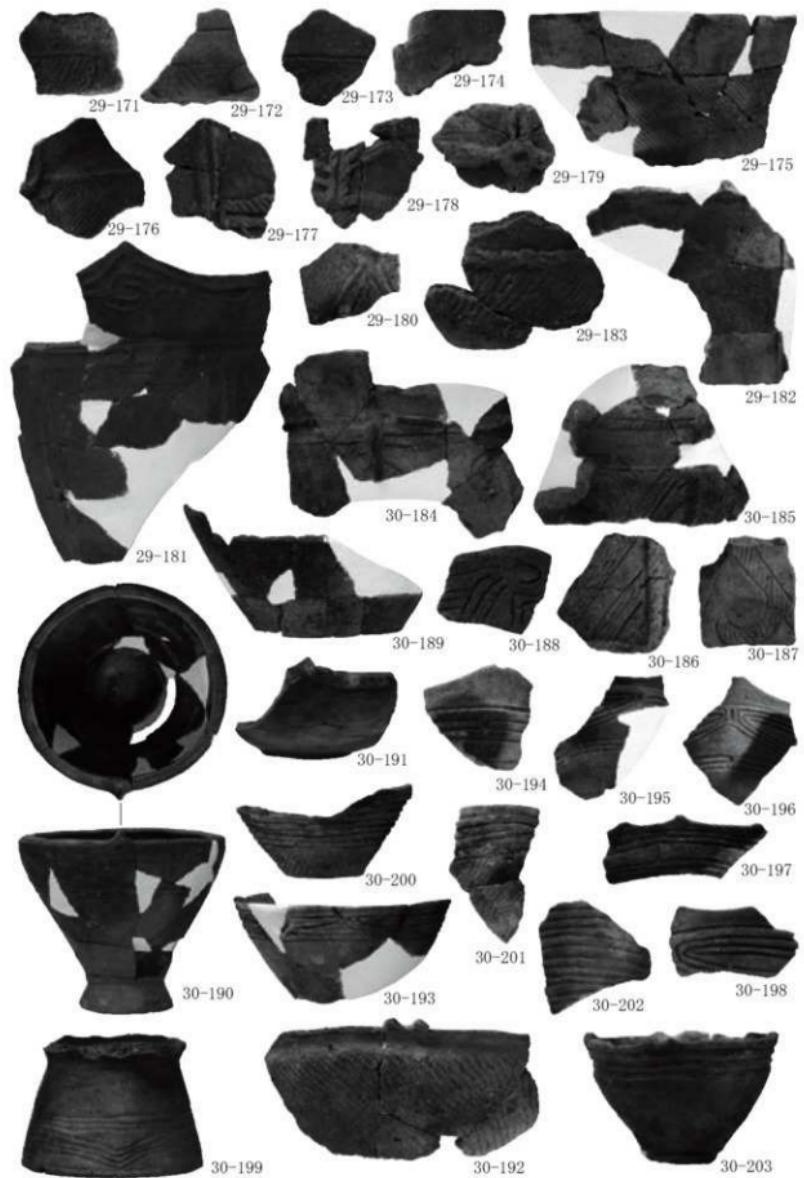


写真21 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(6)



写真22 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(7)

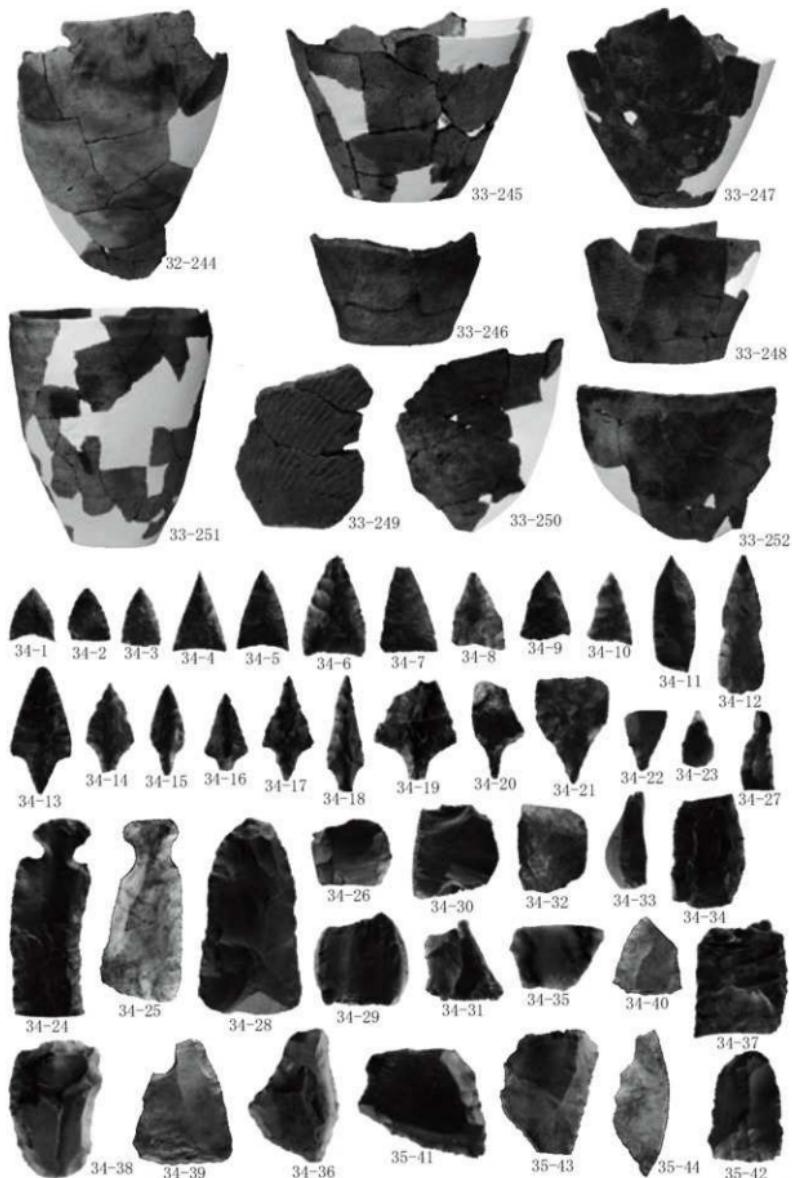


写真23 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(8)

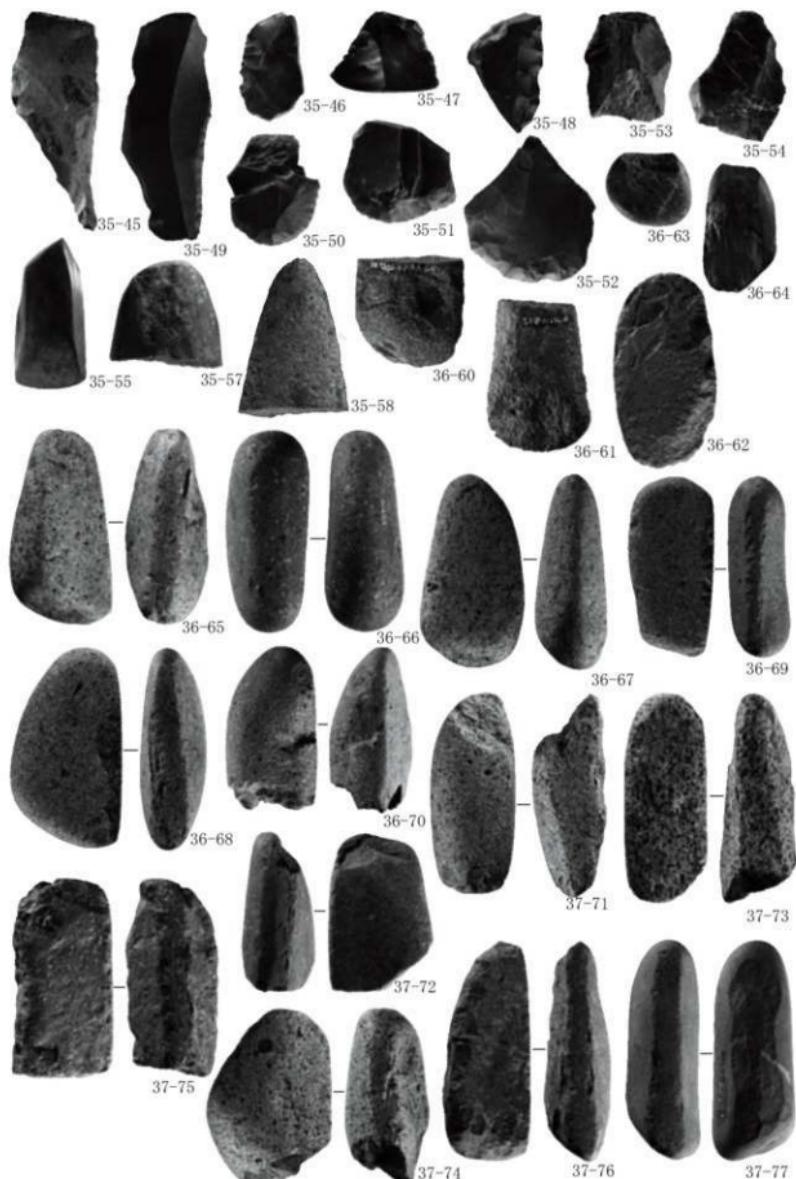


写真24 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(9)



写真25 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(10)

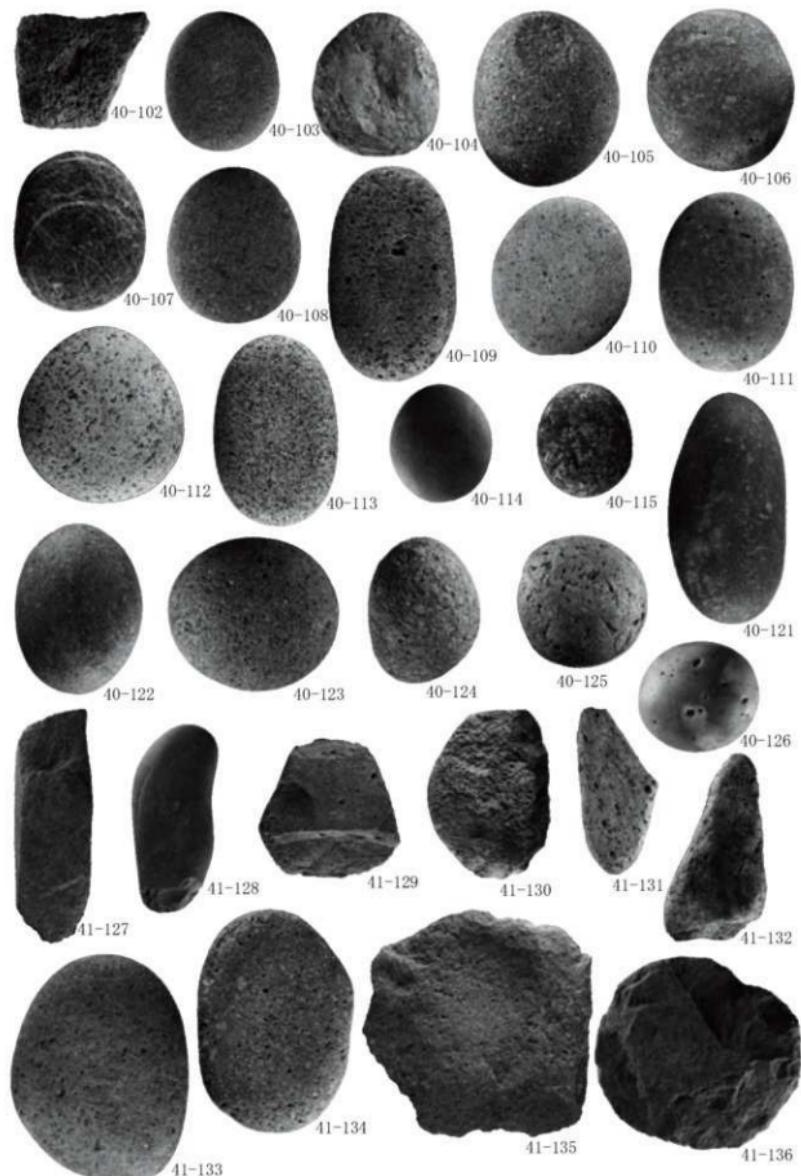


写真26 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(11)

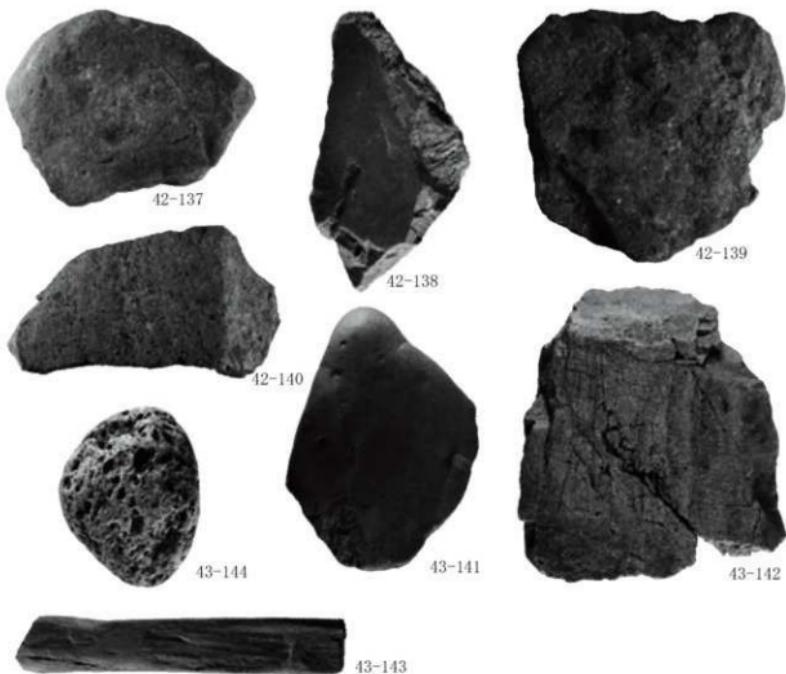


写真27 横沢山(1)遺跡遺構外出土遺物(12)

報告書抄録

ふりがな	あらやしきくほかっこにいせき・よこさわやまかっこいちいせき・よこさわやまかっこにいせき							
書名	荒屋敷久保(2)遺跡・横沢山(1)遺跡・横沢山(2)遺跡							
調書名	国道45号八戸南道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第465集							
編著者名	小川田 哲彦 平山 明寿							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2009年3月6日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系(JGD2000)				
				北緯	東経			
あらやしきくほかっこ 荒屋敷久保(2) 遺跡	あおもりけん八戸市 青森県三戸郡階上町大字浜字土はし 橋19-6付	02203	03283	40° 27' 44"	141° 36' 38"		12,000m ²	
				40° 27' 54"	141° 36' 25"			
よこざわやま 横沢山(1)遺跡	あおもりけんさんまのくちはし 青森県三戸郡階上町大字道仮字よこざわ 横沢山1-16外	02446	63076	40° 27' 44"	141° 37' 05"	20070424	6,800m ²	国道45号 八戸南道 路建設事 業に伴う 事前調査
				40° 27' 54"	141° 36' 53"	20071030		
よこざわやま 横沢山(2)遺跡	あおもりけんさんまのくちはし 青森県三戸郡階上町大字道仮字よこざわ 横沢山3-6外	02446	63079	40° 27' 36"	141° 37' 30"			
				40° 27' 46"	141° 37' 17"		2,258m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
荒屋敷久保(2) 遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代 古代 時期不明	土坑 溝状土坑 土坑 溝跡	3基 8基 4基 1条	縄文土器	落とし穴と思われる筒型の土坑		
横沢山(1)遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代 弥生時代 時期不明	土坑 溝状土坑 野外炉 集石遺構 焼土跡 炭窯	6基 22基 1基 6基 5基 5基	縄文土器・石器 弥生土器	日計式土器 長七谷地Ⅲ群土器 大木3式土器		
横沢山(2)遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代	土坑 溝状土坑	1基 1基	石器			
要約	荒屋敷久保(2)遺跡 平成19年度に新規登録された遺跡である。土坑・溝状土坑・溝跡が検出された。縄文時代の土坑は、落とし穴と思われる筒型のものである。それ以外の土坑は、出土した炭化材の年代から8世紀後葉～9世紀後半に廃棄された可能性がある。溝跡は調査区を横断するもので、比較的新しい時期の地塊と推定される。							
	横沢山(1)遺跡 遺跡は小川(松森川支流)に面した西～北向きの斜面とその上部の平坦面で、調査区は遺跡の北西端にある。調査区東側は遺構・遺物とも希薄であるが、中央では溝状土坑が密に検出され、西端では斜面に遺物包含層が形成されている。縄文時代早期から晩期、弥生時代までの遺物が出土しており、断続的ではあるが水きにわたり小川を利用していたものと思われる。特筆されるものは、縄文時代早期の目計式併行土器(魚骨回転土器)が調査区中央の平坦面から出土しているほか、西斜面包含層から大木3式土器が出土している。検出遺構は主に縄文時代の土坑・溝状土坑であることから、水場(小川)の利用のほか狩猟場としても使われている。							
	横沢山(2)遺跡 平成19年度に新規登録された。検出された遺構は、縄文時代の土坑と溝状土坑が各1基である。密度は低いが、縄文時代に狩猟場として利用されていたと考えられる。							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第465集

荒屋敷久保(2)遺跡
横沢山(1)遺跡
横沢山(2)遺跡

-国道45号八戸南道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書-

発行年月日 2009年3月6日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 所 長尾印刷株式会社

〒030-0931 青森市平新田字森越17-1

TEL 017-726-7121 FAX 017-726-9237



活彩あおもり